京都府遺跡調査報告集

第145冊

1．京都第二外環状道路関係遺跡（調子地区ａ）
　長岡京跡右京第946・969・1006次調査
2．木津川河床遺跡第20・21次

2011

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

(1)銅鐸形土製品

(2)風招

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは昭和56年４月に設立され、本年度で創立30年を迎えました。この間、当調査研究センターでは京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、平成19・20年度に国土交通省近畿地方建設局淀川河川工事事務所の依頼を受けて実施した木津川河床遺跡第20･21次、平成20～22年度に国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施した京都第二外環状道路関係遺跡（調子地区：長岡京跡右京第946・969・1006次調査）の発掘調査報告を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された国土交通省近畿地方建設局淀川河川工事事務所、国土交通省近畿地方整備局をはじめ、京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・（財）長岡京市埋蔵文化財センター・八幡市教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成23年３月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
理　事　長　　上　田　正　昭

例　　言

1．本書に収めた報告は下記のとおりである。

京都第二外環状道路関係遺跡(調子地区ａ)

長岡京跡右京第946・969・1006次調査

木津川河床遺跡第20・21次

2．遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺　跡　名	所　在　地	調査期間	経費負担者	執筆者
1．	平成20～22年度京都第二外環状道路関係遺跡(調子地区ａ) 長岡京跡右京第946・969・1006次調査	長岡京市調子２丁目	平成20年６月17日～平成21年２月17日、平成21年４月８日～12月22日、平成22年8月23日～10月28日	国土交通省近畿地方整備局	中川和哉、黒坪一樹、奈良康正
2．	木津川河床遺跡第20・21次	八幡市科手～橋本	平成19年10月30日～平成20年２月28日、平成20年11月13日～平成21年３月２日	国土交通省近畿地方建設局淀川河川工事事務所	伊野近富

3．本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第６座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4．本書の編集は、調査第２課調査担当者の編集原案をもとに、調査第１課資料係が行った。

5．現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第１課資料係主任調査員田中彰が行った。

本 文 目 次

1．京都第二外環状道路関係遺跡平成20～22年度発掘調査報告 …… 1
2．木津川河床遺跡第20・21次発掘調査報告 …… 75

挿 図 目 次

1．第二外環状道路関係遺跡

第１図　調子地区調査地配置図 …… 2
第２図　調査地及び周辺主要遺跡 …… 4
第３図　調子a地区遺構平面図 …… 6
第４図　調子a1地区土層断面図 …… 7
第５図　調子a地区遺構平面図 …… 8
第６図　調子a1地区木棺墓ＳＴ201平・断面図 …… 9
第７図　調子a1地区井戸ＳＥ244平・断面図 …… 10
第８図　調子a1地区掘立柱建物ＳＢ01、柱穴ＳＰ45・247平・断面図 …… 10
第９図　調子a1地区柱穴ＳＰ27・84・222、溝ＳＤ80・172・224、土坑ＳＫ251平・断面図 …… 12
第10図　調子a1地区土坑ＳＫ30・200平・断面図 …… 13
第11図　調子a1地区土坑ＳＫ78・181平・断面図 …… 14
第12図　調子a2地区土層断面図 …… 17
第13図　調子a2地区上層遺構（中近世）平面図 …… 18
第14図　調子a2地区下層遺構（中世・平安時代）平面図 …… 19
第15図　調子a2地区掘立柱建物跡ＳＢ01、
　　柵列ＳＡ02、土坑ＳＫ21、集石土坑ＳＸ31平・断面図 …… 20
第16図　調子a4-1地区土層断面図（１） …… 21
第17図　調子a4-1地区土層断面図（２） …… 22
第18図　調子a4-1地区上層遺構（中世）平面図 …… 23
第19図　調子a4-1地区掘立柱建物跡ＳＢ01平・断面図 …… 24
第20図　調子a4-1地区柱穴平・断面図 …… 25
第21図　調子a4-1地区下層遺構（古墳・弥生時代）平面図 …… 27
第22図　調子a4-1地区竪穴式住居跡ＳＨ561平・断面図 …… 28
第23図　調子a4-1地区竪穴式住居跡ＳＨ562・568・702平・断面図 …… 29
第24図　調子a4-1地区土坑ＳＫ356・565～567・640・641平・断面図 …… 30

第25図　調子a4-1地区土器埋納遺構ＳＸ614平・断面図……31
第26図　調子a4-2地区上層断面図……32
第27図　調子a4-2地区上層遺構(中世)平面図……33
第28図　調子a4-2地区下層遺構(弥生時代)平面図……34
第29図　調子a4-2地区掘立柱建物跡ＳＢ705平・断面図……35
第30図　調子a4-2地区土坑ＳＫ640・724・727・735平・断面図……36
第31図　調子a5地区平面図……37
第32図　調子a1地区出土土器(１)……38
第33図　調子a1地区出土土器(２)……40
第34図　調子a1地区出土土器(３)……42
第35図　調子a1地区出土土器(４)……44
第36図　調子a1地区出土土器(５)……46
第37図　調子a1地区出土土器(６)……48
第38図　調子a1地区出土土器(７)……50
第39図　調子a1地区出土土器(８)……52
第40図　調子a2地区出土土器(１)……53
第41図　調子a2地区出土土器(２)……55
第42図　調子a2地区出土瓦……56
第43図　調子a3地区出土土器……57
第44図　調子a4-1地区出土土器(１)……58
第45図　調子a4-1地区出土土器(２)……60
第46図　調子a4-1地区出土土器(３)……63
第47図　調子a4-1地区出土土器(４)……65
第48図　調子a4-2地区出土土器……66
第49図　調子地区出土金属製品……67
第50図　調子地区出土銭貨……68
第51図　調子地区出土石製品(１)……68
第52図　調子地区出土石製品(２)……69
第53図　調子地区出土石製品(３)……69
第54図　調子a1地区出土木製品(１)……70
第55図　調子a1地区出土木製品(２)……71
第56図　調子a1地区出土木製品(３)……72

２．木津川河床遺跡第20・21次

第１図　調査地位置図……76

第２図　第20・21次調査地位置図……80
第３図　第20次調査地平面図……81
第４図　第20次調査地東壁土層断面図……82
第５図　第20次調査地溝ＳＤ7053・7071平・断面図……83
第６図　第20次調査地掘立柱建物跡ＳＢ１・２、柵１平面図……84
第７図　第20次調査地動物遺体出土状況図(Ｃ３・４区)……85
第８図　第20次調査地トレンチ配置図……86
第９図　第20次調査地各トレンチ土層断面図……87
第10図　第20次調査出土遺物実測図(１)……88
第11図　第20次調査出土遺物実測図(２)……89
第12図　第20次調査出土遺物実測図(３)……90
第13図　第21次調査地平面図……93
第14図　第21次調査地南壁土層断面図(１)……94
第15図　第21次調査地南壁土層断面図(２)及び土坑ＳＫ8046・8047平面図……95
第16図　第21次調査井戸ＳＥ8020、土坑ＳＫ8040、骨５平面図……97
第17図　第21次調査出土遺物実測図(１)……98
第18図　第21次調査出土遺物実測図(２)……100
第19図　第21次調査出土遺物実測図(３)……101
第20図　河川改修図……103

付 表 目 次

２．木津川河床遺跡第20・21次

付表　木津川河床遺跡関係年表……77

図 版 目 次

１．京都第二外環状道路関係遺跡

図版第１　調子a1・3地区全景(上が北)
図版第２　調子a2地区全景(上が北)
図版第３　調子a4-1地区全景(上が東)
図版第４　調子a4-2地区全景(上が北)
図版第５　(1)調子a1地区木棺墓ＳＴ201遺物出土状況(上が南)

(2)調子a1地区木棺墓ＳＴ201全景(南から)
(3)調子a1地区木棺墓ＳＴ201全景(東から)
図版第６　(1)調子a1地区木棺墓ＳＴ201完掘状況(東から)
(2)調子a1地区井戸ＳＥ244全景(東から)
(3)調子a1地区井戸ＳＥ244断ち割り(東から)
図版第７　(1)調子a1地区井戸ＳＥ244井戸組西面(東から)
(2)調子a1地区井戸ＳＥ244井戸組東面(西から)
(3)調子a1地区井戸ＳＥ244井戸組南面(北から)
図版第８　(1)調子a1地区井戸ＳＥ244井戸組北面(南から)
(2)調子a1地区掘立柱建物跡ＳB01(西から)
(3)調子a1地区掘立柱建物跡ＳB01柱穴ＳＰ45(南から)
図版第９　(1)調子a1地区掘立柱建物跡ＳB01柱穴ＳＰ247(東から)
(2)調子a1地区柱穴ＳＰ27遺物出土状況(北東から)
(3)調子a1地区柱穴ＳＰ84遺物出土状況(南東から)
図版第10　(1)調子a1地区柱穴ＳＰ44遺物出土状況(南から)
(2)調子a1地区柱穴ＳＰ111遺物出土状況(南から)
(3)調子a1地区柱穴ＳＰ222遺物出土状況(南から)
図版第11　(1)調子a1地区土坑ＳＫ200全景(東から)
(2)調子a1地区土坑ＳＫ200遺物出土状況(北から)
(3)調子a1地区土坑ＳＫ30遺物出土状況(南から)
図版第12　(1)調子a1地区土坑ＳＫ41遺物出土状況(東から)
(2)調子a1地区土坑ＳＫ78遺物出土状況(西から)
(3)調子a1地区土坑ＳＫ175遺物出土状況(南から)
図版第13　(1)調子a1地区土坑ＳＫ181遺物出土状況(東から)
(2)調子a1地区土坑ＳＫ181完掘状況(西から)
(3)調子a1地区溝ＳＤ172全景(西から)
図版第14　(1)調子a2地区全景(南から)
(2)調子a2地区上層溝群(南東から)
(3)調子a2地区掘立柱建物跡ＳB01(北西から)
図版第15　(1)調子a2地区掘立柱建物跡ＳB01柱穴Ｐ１(南から)
(2)調子a2地区掘立柱建物跡ＳB01柱穴Ｐ３(南から)
(3)調子a2地区掘立柱建物跡ＳB01柱穴Ｐ６(南から)
図版第16　(1)調子a2地区土坑ＳＫ21(南から)
(2)調子a2地区集石土坑ＳＸ31(北から)
(3)調子a2地区溝ＳＤ30(南から)

図版第17　(1)調子a2地区溝ＳＤ30断面（南から）
(2)調子a3地区全景(北から)
(3)調子a3地区井戸ＳＥ01(北東から)
図版第18　(1)調子a4-1地区西部(東から)
(2)調子a4-1地区溝ＳＤ554(東から)
(3)調子a4-1地区土坑ＳＫ356～358全景(南から)
図版第19　(1)調子a4-1地区柱穴ＳＰ351(東から)
(2)調子a4-1地区柱穴ＳＰ352(東から)
(3)調子a4-1地区柱穴ＳＰ353・355(東から)
図版第20　(1)調子a4-1地区柱穴ＳＰ354(東から)
(2)調子a4-1地区柱穴ＳＰ360(東から)
(3)調子a4-1地区柱穴ＳＰ467(東から)
図版第21　(1)調子a4-1地区柱穴ＳＰ469(東から)
(2)調子a4-1地区掘立柱建物跡ＳＢ01(西から)
(3)調子a4-1地区掘立柱建物跡ＳＢ01(北から)
図版第22　(1)調子a4-1地区竪穴式住居跡ＳＨ562(南東から)
(2)調子a4-1地区竪穴式住居跡ＳＨ562・568(南東から)
(3)調子a4-1地区竪穴式住居跡ＳＨ561遺物出土状況(南から)
図版第23　(1)調子a4-1地区竪穴式住居跡ＳＨ561(北西から)
(2)調子a4-1地区竪穴式住居跡ＳＨ561東隅部(北西から)
(3)調子a4-1地区竪穴式住居跡ＳＨ702(北から)
図版第24　(1)調子a4-1地区土坑ＳＫ565・566・640(西から)
(2)調子a4-1地区土坑ＳＫ567(北から)
(3)調子a4-1地区土器埋納遺構ＳＸ614(北から)
図版第25　(1)調子a4-2地区南部(西から)
(2)調子a4-2地区北部(南から)
(3)調子a4-2地区掘立柱建物跡ＳＢ705(西から)
図版第26　(1)調子a4-2地区掘立柱建物跡ＳＢ705柱穴Ｐ１(東から)
(2)調子a4-2地区掘立柱建物跡ＳＢ705柱穴Ｐ２(南から)
(3)調子a4-2地区掘立柱建物跡ＳＢ705柱穴Ｐ３(東から)
図版第27　(1)調子a4-2地区掘立柱建物跡ＳＢ705柱穴Ｐ５(東から)
(2)調子a4-2地区掘立柱建物跡ＳＢ705柱穴Ｐ７(東から)
(3)調子a4-2地区掘立柱建物跡ＳＢ705柱穴Ｐ８(東から)
図版第28　(1)調子a4-2地区掘立柱建物跡ＳＢ705柱穴Ｐ９(東から)
(2)調子a4-2地区掘立柱建物跡ＳＢ705柱穴Ｐ11(南西から)

(3)調子a4-2地区土坑ＳＫ709(北から)
図版第29　(1)調子a4-2地区土坑ＳＫ640(南から)
(2)調子a4-2地区土坑ＳＫ765(北から)
(3)調子a4-2地区土坑ＳＫ724(東から)
図版第30　(1)調子a4-2地区土坑ＳＫ727(東から)
(2)調子a4-2地区土坑ＳＫ735(東から)
(3)調子a4-2地区土坑ＳＫ737(東から)
図版第31　(1)調子a5地区全景(北から)
(2)調子a5地区全景(南から)
(3)調子a5地区井戸ＳＥ01(南から)
図版第32　出土遺物１
図版第33　出土遺物２
図版第34　出土遺物３
図版第35　出土遺物４
図版第36　(1)出土遺物５
(2)出土遺物６
図版第37　(1)出土遺物７
(2)出土遺物８
図版第38　(1)出土遺物９
(2)出土遺物10
図版第39　(1)出土遺物11
(2)出土遺物12
図版第40　井戸ＳＥ244部材

２．木津川河床遺跡第20・21次

図版第１　(1)第20次調査地全景(北東から)
(2)第20次調査地全景(西から)
(3)第20次調査地全景(上が北)
図版第２　(1)第20次調査地全景(北西から)
(2)第20次調査地重機掘削状況(東から)
(3)第20次調査地上層人力掘削状況(東から)
図版第３　(1)第20次調査地上層全景(東から)
(2)第20次調査地上層東部(東から)
(3)第20次調査地上層土坑ＳＫ7003(右：南から)
図版第４　(1)第20次調査地上層西部(東から)

(2)第20次調査地上層掘削状況(西から)
(3)第20次調査地上層全景(東から)
図版第５　(1)第20次調査地上層足跡・Ｂ２区(西から)
(2)第20次調査地南壁東部土層断面(北西から)
(3)第20次調査地南壁東部土層断面噴砂と杭跡(北から)
図版第６　(1)第20次調査地南壁西部Ｃ２区土層断面・噴砂(北から)
(2)第20次調査地東壁土層断面(南西から)
(3)第20次調査地下層全景(西から)
図版第７　(1)第20次調査地下層西部掘立柱建物跡全景(南から)
(2)第20次調査地下層西部掘立柱建物跡柱穴(西から)
(3)第20次調査地下層西部溝跡全景(南から)
図版第８　(1)第20次調査地下層中央部(南から)
(2)第20次調査地下層中央部土層断面(北から)
(3)第20次調査地下層湿地調査状況(北西から)
図版第９　(1)第20次調査地下層湿地土層断面(北東から)
(2)第20次調査地下層全景(東から)
(3)第20次調査地下層湿地内遺物検出状況(北から)
図版第10　(1)第20次調査地下層湿地内馬の歯検出状況(北から)
(2)第20次調査地下層湿地内獣骨検出状況(北から)
(3)第20次調査地下層中央～東部(南西から)
図版第11　(1)第20次試掘調査地第１トレンチ全景(東から)
(2)第20次試掘調査地第２トレンチ全景(東から)
(3)第20次試掘調査地第３トレンチ全景(東から)
図版第12　(1)第20次試掘調査地第４トレンチ調査風景(北から)
(2)第20次試掘調査地第５トレンチ断ち割り(北から)
(3)第20次試掘調査地第６トレンチ断ち割り(北から)
図版第13　(1)第20次出土遺物１
(2)第20次出土遺物２
図版第14　(1)第21次調査地全景(北から)
(2)第21次調査地重機掘削状況(北東から)
(3)第21次調査地全景(東から)
図版第15　(1)第21次調査地南壁土層断面(北から)
(2)第21次調査地上層西部(西から)
(3)第21次調査地上層東部(南西から)
図版第16　(1)第21次調査地下層調査状況(北東から)

(2) 第21次調査地下層西部(南西から)
(3) 第21次調査地下層東部(南東から)
図版第17　(1) 第21次井戸検出状況(南から)
(2) 第21次井戸土層断面(南から)
(3) 第21次井戸完掘状況(南から)
図版第18　(1) 第21次土坑ＳＫ8046獣骨検出状況(南西から)
(2) 第21次土坑ＳＫ8040獣骨検出状況(南西から)
(3) 第21次Ｂ７区獣骨検出状況(西から)
図版第19　(1) 第21次獣骨検出状況(北から)
(2) 第21次調査地西部溝(北から)
(3) 第21次調査地西部溝断面(北から)
図版第20　(1) 第21次出土遺物１
(2) 第21次出土遺物２

1.京都第二外環状道路関係遺跡
平成20 ～ 22年度発掘調査報告
（調子地区ａ）

1．はじめに

今回の発掘調査は、京都西南部の渋滞を緩和する目的で計画された京都第二外環状道路敷設に先立ち、国土交通省近畿地方整備局の依頼によって実施されたものである。道路は長岡京市域では長岡京市南部を東西に流れる小泉川にそって山間部に至るルートが予定されている。

このルートは桓武天皇によって造営された長岡京跡域南部に当たる地域を横切ることから、ほぼ全域にわたり発掘調査が必要であると考えられた。同時に小泉川は現在、河川改修によって直線状に流路が変更されているが、本来は大きく蛇行しながら流れていた。そのため河川の氾濫によってすでに遺構面が削平されている可能性も指摘できた。発掘調査の必要なか所を特定することを目的に、平成15年から試掘調査を先行して、調査可能な地域から順次小面積の調査を行うと共に、面的な調査が必要な地域には本格的な発掘調査を実施してきた（岩松ほか2005、岩松ほか2006、岩松ほか2007、戸原・岩松・竹井2008、中川・大本2009、中川・戸原・岡崎ほか2009、岡崎ほか2010）。

今回報告する発掘調査地は、長岡京市調子２丁目に所在する。調子地区の調査前は、水田として利用されていた。調査対象区域の中央部に里道があり、その北側をａ・ｃ地区、南側をｂ地区と名づけた。平成21年度調査は、現地調査については西日本高速道路株式会社（NEXCO）の依頼によって実施されたが、遺物整理については国土交通省が経費を負担し、20年度、22年度の発掘成果とあわせて今回報告する。

本報告書は中川・黒坪・奈良が執筆し、中川が取りまとめを行った。また、執筆か所については文末に明示した。

本報告書で使用した国土座標は、現地記録も含め第Ⅳ系（日本測地系）を使用した。土層および遺物の色調は農林水産技術会議監修の『新版標準土色帖』を用いた。

発掘調査、報告に当たっては、長岡京市教育委員会、（財）長岡京市埋蔵文化財センター職員のご指導と御助言をいただいた。また、現地調査については、地元調子地区自治会、調子地区農業組合、調子地区まちづくり協議会の皆様にご支援をいただいた。記してお礼申し上げます。

平成20年度（長岡京跡右京第938次・946次調査）

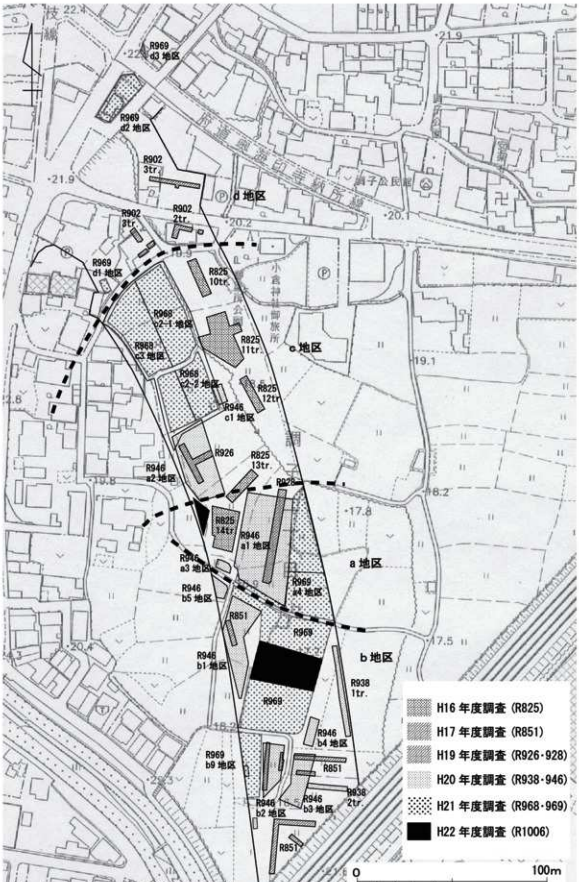
現地調査責任者　調査第２課長　肥後弘幸

調 査 担 当 者　調査第２課第２係長　森　正

同　主任調査員　竹原一彦・中川和哉・森島康雄

同　専門調査員　黒坪一樹

調　査　場　所　長岡京市調子２丁目



第1図　調子地区調査地配置図

現地調査期間　平成20年６月17日～平成21年２月17日
調　査　面　積　3,220㎡（ｂ地区も含む）

平成21年度（長岡京跡右京第968次・969次調査）
現地調査責任者　調査第２課長　肥後弘幸
調 査 担 当 者　調査第２課第２係長　森　正
同　主任調査員　引原茂治・戸原和人・竹原一彦
同　調査員　奈良康正
調　査　場　所　長岡京市調子２丁目
現地調査期間　平成21年４月８日～12月22日
調　査　面　積　2,230㎡（ｂ地区も含む）

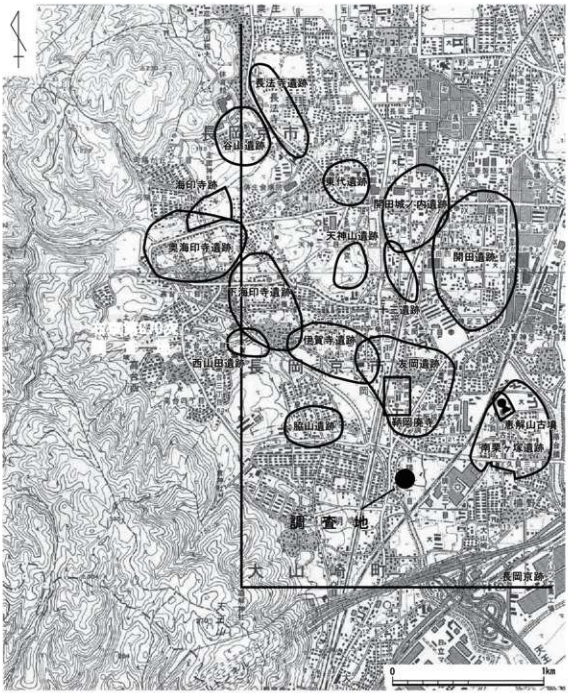
平成22年度（長岡京跡右京第1006次調査）
現地調査責任者　調査第２課長　肥後弘幸
調 査 担 当 者　第２課主幹第２係長事務取扱　石井清司
同　次席総括調査員　田代　弘
同　主任調査員　竹原一彦・増田孝彦・中川和哉
調　査　場　所　長岡京市調子２丁目
現　地　調　査　平成22年8月23日～ 10月28日
調　査　面　積　750㎡（ｂ地区も含む）

２．自然と歴史

調査地は、京都盆地南西部に位置する長岡京市の南部にあたる地域にある。西側には、京都盆地を形成する山が迫り、この山は丹波方面へと連なる。この山塊は丹波帯と呼ばれる古生層からなりたっており、チャートや粘板岩などが分布している。この山塊に源を発する小泉川左岸に遺跡はある。現在の小泉川は、河川改修によって直線状に改修されているが、本来は大きく蛇行しており、それに対応するように川の両側に氾濫原も大きく広がっている。川は長岡京市域から大山崎町を経て、大阪湾に注ぐ淀川と合流する。

今回の調査区は、現在は小泉川の東側に位置しているが、調査地の西側にも河川状の堆積があり、ちょうど中洲状に残されていたと考えられる。この微高地については、沖積段丘面の削り残し、あるいは自然堤防の可能性が指摘できる。形成時期は出土遺物から縄文時代以前と考えられる。

小泉川流域では後期旧石器時代から遺跡が認められる。南栗ヶ塚遺跡では、旧石器時代後期に属するサヌカイト製のナイフ形石器を含む石器群が検出された。この石器には、接合資料も認められ、この地域では珍しく本来の包含層が残されていた。



第２図　調査地及び周辺主要遺跡(国土地理院 1/25,000 京都西南部・淀)

縄文時代には小泉川流域で多くの遺跡が発見されている。最も古い時期の土器は、下海印寺遺跡から発見された早期のポジティブな押型文土器片である。早期に属するチャート製いわゆるトロトロ石器が俗遺跡から出土している。前期には南栗ヶ塚遺跡から北白川下層式の縄文土器が住居跡に伴って出土している。

調査地の北にある友岡遺跡(右京第325次調査地点)から、段丘斜面に投棄された状態で、中期の船元式土器が大量に出土した。友岡遺跡の北西にある伊賀寺遺跡では、中期末の北白川C式の時期の竪穴式住居跡６棟および遺物が検出されている。また、大山崎町脇山遺跡(高野1997)でも

北白川C式土器を含む土坑が検出されている。

後期初頭については、中津式土器は伊賀寺遺跡で、後期縁帯文期は伊賀寺遺跡・下海印寺遺跡で遺構・遺物が発見されている。後期後葉の元住吉式土器を伴う竪穴式住居跡は、伊賀寺遺跡で確認されている。また、同時期の墓壙も発見された。そのうち２か所からは多量の焼骨が発見され、供献土器と考えられる注口土器や玉が出土している。

縄文時代晩期に入ると、小泉川下流の大山崎町下植野南遺跡において凸帯文の甕棺が検出されている。

弥生時代前期の遺構は小泉川流域では発見されていないが、碇遺跡や調査地の南の松田遺跡で土器が出土している。弥生時代中期前葉には南栗ヶ塚遺跡や下植野南遺跡で方形周溝墓群が発見されている。両遺跡とも石製武器が出土した埋葬施設が確認された。中期後葉の土器は碇遺跡から発見されている。弥生時代末の竪穴式住居跡は伊賀寺遺跡や下海印寺遺跡で発見されている。伊賀寺遺跡（右京第902次調査）ではベット状遺構を持つ多角形の竪穴式住居跡である。

古墳時代には下流に境野１号墳と呼ばれる全長約62ｍの前方後円墳が存在している。古墳時代前期に築造され、段築と埴輪列が確認されている。古墳時代後期に入ると多くの竪穴式住居跡が伊賀寺遺跡・下海印寺遺跡内の随所で確認されている。同じように下植野南遺跡・松田遺跡においても５世紀後半から６世紀にかけての竪穴式住居跡が多数発見されている。

飛鳥時代の遺物が出土する鞆岡廃寺の存在が古くから知られていた。正確な位置は確認されていないが、飛鳥時代から長岡京期に至る瓦が発見されている。出土瓦には「田辺史牟也毛」と線刻されたものがあり、渡来系氏族である田辺氏との関係が注目されている。

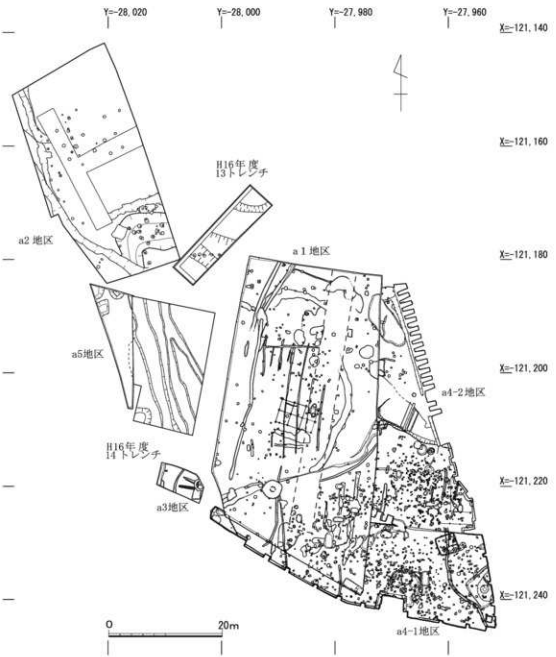
奈良時代の建物としては、掘立柱建物などが伊賀寺遺跡や下海印寺遺跡、下植野南遺跡などで発見されている。

長岡京市の平野部の大部分を占める長岡京は、延暦３（784）年に桓武天皇によって平城京から遷都され、延暦13（794）年に平安京に遷るまで都として機能していた。長岡京の造営は10年と短く、七条より南の地域で明確な条坊は発見されていない。今回の発掘地域は、右京九条二坊一・二町にあたるため、条坊の発見が期待されたが、明確な長岡京期の遺構は検出できなかった。

中世に入ると今回の調査地は「調子荘」として登場する。この調子荘は調子氏の根本所領である。調子氏は本姓を下毛野氏と言い、東国の土豪を祖先とする奈良時代末以来の宮廷武官の家柄である。10世紀には近衛府の下級官人を世襲し、源頼光四天王の１人である坂田金時のモデルとなった「公時」を輩出した。後に院の随身を務め、摂関家の随身としても活躍する。調子氏がいつの時点で調子に住み着いたかは不明であるが、『近衛家所領目録』において建長５（1257）年に「普賢寺殿（近衛基通）の時、武守寄進する」とあり、13世紀前半に寄進されたことがわかる。

調査地域の旧小字名は「八角」と言い、地元では八角堂がかつて存在しその名にちなんだという話が語られている。しかしながら、至徳３（1386）年の『法皇寺知事某請文』に調子荘内の土地が法皇寺（乙訓寺）に寄進され、法皇寺にあった八角堂の下地とされていた。これにちなみ地名がつけられたものと考えられる。

この地域の所在する微高地上に古代から現代まで都から西国に通じる西国街道が通っている。交通の要衝となることから多くの歴史的事象の舞台になってきた。そのもっとも有名なものは山崎合戦である。天正十年六月二日、明智光秀が主君織田信長に対して京都本能寺において謀反を起こした。備中高松城において毛利軍と交戦中であった羽柴秀吉は講和し、六月十三日には山崎の合戦が行われる。後の世に言う「中国大返し」である。調子地区は明智側の陣が敷かれた場所である。『太閤記』に準拠した長岡京市史本文編では、諏訪飛騨守・御牧三左衛門尉が着陣した場所として復元されている。



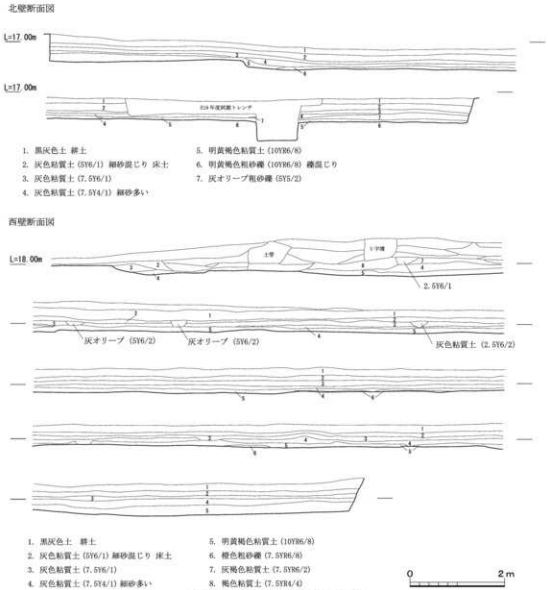
第３図　調子a地区遺構平面図

3．各地区の検出遺構

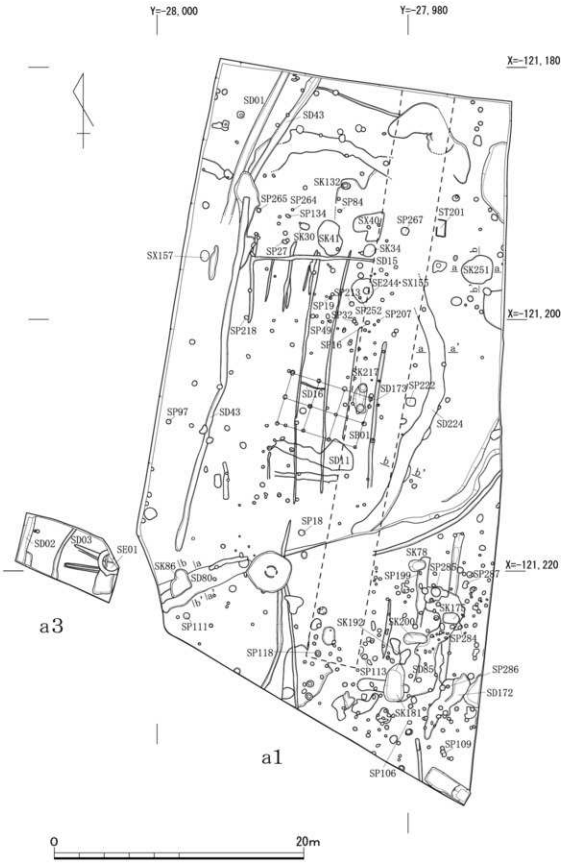
1）長岡京跡右京第946次（7ANRHK-7）　a1地区

（1）調査概要

発掘調査の結果、若干の検出面の高さの違いによって上下２つの遺構面が確認できたが、上層での遺構検出作業が困難で、下層遺構面で発見されるものも少なくなかった。そのため第５図では、上下面での遺構を１枚の図面で表現した。上層で検出した顕著な遺構は、東西・南北に走る素掘りの溝である。染付などが出土することから江戸時代以降の耕作溝と考えられる。下層では、調査区南東部において弥生時代の遺構が検出できた。南東部以外では弥生時代の遺構はなく、平安時代末以後の遺構しか検出できなかった。これは、弥生時代以後、中世以前に河川の侵食によって南東部以外の遺構面が削られ、それ以後に堆積した地層によって中央部より北側の地層が構成されたためと推測される。



第４図　調子a1地区土層断面図



第5図　調子a地区遺構平面図

(2)層位(第4図)

発掘調査前は、水田として利用されていた。耕作土が最上位にあり、その下に水平の薄い灰色粘質土層が数枚堆積している。この灰色粘質土(4層)の上面で溝等が検出されている。多くの遺構は5層上面で確認できた。部分的に5層のないところもあり、6層上面での検出になったところも少なくない。図化した断面では6層以下は弥生時代中期よりは古くならない河川堆積物によって構成されていた。

(3)検出遺構(第5図)

①中世

木棺墓ＳＴ201(第6図)　北東部で検出した長方形の掘形を持つ木棺直葬墓である。掘形の一部は長岡京跡右京第927次調査時の壁の崩落によって失われていたが、3か所の隅部から東西1m、南北1.7mの規模を持つことがわかる。側板、小口板は針葉樹の柾目の板を用い、板の上側は腐食のため欠損している。残存した部分から、角部は三枚組接によって作られていると考えられる。長側板底面近くの3か所に枘を穿ち、そこに針葉樹棒状の材を横桟として設け、その上に底板をのせていた。木棺の内法は南北1.25m、東西0.6mで、残存している高さは15cmである。出土遺物は土師器皿が北小口部分で出土している。土師器皿は棺内と棺外から出土している。棺外のほうが出土位置が高い。

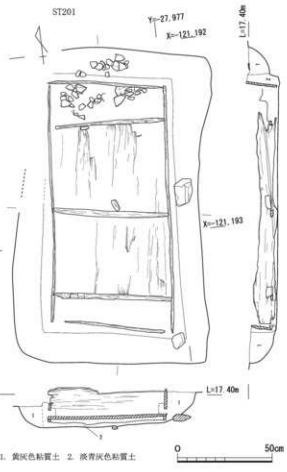
井戸ＳＥ244(第7図)　中央区北寄り検出した。円形の掘形を持っており、途中で段がつき径が小さくなる。

井戸の構造は縦板横桟留めである。縦板は広葉樹の板が用いられ、厚さ5cm前後で、1つの面が2枚ないしは3枚の板で構成されていた。板材の内側に設けられた横桟は、棒状の材の両端を加工し、組み合わされている。

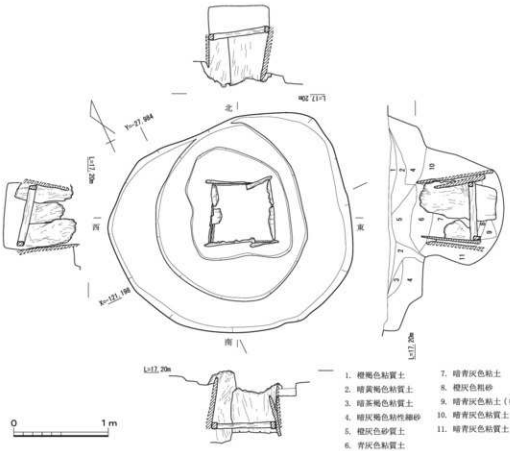
掘立柱建物跡ＳＢ01(第8図)　調査地中央部で検出した3間×2間の総柱の掘立柱建物跡である。柱間は東西約1.7～1.8m、南北約1.6～1.8m、建物主軸は北で約16度東に振る。出土遺物から12世紀の建物と考えられる。

柱穴ＳＰ18　中央南部で検出した。平面形が円形で直径30cm、検出面からの深さ20cmの柱穴である。

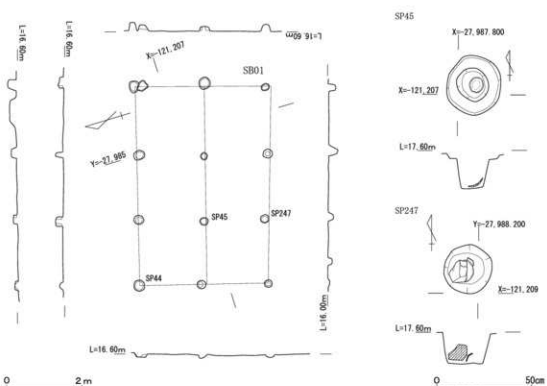
柱穴ＳＰ19　中央部で検出した。平面形



第6図　調子a1地区木棺墓ＳＴ201平・断面図



第７図　調子a1地区井戸ＳＥ244平・断面図



第８図　調子a1地区掘立柱建物ＳＢ01、柱穴ＳＰ45・247平・断面図

が円形で直径30cm、検出面からの深さ45cmの柱穴である。

柱穴ＳＰ27(第９図)　北西部で検出した。平面形が楕円形で、長軸40cm、短軸30cmで検出面からの深さ10cmの柱穴である。内部から滑石製の紅皿が出土している。

柱穴ＳＰ32　ＳＰ19の東側で検出した。平面形が円形で直径20cm、検出面からの深さ20cmの柱穴である。

柱穴ＳＰ84(第９図)　ＳＰ32の北で検出した。平面形が円形で直径20cm、検出面からの深さ20cmのは柱穴である。

柱穴ＳＰ97　西端で検出した。平面形が円形で直径40cm、検出面からの深さ15cmの柱穴である。

柱穴ＳＰ109　南東隅で検出した。平面形が円形で直径30cm、検出面からの深さ30cmの柱穴である。

柱穴ＳＰ111　南西隅部で検出した。平面形が長方形で長辺45cm、短辺45cmで検出面からの深さは５cmである。柱痕が検出できないため土坑の可能性がもある。

柱穴ＳＰ113　南端近くで検出した。平面形が円形で直径20cm、検出面からの深さ20cmの柱穴である。

柱穴ＳＰ134　北西部で検出した。平面形が楕円形で長軸30cm、短軸20cmで、検出面からの深さ10cmの柱穴である。

柱穴ＳＰ199　ＳＫ78の南で検出した。平面形が円形で直径20cm、検出面からの深さ10cmの柱穴である。

柱穴ＳＰ207　ＳＰ32の東で検出した。平面形が円形で規模30cm、検出面からの深さ15cmの柱穴である。

柱穴ＳＰ213　ＳＰ19の北側で検出した。平面形が楕円形で長軸50cm、短軸30cmで検出面からの深さ５cmの柱穴である。

柱穴ＳＰ218　西部で検出した。平面形が円形で直径30cm、検出面からの深さ15cmの柱穴である。

柱穴ＳＰ222(第９図)　中央部東寄りで検出した。平面形が方形で一辺70cm、検出面からの深さ50cmの柱穴である。

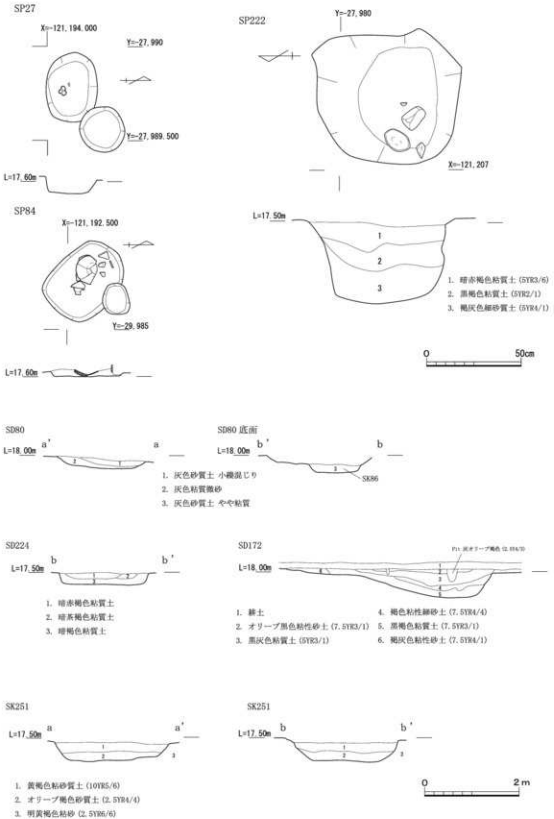
柱穴ＳＰ252　ＳＥ244の埋土を切る柱穴で、直径30cm、深さ10cmの柱穴である。

柱穴ＳＰ264　北西部で検出した。平面形が円形で直径30cm、検出面からの深さ15cmの柱穴である。

柱穴ＳＰ265　ＳＰ264の西にある。平面形が円形で直径25cm、検出面からの深さ10cmの柱穴である。

柱穴ＳＰ267　ＳＴ201の西で検出した。平面形が円形で直径60cm、検出面からの深さ35cmの柱穴である。

柱穴ＳＰ287　東端で検出した。平面形が円形で直径25cm、検出面からの深さ15cmの柱穴で



第９図　調子a1地区柱穴ＳＰ27・84・222、溝ＳＤ80・172・224、土坑ＳＫ251平・断面図

ある。

土坑ＳＰ16　中央部で検出した平面形が楕円形の土坑である。長軸0.3m、幅0.2m、検出面からの深さは10cmを測る。

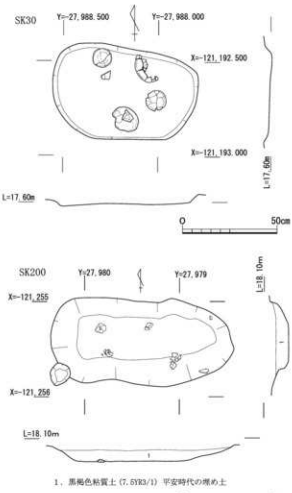
土坑ＳＫ30（第10図）　北西部で検出した。隅丸長方形を呈した土坑で、長辺80cm、短辺50cm、検出面からの深さは10cmを測る。完形に近い土器が出土している。

土坑ＳＫ34　ＳＥ244の北で検出した。平面形が円形の土坑で、直径１m、深さ10cmを測る。

土坑ＳＫ41　中央北寄りで検出した。楕円形の平面形を持つ土坑で、長軸2.6m、短軸２m、検出面からの深さ15cmを測る。

土坑ＳＫ132　北寄りで検出した。楕円形の平面形を持つ土坑で、長軸70cm、短軸50cm、検出面からの深さ15cmを測る。

土坑ＳＫ200（第10図）　南東部で検出した。長楕円形の平面形を持つ土坑で、長軸２m、短軸80cm、検出面からの深さ20cmを測る。



第10図　調子a1地区土坑ＳＫ30・200平・断面図

土坑ＳＫ217　ほぼ中央部で検出した。長楕円形の平面形を持つ土坑で、長軸2.5m、短軸１m、検出面からの深さ25cmを測る。

土坑ＳＫ251（第９図）　東端付近で検出した。平面形が円形の土坑で、直径2.3m、深さ50cmの規模を測る。

窪み状の遺構ＳＸ40　ＳＫ34の北で検出した不定形の浅い窪み状の遺構で、地形の落ち込んだ部分と考えられる。検出面からの深さは５cm程度で、輪郭ははっきりとしなかった。

窪み状の遺構ＳＸ155　中央部やや北側のＳＥ244直上で検出した。ＳＥ244検出以前に上層で検出した窪み状の遺構で、地形の落ち込みと考えられる。人為的な遺構である可能性は少ない。

窪み状の遺構ＳＸ157　中央部西辺で検出した。長楕円形の平面形を持つ浅い落ち込み状の遺構で、長軸1.5m、短軸１m、検出面からの深さ５cmを測る。

溝ＳＤ01　北端で検出した。ＳＤ43の西側にほぼ平行する南北方向の溝で、検出長10m、幅50cm、検出面からの深さ10cmを測る。

溝ＳＤ11　ＳＢ01南側にある「L」字状の溝である。東西６mの規模を測り、検出面からの深さは10cmである。

溝ＳＤ15　中央部北寄りで検出した。東西方向の溝で、耕作溝と考えられる南北方向の溝群

と直交することから、耕作に関連した溝と考えられる。検出長約18m、幅40cm、深さ５cmである。

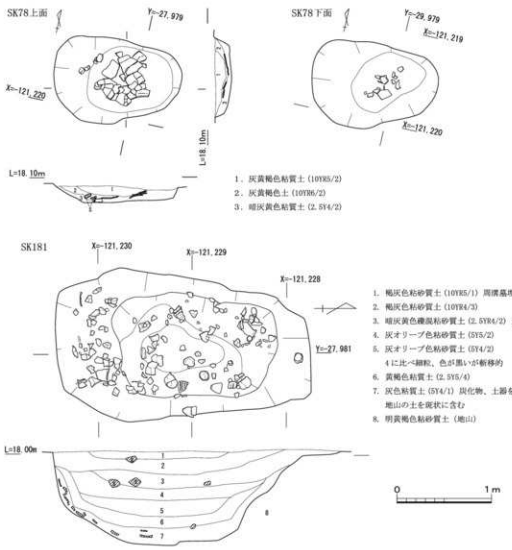
溝ＳＤ16　中央部で検出した。東西方向の溝で、耕作溝と考えられる南北方向の溝群と直交することから、耕作に関連した溝と考えられる。検出長約２m、幅40cm、深さ５cmである。

溝ＳＤ43　西端付近で検出した。南北方向の溝で、調査前の畦と重複する位置に存在する。検出長40m、幅40cm、深さ10cmを測る。

溝ＳＤ80（第９図）　古墳時代以前の遺構が残る調査区南東部と、古墳時代以後に安定した部分を区分する溝である。水田耕作以前は調査区南東部が高い地形であったと考えられる。幅１m、深さ10cmを測る。

溝ＳＤ173　ほぼ中央部で検出した。南北方向の溝で、この溝の西側には平行する数条の溝が存在することから耕作に伴う溝と考えられる。検出長は11m、幅30cm、深さ５cmを測る。

溝ＳＤ224（第９図）　ほぼ中央部で検出した。調査区を南北方向に蛇行する溝で、検出長21m、幅１m深さ15cmを測る。



第11図　調子a1地区土坑ＳＫ78・181平・断面図

②弥生時代

溝ＳＤ85　南東部で検出した。北側で西に曲がる平面「Ｌ」字状の溝である。断面形は浅く立ちあがる皿状である。埋土内から弥生土器片が出土している。形状から見ると方形周溝墓の周溝の残欠である可能性が指摘できる。

溝ＳＤ172(第９図)　南東部で検出した。北側で東に曲がる溝である。検出面では溝状に見えたが、掘削を行うと、２つの土坑が連なる形状を呈するようになった。平面形からは方形周溝墓の周溝の可能性が指摘できるが、底面が凹凸のある形状で確定できない。その方向や位置関係から、ＳＤ85と関連する遺構と推測される。

土坑ＳＫ78(第11図)　南東部で検出した。平面形が西側のほうがやや広い楕円形を呈する土坑である。断面の観察から、土坑が掘削された後に土の堆積が若干みられ、その後土器が土坑内に堆積している。土器はすべて平らな状態で出土している。

土坑ＳＫ175　ＳＤ85の上面で検出した隅丸方形の土坑である。土坑内からは弥生土器が出土しているが、ＳＫ175が掘り込まれたベース自体が弥生時代の遺構であるため、これらの土器がこの遺構に伴うものかどうかは不明である。しかし、他の時期の土器が出土していないので、弥生時代の遺構である可能性がある。短辺約0.9m、長辺約1.3m、検出面からの深さ約10cmを測る。

土坑ＳＫ181(第11図)　南東部で検出した。隅丸長方形の平面形を呈する大型の土坑である。一定期間、開口していたと考えられ、土坑南側では土坑壁の傾斜に沿って遺物が出土している。遺物の多くは土坑底に堆積した７層(灰色粘質土)から出土しており、同時に炭化物も出土している。遺物には弥生土器、石器、銅鐸形土製品がある。弥生土器の接合率は低く、埋納といった行為の結果とは考えられない。南短辺の長さ1.2m、北短辺の長さ１m、長辺2.6m、検出面からの深さ１mを測る。

土坑ＳＫ192　ＳＫ181の北で検出した。不定形の土坑である。出土遺物から弥生時代のものと考えられる。長さ1.4m、最大幅は1.2m、検出面からの深さは20cmである。

柱穴ＳＰ199　調査地南東部のＳＫ78に隣接した場所で検出した円形の柱穴である。直径25cm、検出面からの深さ10cmを測る。

柱穴ＳＰ284　調査地南東部のＳＤ85に隣接した場所で検出した円形の柱穴である。直径25cm、検出面からの深さ10cmを測る。

柱穴ＳＰ285　弥生時代の溝であるＳＤ85を切り込む状態で検出した柱穴である。直径70cm、検出面からの深さ25cmを測る。弥生の溝を切って掘削されていることから遺物が掘削時期と同じかは判断できない。

柱穴ＳＰ286　南東部で検出した柱穴で、直径30cm、検出面からの深さ20cmを測る。弥生時代の溝ＳＤ172に切り勝つ。

２)長岡京跡右京第946次(7ANRHK-7)　a２地区

(1)調査概要

本調査地は平成19年度に行った部分的な発掘調査によって、中世段階の遺構を確認し、周辺に遺構の広がりが想定された地点である。本調査は平成20年度に実施したが、本調査地北側に隣接して平成21年度に長岡京跡右京第968次調査を実施し、平成21年度に報告している。同報告では、調査地点西側の微高地上に平安時代の古代寺院が存在していた可能性が指摘されている。今回の調査地では、第968次調査地に続く溝のほか、掘立柱建物跡、柵列、土坑などを検出している。

(2)層位(第12図)

調査地は水田として利用されていた場所で、基本層序は上から１層の褐灰色土(耕作土)、２層の灰褐色粘質土(床土)、11層の灰色粘質土(上層遺構検出面)、９層の明褐色粗砂礫層(下層遺構検出面)、10層の明褐色礫層の順である。10層以下は遺構確認のため１mほど掘り下げたが、礫層が続くことを確認した。礫層中からは古墳時代の可能性がある須恵器片が出土した。10層より古墳時代の遺物が出土したこと、平安時代以降の遺構が検出されたことから、この調査地では古墳時代以後の河川堆積の後、平安時代までの間に陸化したと考えられる。また、a1地区の南東部では安定した弥生時代にさかのぼる地層が堆積していることから、本来、弥生時代及び古墳時代の遺構がこの地域にも広がっていたと考えられる。

(3)検出遺構

①中・近世(第13図)

上層溝群　北で西に30度振る溝と、それと直交し北で東に60度振る溝の、大きく二群の溝が存在する。いずれも耕作土直下で検出したもので、現存の水田畦の方向と一致することから、耕作溝の類と考えられる。埋土の状況などから近世以降のものと考えられる。

土坑ＳＫ21(第15図)　長方形の平面形を持つ土坑で、長軸はほぼ真南北を向く。内部には比較的大きな礫(最大径25cm)がまばらに含まれていた。出土遺物は少なく、平安時代から中世までの遺物が確認できた。長辺約0.9m、短辺約0.7m、検出面からの深さ約５cmである。

土坑ＳＫ16　平面形が長楕円形の土坑である。長軸0.9m、短軸0.7m、深さ５cmを測る。

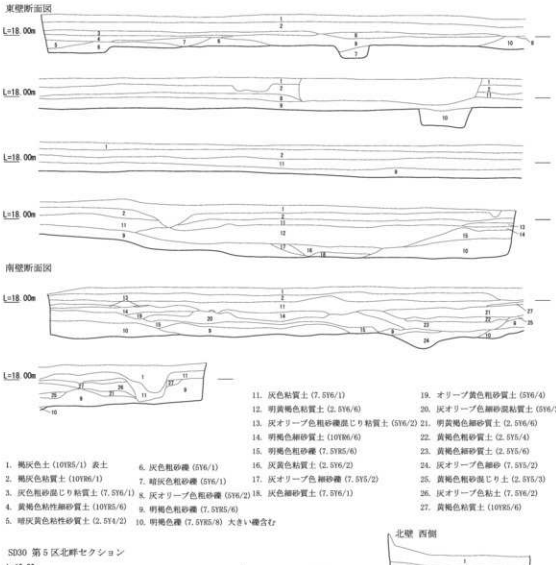
溝ＳＤ18　南北方向の溝で、検出長5.5m、幅１m、検出面から深さ５cmである。

②中世・平安時代(第14図)

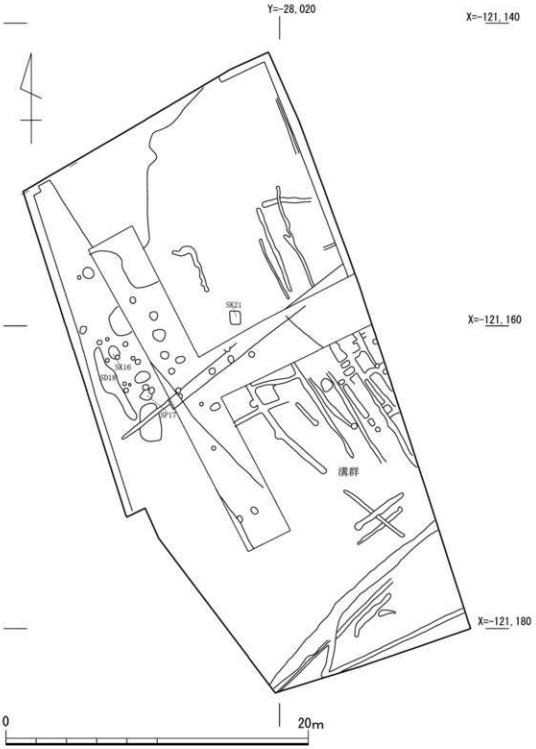
掘立柱建物跡ＳＢ01(第15図)　梁行２間、桁行３間以上の方形の掘形を持つ掘立柱建物跡である。北で37度東に振る。方形掘形の軸は不揃いであるが、柱痕跡は直線状に並んでいる。出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。梁行方向の柱間は1.4m等間で、Ｐ01・04・05・06からなる桁行きは約1.3mで、Ｐ03・07・08・10からなる桁の柱間は約1.5mで、寸法が異なっている。

柵列SA02(第15図)　７つの柱穴を直線状に検出した。このうち方形掘形を持つものは４か所であるが、掘形の底はすべて浅く、柱当たり部分が下がっていた。以上のことから、Ｐ11・16・17の円形の柱穴は、掘形部分が削平され、柱当たりの底だけが残ったものと考えられる。柱間寸法は1.4 ～ 1.6mで微妙に長さが異なる。

集石土坑ＳＸ31(第15図)　隅丸長方形の大型の土坑である。内部には径30cmのものを最大とし、径15cm程度の大きさの礫が充填されていた。出土遺物に瓦器片が含まれていることから平



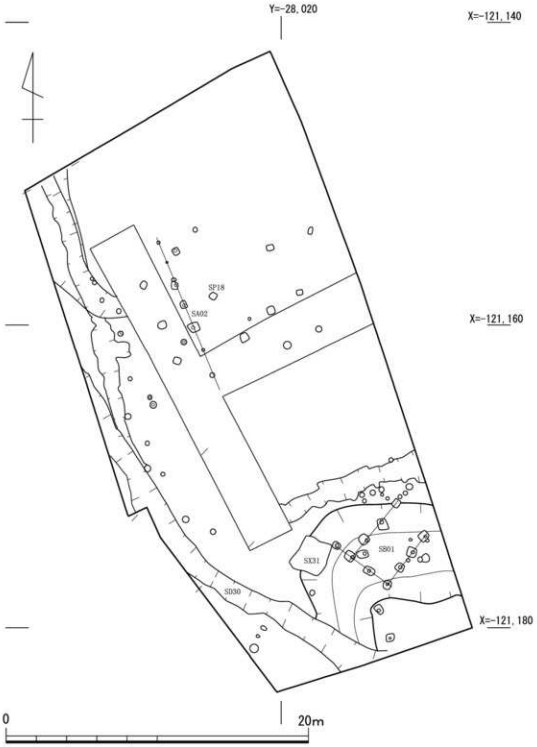
第12図　調子a2地区土層断面図



第13図　調子a2地区上層遺構（中近世）平面図

安時代後期以後の遺構である。遺構の長軸は北で27°東に振る。長辺約2.4m、短辺約2.2m、検出面からの深さ14cmを測る。

溝ＳＤ30（第12図）　調査区西側で検出した溝で、この溝の西側で地盤が高くなる。遺物は本調査地で検出した遺構の中で最も多く出土し、平安時代前期から中期のものである。調査地北側で隣接して行われた右京第968次調査（森島2010）時に検出されたＳＤ36の南延長部分に当たると

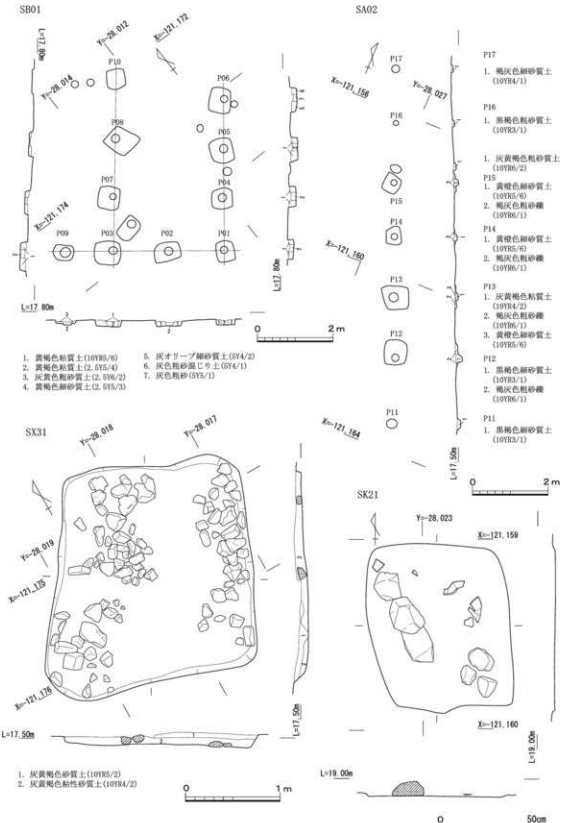


第14図　調子a2地区下層遺構(中世・平安時代)平面図

考えられる。流水によって蛇行し、底面も抉られている。この溝は西側の高い地形と東側の低い部分を区画する目的で掘られたと推測される。幅１～ 2.2m、検出面からの深さ約10cmである。

3）長岡京跡右京第946次（7ANRHK-7）　a3地区

（1）調査概要と層序



第15図　調子a2地区掘立柱建物跡ＳＢ01、柵列ＳＡ02、土坑ＳＫ21、集石土坑ＳＸ31平・断面図

a1地区と水路を挟み、西側に位置する調査区である。調査前は草地であったが本来は水田として機能していたと考えられる。土層図については、a1地区の西壁と基本的に同じである。耕作土の下に水平の灰色の粘質土が数枚堆積し、遺構検出面（第４図第５層下面）まで水平層が連続する。遺構検出面の下には礫層が続き、a2地区の土層観察の成果から、平安時代より古い流路となる。

(2)検出遺構（第５図）

井戸ＳＥ01　埋土の状況や形状から近世以降の井戸跡である。底部には木製の底板が認められ、保水層にも達していないことから溜井戸として利用されていたものと考えられる。直径２m、検出面からの深さ40cmを測る。

溝ＳＤ02　調査地西側で東側肩部のみが検出できた溝である。第３図で示した平成16年度調査14トレンチの溝とつながるものと考えられる。

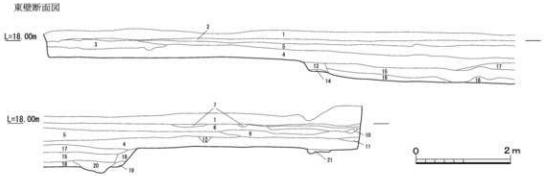
溝ＳＤ03　調査区中央部を南北方向に貫く溝である。その形状と規模から耕作に伴う溝と考えられる。検出面からの深さは約15cmである。

４）長岡京跡右京第969次（7ANRHK-8）　ａ4-1地区

(1)調査概要

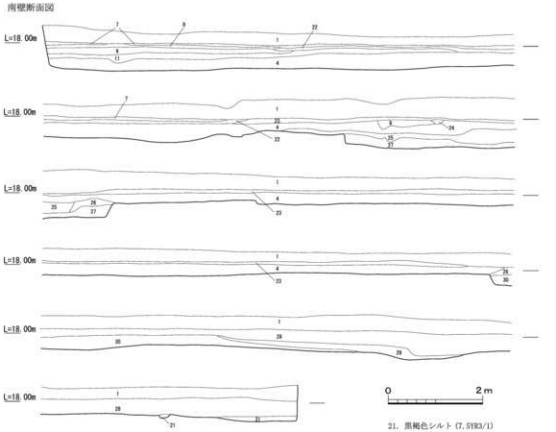
平成20年度に調査したa1地区の東側及び南側に隣接した調査区である。平成20年度の調査の結果、この地区では弥生時代の遺構が検出できるものと期待された。一方、ａ4-1地区の東側は大きく地形が落ち込んでいくことから、遺構が削平されている可能性も想定された。調査の結果、弥生時代の遺構面は調査区の全区域に及んでいることが判明した。それ以外にも、これまで周辺の調査区では検出されていなかった古墳時代前期、庄内期の竪穴式住居跡を検出した。また中世の建物跡もこの調査区で確認できたことから、前年度の調査成果とあわせて、中世集落関係の遺構がかなりの広がりを持っていることが判明した。

(2)層位（第16・17図）



1. 灰色砂質土（5Y4/1）耕土
2. 明黄褐色砂質土（10YR7/6）
3. 褐灰色シルト（10YR5/1）
4. 褐灰色シルト（7.5YR4/1）
5. 黄灰色シルト（7.5Y6/1）
6. 黄橙色砂質土（10YR8/6）
7. にぶい黄橙色砂質土（10YR7/4）
8. 灰黄色砂質土（2.5Y7/2）
9. 灰色砂質土（5Y6/1）マンガンを含む
10. 灰白色砂礫（10YR8/1）
11. にぶい褐色細砂質土（7.5YR5/4）
12. にぶい黄橙色シルト（10YR6/3）
13. 灰黄色シルト（2.5Y6/2）
14. 暗灰色粘質土（N5/0）
15. 黒褐色シルト（10YR3/1）
16. 灰色シルト（5Y5/1）
17. 褐灰色シルト（10YR4/1）
18. 浅黄橙色粘質土（10YR8/3）
19. 黄橙色粘質土（10YR8/8）
20. 灰色粘質土（N6/0）
21. 黒褐色シルト（7.5YR3/1）

第16図　調子a4-1地区土層断面図（１）



第17図　調子a4-1地区土層断面図（２）

他の調査区同様、この地区も水田として利用されていたため平坦な地形であった。層序は上から耕作土、数枚の水平な堆積物の後、第４層の褐灰色シルト層になる。この層の上面が中世以後の遺構検出面であり、第４層を取り除くと下層の遺構面となる。下層の遺構面では弥生時代の遺構の検出が難しく、遺構の輪郭を把握することが難しかった。

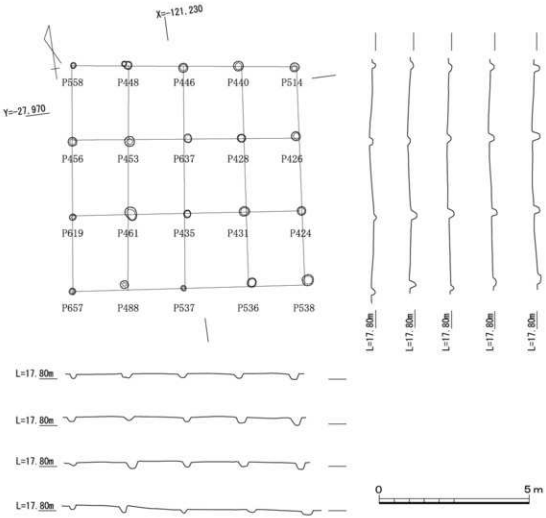
(3) 検出遺構

①中世（第18図）

掘立柱建物跡ＳＢ01（第19図）　４間×３間の総柱の掘立柱建物跡である。柱間は南北約2.4m、東西約1.8mの寸法を持つ。建物は北で約５度東に振る。柱穴はいずれも円形で、直径30cm程度で、深さ25cmを測る。

柱穴ＳＰ351（第20図）　調査地中央部南辺付近で検出した。直径25cmの円形掘形を持つ柱穴で、柱痕は15cm、検出面からの深さは10cmである。柱痕跡の底部には礎板状の自然石が置かれていた。また、柱痕跡部分から瓦器椀が出土している。

第18図　調子a4-1地区上層遺構（中世）平面図



第19図　調子a4-1地区掘立柱建物跡ＳＢ01平・断面図

柱穴ＳＰ352（第20図）　調査地中央部、ＳＫ356の北側で検出した。平面形が不整形な柱穴で、柱痕跡部分から遺物が出土している。南北方向30cm、東西40cm、検出面からの深さ10cmを測る。

柱穴ＳＰ353（第20図）　調査地中央部、ＳＫ357の北西側で検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で柱痕跡部分の下面には板状の石が置かれていた。直径30cm、検出面からの深さは20cmを測る。

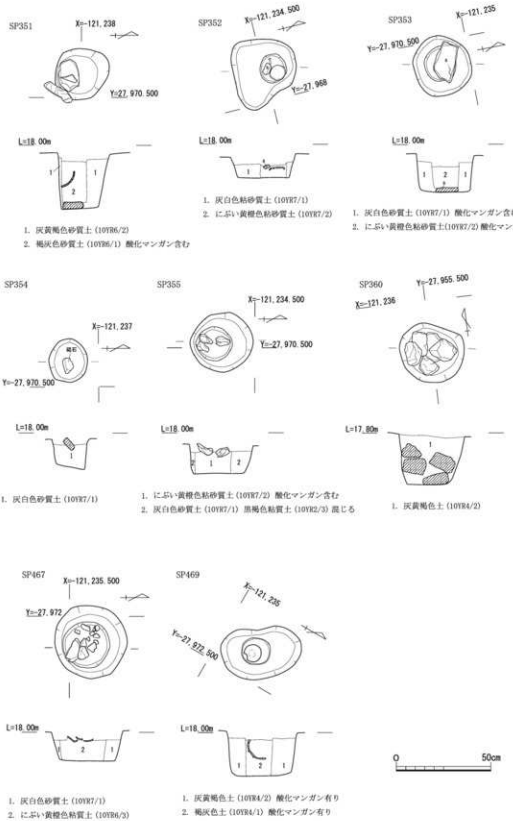
柱穴ＳＰ354（第20図）　調査地中央部、ＳＫ357の南西側で検出した。平面形が円形の柱穴で、砂岩製の砥石が出土している。直径20cm、深さ15cmを測る。

柱穴ＳＰ355（第20図）　調査地中央部、ＳＫ357の北西側で検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で柱痕跡部分の礫が出土している。直径30cm、検出面からの深さは20cmを測る。

柱穴ＳＰ360（第20図）　調査地の東辺近くで検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で柱痕跡部分の礫が出土している。直径35cm、検出面からの深さは25cmを測る。

柱穴ＳＰ420　調査地中央部、ＳＫ358の南側で検出した円形の掘形を持つ柱穴で、直径40cm、検出面からの深さは20cmを測る。

柱穴ＳＰ425　調査地中央部、ＳＫ358の北側で検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で、直径



第20図　調子a4-1地区柱穴平・断面図

40cm、検出面からの深さは25cmを測る。

柱穴ＳＰ437　調査地中央部、ＳＫ357の北西側で検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で、直径25cm、検出面からの深さは10cmを測る。

柱穴ＳＰ458　調査地中央部、やや北西側で検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で、直径40cm、検出面からの深さは20cmを測る。

柱穴ＳＰ467（第20図）　調査地中央部、ＳＫ357の西側で検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で柱痕跡部分で遺物が出土している。直径40cm、検出面からの深さは20cmを測る。

柱穴ＳＰ469（第20図）　調査地西寄りで検出した。長楕円形の平面形を持つ柱穴で、柱痕跡部分から遺物が出土している。長軸40cm、短軸25cm、検出面からの深さ25cmを測る。

柱穴ＳＰ487　調査地のやや西寄りで検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で、直径30cm、検出面からの深さは25cmを測る。

柱穴ＳＰ499　調査地中央部の南辺付近で検出した。長楕円形の平面形を持つ柱穴で、柱痕跡部分が認められる。長軸40cm、短軸30cm、検出面からの深さ15cmを測る。

柱穴ＳＰ644　調査地西寄りの下層面で検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で、直径20cm、検出面からの深さは10cmを測る。

柱穴ＳＰ686　調査地中央部で検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で、直径20cm、検出面からの深さは15cmを測る。

柱穴ＳＰ691　調査地のほぼ中央、ＳＫ358の北側で検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で、直径20cm、検出面からの深さは10cmを測る。

井戸ＳＥ553　調査地の西端で検出した。円形の掘形を持つ井戸で、直径1.5m、検出面からの深さは30cmを測る。井戸内には使用された材が存在し、溜井戸として機能していたことがわかる。遺構内からは中世の遺物が出土しているが、井戸の状況をこれまでの発掘調査とあわせ考えると近代以後のものと考えられる。

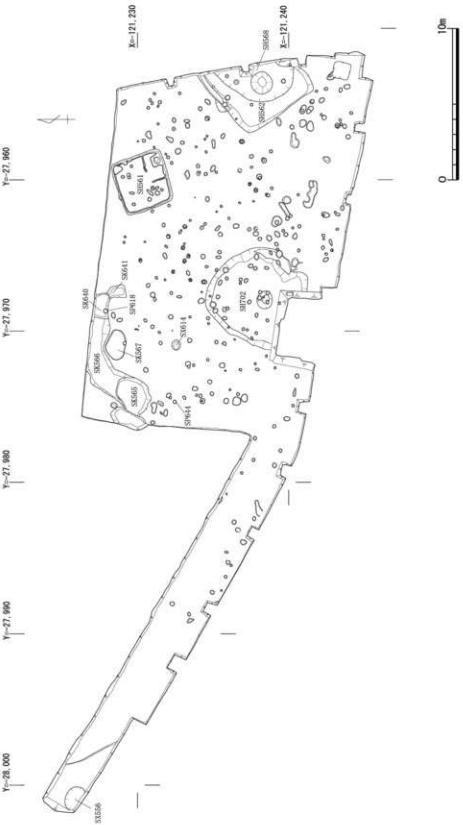
土坑ＳＫ356（第24図）　調査地のほぼ中央で検出した。南北方向に長軸を持つ。平面形が楕円形を呈する浅い土坑である。ＳＫ357～359と軸をそろえ、近接して検出できた。遺構の先後関係から、ＳＫ357・358より新しく掘削されたことがわかる。長軸2.8m、短軸２m、検出面からの深さ５cmを測る。

土坑ＳＫ357　調査地のほぼ中央で検出した。南北方向に長軸を持つ楕円形の平面形を持つ土坑である。ＳＫ356に先行する。長軸３m、短軸2.2m、検出面からの深さ10cmを測る。

土坑ＳＫ358　調査地のほぼ中央で検出した。南北方向に長軸を持つ楕円形の平面形を持つ土坑である。ＳＫ356に先行する。長軸3.2m、短軸2.2m、検出面からの深さ５cmを測る。

土坑ＳＫ359　調査地のほぼ中央で検出した。南北方向に長軸を持つ長方形の平面形を持つ土坑である。長軸2.6m、短軸1.4m、検出面からの深さ10cmを測る。

溝跡ＳＤ554　調査地の西端で検出した。平成16年度調査の16トレンチから続く溝跡である。調査区内で幅等の規模は確認できなかった。検出面からの深さは30cmである。



第21図　調子a4-1地区下層遺構（古墳・弥生時代）平面図

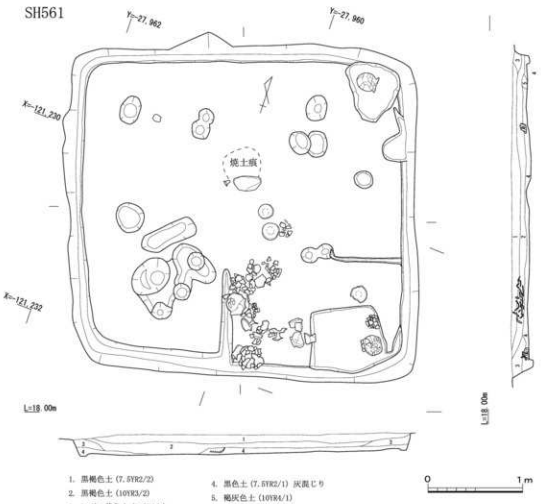
②古墳・弥生時代（第21図）

竪穴式住居跡ＳＨ561（第22図）　古墳時代前期の周壁溝を持つ方形の竪穴式住居跡である。住居床面南東部には２本の浅い溝によって区画された部分が存在し、その中に方形の土坑が掘り込まれている。第45図で示した土器の多くはこの区画内から出土しており、出土状況も良好であった。南北3.4m、東西3.7m、検出面からの深さ20cmの規模を持つ。主柱穴は判断できなかった。

竪穴式住居跡ＳＨ562（第23図）　方形の古墳時代初頭の竪穴式住居跡である。床面で竪穴式住居跡ＳＨ568を検出した。出土遺物は下層の住居跡のものと混在し、この地域の竪穴式住居の平面形の変遷からＳＨ562を庄内期に、ＳＨ563を弥生時代中期に位置付けた。北東辺５ｍ以上、北西辺5.4m、検出面からの深さ25cmを測る。主柱穴は４本（１本は調査区外）と考えられる。

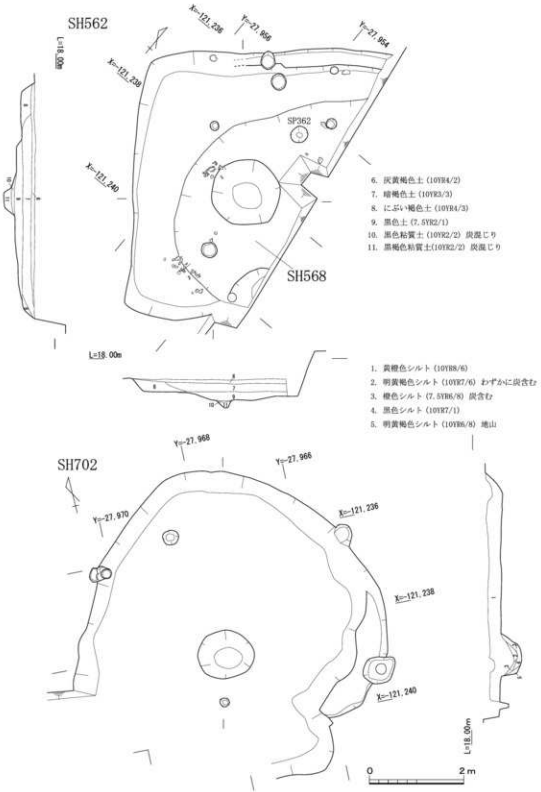
③弥生時代

竪穴式住居跡ＳＨ568（第23図）　ＳＨ562床面で検出した竪穴式住居跡で、輪郭はＳＨ562によって不明であるが、灰と炭が堆積した中央土坑と考えられる大型の土坑が存在し、竪穴の掘形がＳＨ562の内部で収まっていることから直径４ｍ以下の竪穴式住居跡が存在したと判断した。主柱穴は不明である。



第22図　調子a4-1地区竪穴式住居跡ＳＨ561平・断面図

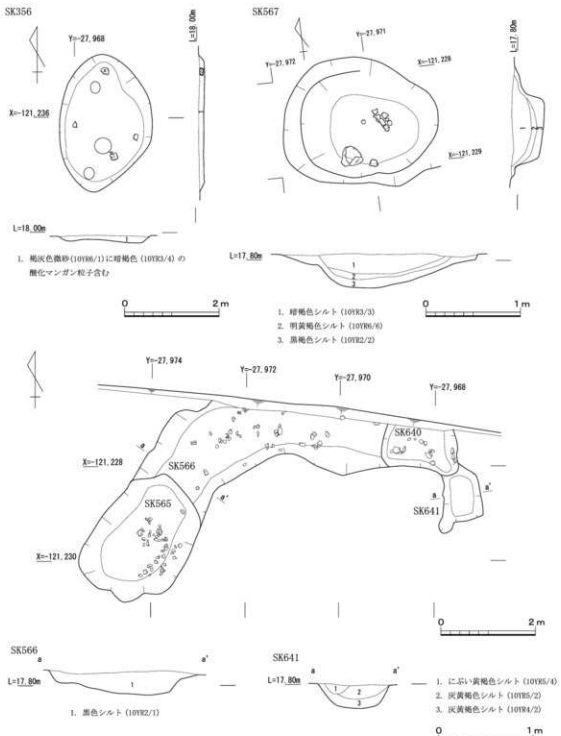
竪穴式住居跡ＳＨ702（第23図）　不正形な円状の平面形を持つ竪穴式住居跡である。床面中央部には土坑があり、炭化物が出土している。屋根を支えた明確な主柱穴は検出できなかった。竪穴式住居の壁はゆるく立ち上がることと形状が不整形であることから、廃絶後に埋没するまで、



第23図　調子a4-1地区竪穴式住居跡ＳＨ562・568・702平・断面図

長期間経過していた可能性が指摘できる。出土遺物はほとんどなく、住居跡の形状や周辺の遺構から時期を決定した。

土坑ＳＫ566（第24図）　調査地の北西部で検出した「く」字状に屈曲する溝状の遺構である。遺構内を掘り下げると溝底で土坑状の掘り込みを両端で確認した。東側をＳＫ640、西側をＳＫ565としたが、ＳＫ566との前後関係を明確にできなかった。溝状の遺構も、a1地区やｂ地区で検



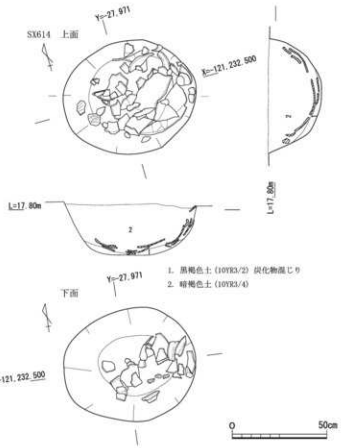
第24図　調子a4-1地区土坑ＳＫ356・565～567・640・641平・断面図

出されている例と同様、土坑が連なっているかのように掘られていることがわかった。長さ8.5m、幅1.8mで、検出面からの深さは40cmである。第24図で示した検出状況はＳＫ566掘削時のもので、底面で落ち込みを発見したため、ＳＫ565・640部分と分けて報告した。

土坑ＳＫ565（第24図）　調査地の北西部、ＳＫ566西側底面で検出した平面が楕円形の土坑で、長軸2.9m、短軸２m、検出面からの深さは20cmである。

土坑ＳＫ640（第24図）　ＳＫ566の東端の底面で確認した土坑で、長軸1.6m、短軸１mの方形を呈し、検出面からの深さは10cmである。

土坑ＳＫ567（第24図）　調査地の北西部、ＳＫ566の南側に隣接して検出した。楕円形の平面を持つ土坑である。長軸２m、短軸1.3m、検出面からの深さ40cmを測る。



第25図　調子a4-1地区土器埋納遺構ＳＸ614平・断面図

土坑ＳＫ641（第24図）　調査地中央部の北辺に近接して、ＳＫ640と接した状態で検出した土坑である。南北1.2m、東西0.8m、検出面からの深さ40cmを測る。

土器溜りＳＸ556　調査区西端で検出した。中世の溝ＳＤ554の底面で検出した土器溜りである。1.5m程度の範囲に土器が確認できた。

土器埋納遺構ＳＸ614（第25図）　調査地中央部やや北西側で検出した。弥生土器の甕を埋納した土坑で土器棺の可能性もある。掘形の平面形は楕円で長軸0.7m、短軸0.5m、検出面からの深さ25cmを測る。

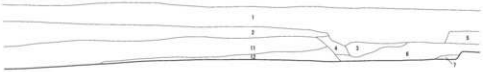
５）長岡京跡右京第969次（7ANRHK-8）　ａ4-2地区

（1）調査概要と層位（第26図）

右京第946次調査（a1地区）の東隣接地において実施した。調査面積は462㎡である。調査地は標高の異なる２枚の水田にわたっており、調査区の北側3/5程（北調査区）は南側（南調査区）に比して0.3m程低位となっていた。調査の結果、削平による影響を受けたものと考えられ、遺構の存在も希薄であった。

西壁断面図　L=18.00m

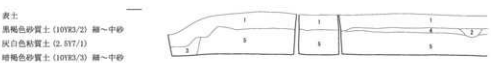
L=18.00m



1. 撹乱
2. 明黄褐色砂質土（10YR7/6）シルト～粗砂
   1～2cmの礫を多く含む
3. 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）粗砂
   下部に3～10cmの礫を含む
4. 明褐色砂質土（7.5YR5/6）細～中砂
   全体に褐灰色細砂（10YR6/1）を含む
5. 橙色砂質土（7.5YR6/8）細～中砂 全体に褐灰色細砂（2.5YR6/1）を含む
6. 灰黄褐色砂質土（10YR6/2）粗～極粗砂
7. 褐灰色砂質土（10YR4/1）シルト～粗砂 1～3cmの礫をわずかに含む
8. 明赤褐色砂質土（5YR5/8）細～粗砂 1～5cmの礫を多く含む
9. 明赤褐色砂質土（5YR5/6）細～粗砂 1～5cmの礫を多く含む
10. 黒色砂質土（7.5YR2/1）中～粗砂 1～4cmの礫を非常に多く含む
11. 黒褐色砂質土（10YR3/1）細～粗砂 1～3cm
12. 褐色砂質土（7.5YR4/6）シルト～細砂

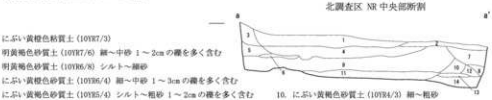
南半東壁断面図　L=18.40m

L=18.40m



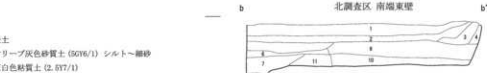
1. 表土
2. 黒褐色砂質土（10YR3/2）細～中砂
3. 灰白色粘質土（2.5Y7/1）
4. 暗褐色砂質土（10YR3/3）細～中砂
5. 明黄褐色砂質土（10YR6/8）シルト～細砂

北調査区 NR中央部断割　a　a'　L=17.80m



1. にぶい黄橙色粘質土（10YR7/3）
2. 明黄褐色砂質土（10YR7/6）細～中砂 1～2cmの礫を多く含む
3. 明黄褐色砂質土（10YR6/8）シルト～細砂
4. にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）細～中砂 1～3cmの礫を多く含む
5. にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）シルト～粗砂 1～2cmの礫を多く含む
6. 黄褐色砂質土（10YR5/6）シルト～中砂
7. 灰黄褐色砂質土（10YR4/2）細～中砂 1～5cmの礫をわずかに含む
8. 褐灰色砂質土（10YR4/1）粗砂
9. 黒褐色砂質土（7.5YR3/1）細～粗砂 1～3cmの礫を非常に多く含む
10. にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）細～粗砂
11. 灰黄褐色砂質土（10YR4/2）粗～極細砂
12. 暗褐色砂質土（10YR4/3）中～粗砂 2～5cmの礫をわずかに含む
13. 黄灰色砂質土（2.5Y4/1）粗砂
14. 褐色砂質土（7.5Y4/6）シルト～細砂

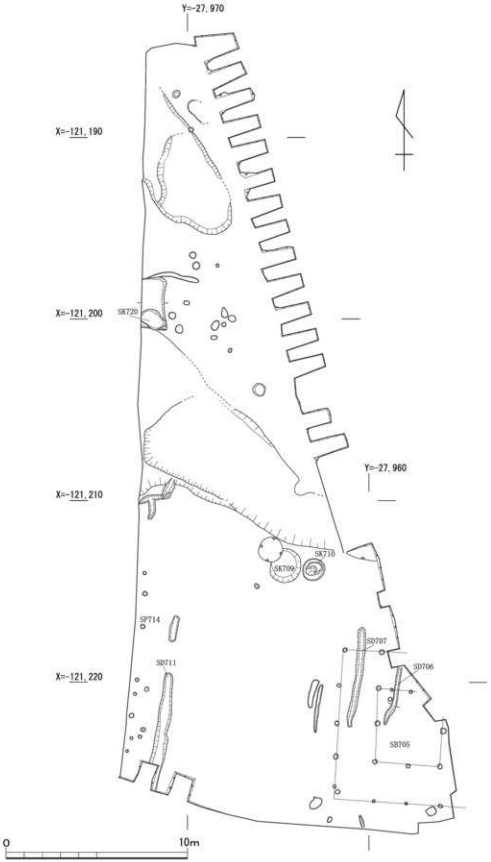
北調査区 南端東壁　b　b'　L=18.00m



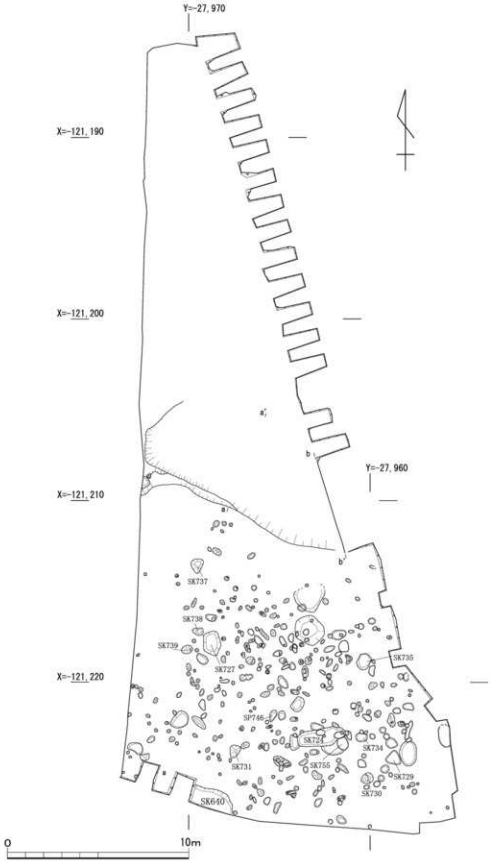
1. 表土
2. オリーブ灰色砂質土（5GY6/1）シルト～細砂
3. 灰白色粘質土（2.5Y7/1）
4. 明黄褐色砂質土（10YR6/8）シルト～細砂
5. オリーブ灰色砂質土（5GY5/1）シルト～細砂 1～3cmの礫をわずかに含む
6. 暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2）シルト～中砂
7. 灰黄褐色砂質土（10YR4/2）細～中砂 1～5cmの礫をわずかに含む
8. 褐灰色砂質土（10YR4/1）粗砂
9. 明赤褐色砂質土（5YR5/6）細～中砂 1～7cmの礫を非常に多く含む
10. 黒褐色砂質土（7.5YR3/1）細～粗砂 1～3cmの礫を非常に多く含む
11. 褐色砂質土（7.5Y4/6）シルト～細砂

0　2m

第26図　調子a4-2地区土層断面図

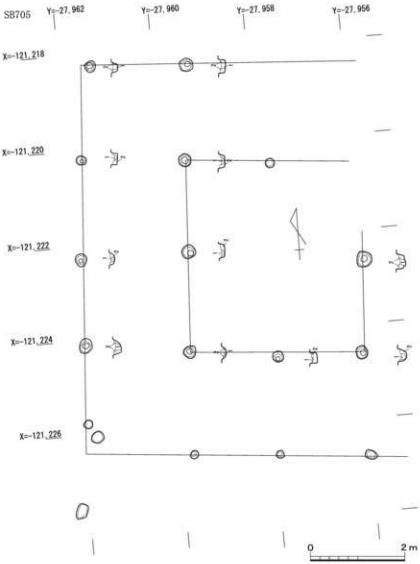


第27図　調子a4-2地区上層遺構(中世)平面図



第28図　調子a4-2地区下層遺構（弥生時代）平面図

層序は南調査区では耕作土の下に暗褐色砂質土（第４層）、明黄褐色砂質土（第５層）が堆積しており、暗褐色砂質土（第４層）の上面が中世段階、明黄褐色砂質土（第５層）の上面が弥生時代の遺構面となっていた。北調査区では１面の遺構面を検出した。また、南調査区では２面の遺構面を検出したが、上層の遺構面は大きく削平を受けており、残存状況も不良であった。以下、主要な遺構に関して記述する。



第29図　調子a4-2地区掘立柱建物跡ＳＢ705平・断面図

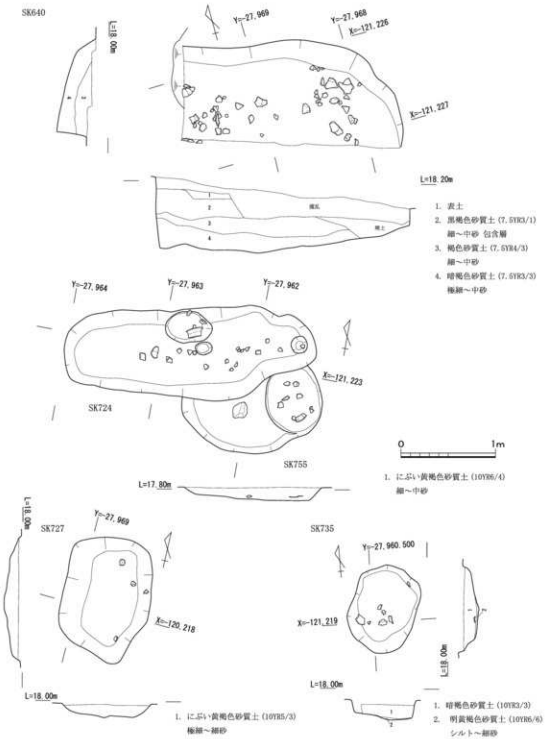
(2)検出遺構

①中世（第27図）

掘立柱建物跡ＳＢ705（第29図）　南調査地南東部で検出した。東側が調査区外へと広がるため、全容は不明であるが、２間×２間の身舎に、三もしくは四面に庇を伴うものと考えられる。身舎部分の柱間は1.8～2.1m、柱掘形はおよそ0.3mを測る。概ね0.2mの深さを残すのみであるが、多くは径0.1m前後の柱痕跡が良好に残存していた。周囲の庇に伴う柱穴も、身舎と柱筋を概ね揃えている。各柱間は1.8～2.1mを測り、南西隅部の１基に関しては、精査を繰り返したが検出できなかった。すでに削平を受け、消失したものと判断した。この建物跡は、北で東へ３度主軸が振れている。

柱穴ＳＰ714　南調査区西端で検出した。直径0.3mの円形を呈する。深さは５cmほどを残すのみである。

土坑ＳＫ720（第27図）　北調査区中央西端で検出した。東西方向に主軸をとる不整形な楕円形を呈し、西端が調査区へと広がるため全容は不明である。南北1.1m、東西1.5m以上、検出面からの深さはおよそ0.2mを測る。埋土は２層で、上層は橙色砂質土に灰白色細砂の混入がみられ、下層は褐色砂質土の堆積であった。



第30図　調子a4-2地区土坑ＳＫ640・724・727・735平・断面図

この他に、上層の遺構としては溝ＳＤ706・707・711、土坑ＳＫ709・710等を検出した。

②弥生時代（第28図）

土坑ＳＫ640（第30図）　調査区南端やや西寄りで検出した。南半はa4-1地区へと続いている。調査区内では東西2.3m、南北1.1mにわたって検出した。深さは0.6m程を残しており、下層の褐

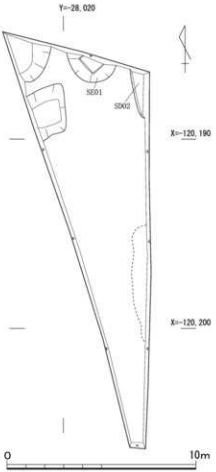
色砂質土・暗褐色砂質土から弥生土器がまとまって出土している。

土坑ＳＫ724（第30図）　南調査区南東隅部付近で検出した。長軸2.7m、短軸1.0mを測る長楕円形を呈し、深さは0.3m程を残す。北寄りの中央付近に長軸0.5m、短軸0.3mを測る楕円形を呈する土坑が穿たれる。また、土坑の中軸に沿う形で、直径0.2m程のピットが、中央付近と東端で検出された。

土坑ＳＫ727（第30図）　南調査区中央やや西寄りで検出した。不整形な五角形を呈し、南北1.3m、東西1.0mを測る。深さは0.15m程を残し、埋土はにぶい黄褐色砂質土の単一層である。

土坑ＳＫ735（第30図）　南調査区北東部で検出した。南北0.9m、東西0.7mを測る。深さは0.25m程を残し、埋土は最下層に薄く明黄褐色砂質土、その上層には暗褐色砂質土が堆積していた。

土坑ＳＫ737　南調査区北西隅部付近で検出した。南北0.8m、東西0.7mを測る。深さは0.2m程を残し、埋土はにぶい黄褐色砂質土、褐色砂質土の２層が堆積していた。



第31図　調子a5地区平面図

土坑ＳＫ755（第30図）　南調査区南東隅部付近で検出した。北半部をＳＫ724によって切られている。長軸1.5m、短軸0.8m以上の楕円形を呈すると考えられる。最深部で0.15m程を残すのみであり、埋土はにぶい黄褐色砂質土の単一層である。

この他、土坑ＳＫ722・729・730・731・734・738・739・746等で遺物が出土している。

6）長岡京跡右京第1006次（7ANRHK-8）　a5地区

（1）調査概要と層位

発掘調査地点では、遺構検出面直上まで盛土が堆積していた。調査地点内では褐灰色砂礫層が遺構検出面となり、近世以後の井戸と平成16年度のトレンチで検出した溝の肩部をわずかに検出しただけである。遺構に関連した遺物の出土は認められなかった。

4．出土遺物

出土遺物の総量は、整理箱にして79箱である。その内訳は、長岡京跡右京第946次調査が38箱、同969次調査が40箱、同1006次調査が１箱である。

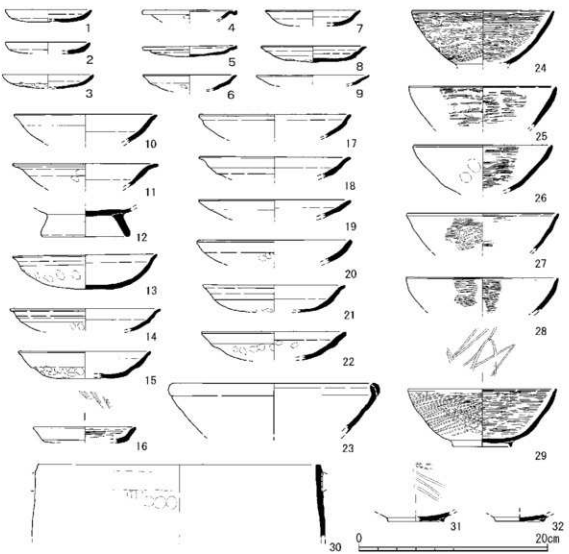
1）土器・土製品

（1）長岡京跡右京第946次（7ANRHK-7）a1地区

①古代・中世

木棺墓ＳＴ201(第32図)　１～３は土師器皿で、口縁部残存率はそれぞれ1/4、1/2、1/3、調整は内外面ナデである。１・２は掘形内出土で、３は棺内で出土した。色調は１・２の外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面浅黄橙色(7.5YR8/4)、３の内外面は黄橙色(10YR8/4)である。

井戸ＳＥ244(第32図)　４・９・10・12・14・15・19・26が井戸掘形内出土である。５・６・７・21・22が井戸枠内出土遺物である。８・11・16～18・20・23～25・27～32は井戸枠検出までの埋土中から出土した。４～15・17～22・30は土師器である。16・24～29・31・32は瓦器である。23は須恵器である。４～９は土師器皿である。４～９の口縁残存率はそれぞれ1/5、9/10、1/10以下、1/8、6/7、1/8である。調整は内外面ナデである。色調は４が内外面浅黄橙色(10YR8/3)、５が外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面浅黄橙色(10YR8/4)、６が内外面灰白色(10YR8/2)、７が内外面灰白色(10YR8/2)、８が内外面灰白色(2.5Y8/1)、９が内外面浅黄橙色(10YR8/3)である。10・11は土師器椀で、口縁残存率は1/10で内外面の調整はナデである。10の色調は内外面共に浅



第32図　調子a1地区出土土器(１)　木棺墓ＳＴ201、井戸ＳＥ244

黄橙色(10YR8/3)、11は内外面共に灰白色(10YR8/2)である。12は台付皿の高台部分で残存率1/2、調整は内外面ナデ、色調は内外面灰白色(10YR8/2)である。13～15は土師器皿で、口縁残存率はそれぞれ1/2/、1/4、1/6、調整は内外面ナデ、色調は13の外面が浅黄橙色(7.5YR8/4)、内面浅黄橙色(7.5YR8/3)、14は内外面浅黄橙色(7.5YR8/3)、15は内外面灰白色(5Y8/1)である。16は小皿で、口縁残存率1/5、調整は外面ミガキ及びナデ、内面ミガキ、色調は内外面共に暗灰色(N3/0)である。17から22は土師器椀で、口縁残存率はそれぞれ17～19が1/10以下、20が1/2、21が1/5、22が1/8で、内外面共にナデ調整である。色調は17・18・19が内外面浅黄橙色(10YR8/3)、20・21が内外面灰白色(10YR8/2)、22が外面灰白色(10YR8/2)、内面にぶい黄橙色(10YR7/2)である。23は須恵器鉢で、口縁残存率は1/10以下で、調整は内外面ナデ、色調は内外面灰白色(N7/0)である。24～29は瓦器椀で、口縁残存率は24が1/4、25～28は1/10以下、29は2/5である。調整は内外面ミガキである。色調は24・25・26・29・30の内外面暗灰色(N3/0)、27は内外面黒色(N2/0)である。30は瓦質の羽釜で、口縁残存率は1/10以下、鍔の部分は剝落している。調整は外面不明、内面はナデで、色調は外面灰黄褐色(10YR5/3)、内面は灰白色(10YR8/1)である。31・32は椀の底部で、底部残存率はいずれも1/5である。31の調整は外面ナデ、内面ミガキ、色調は内外面暗灰色(N3/0)である。32の調整は外面ナデ、内面不明、色調は内外面暗灰色(N3/0)である。

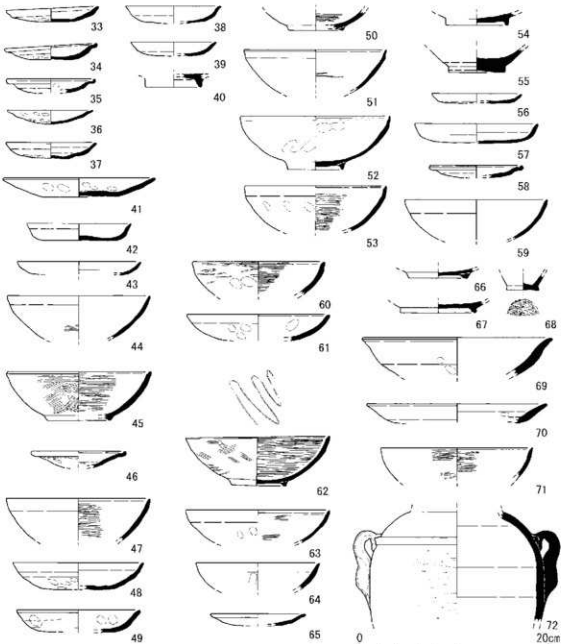
掘立柱建物跡ＳＢ01(第33図)　柱穴ＳＰ44・45・247内から土器が出土している。41はＰ44出土の土師器皿で、口縁部完存率1/4、調整不明。色調は外面明黄橙色(10YR7/6)、内面灰白色(2.5YR8/2)である。68はＳＰ44出土の須恵器の小型壺で底部残存率は1/2で、糸切り痕が残る。調整は内外面ナデ、色調は内外面灰白色(5Y7/1)である。33～35はＳＰ45出土の土師器皿で、口縁残存率はそれぞれ5/6、9/10、1/4である。調整は内外面ナデで、色調は33・34の外面灰白色(10YR8/2)、内面浅黄橙色(10YR8/3)、35の内外面はにぶい黄橙色(10YR7/3)である。36・37はＳＰ247出土の土師器皿で、口縁残存率はそれぞれ1/4、1/2である。調整は内外面ナデで、色調は36の外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面灰白色(10YR8/2)、37の内外面灰白色(10YR8/2)である。

柱穴ＳＰ19(第33図)　38・39は土師器の皿で調整は内外面ナデである。38の口縁残存率は1/3、色調は内外面共に灰白色(10YR8/2)である。39の口縁残存率は1/4、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面灰白色(10YR8/1)である。47・48はＳＰ19の残存部部分をＳＰ269として取り上げた遺物である。47は瓦器椀で、口縁残存率は1/10以下である。調整は外面不明、内面ミガキ、色調は外面灰白色(5Y7/1)、内面暗灰色(N3/0)である。48は土師器の皿で、口縁残存率は1/6である。調整は内外面ナデで、色調は外面浅黄橙色(7.5YR8/4)、内面淡橙色(5YR8/4)である。

柱穴ＳＰ32(第33図)　50は瓦器椀底部片で、底部残存率は1/7である。調整は外面不明、内面ミガキ、色調は外面灰白色(5Y8/1)、内面暗灰色(N3/0)である。

柱穴ＳＰ49(第33図)　40は土師器底部片で、底部残存率は1/10以下である。内外面は著しく摩滅しているため軟質の緑釉陶器であった可能性もある。色調は灰白色(10YR8/2)である。

柱穴ＳＰ84(第33図)　51～53は瓦器椀である。口縁部残存率はそれぞれ1/5、1/3、1/2である。



第33図　調子a1地区出土土器(2)　柱穴

51の調整は内外面不明であるが、ミガキの痕跡が内面にわずかに認められる。色調は内外面共にオリーブ黒色(7.5Y3/1)または灰白色(N8/0)である。52は内外面の調整は不明、色調は内外面共にオリーブ黒色(5Y3/1)または灰白色(N8/1)である。53は調整が外面ミガキ及びナデ、内面がミガキである。色調は外面が灰色(N6/0)、内面が灰色(N4/0)である。

柱穴ＳＰ97(第33図)　54・55は共に無釉陶器の底部で、底部残存率は1/3、5/6である。54の調整は外面ナデ後ケズリ、内面ナデ調整で、色調は内外面共に灰白色(7.5Y8/1)である。55は内外面ナデ調整、色調は内外面青灰色(5PB6/1)である。

柱穴ＳＰ109(第33図)　56は土師器皿で口縁残存率は1/3である。調整は内外面共にナデで、

色調は外面が浅黄橙色(7.5YR8/4)、内面が浅黄橙色(7.5YR8/3)である。

柱穴ＳＰ111(第33図)　57は土師器皿で、口縁残存率は1/2である。調整は内外面共にナデ、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面浅黄橙色(10YR5/1)である。

柱穴ＳＰ113(第33図)　42・43は土師器皿で口縁部残存率は順に1/8、1/10以下で、調整は不明である。色調は42の内外面浅黄橙色(7.5YR8/3)で、43は外面淡橙色(5YR8/4)、内面橙色(2.5YR7/6)である。44は瓦器椀で口縁部の残存率は1/7で、調整は外面ミガキ及びナデ、内面不明である。色調は外面灰白色(5Y8/1)、内面灰白色(5Y7/1)である。45は黒色土器の椀で、口縁残存率は1/6である。調整は内外面がミガキ、色調は内外面とも黒色(2.5Y2/1)である。

柱穴ＳＰ134(第33図)　58は土師器の皿で、口縁残存率は1/3である。調整は内外面ともナデで、色調は外面が浅黄橙色(10YR8/3)、内面が浅黄橙色(7.5YR8/3)である。

柱穴ＳＰ195(第33図)　59は瓦器椀片で、口縁部残存率1/10以下である。調整は内外面不明、色調は外面灰色(N4/0)、内面灰色(N5/0)である。

柱穴ＳＰ207(第33図)　60は瓦器椀で口縁残存率は1/6である。調整は内外面ミガキで、色調は内外面暗灰色(N3/0)である。

柱穴ＳＰ213(第33図)　61は土師器皿で、口縁の残存率1/6である。調整は内外面共にナデ、色調は外面が橙色(2.5YR5/4)、内面がにぶい褐色(7.5YR5/4)である。

柱穴ＳＰ218(第33図)　67は須恵器の底部で、底部の残存率は1/8である。調整は内外面共にナデ、色調は外面が明青灰色(5PB7/1)、内面が灰白色(N7/0)である。

柱穴ＳＰ222(第33図)　62・63・66は瓦器椀である。62・63の口縁残存率は順に3/5、1/9である。62の調整は内外面共にミガキ、色調は暗灰色(N3/0)である。63の調整は外面がミガキ、内面は不明である。色調は内外面共に灰色(N5/0)である。66の底部残存率は1/6で、調整は外面ナデ、内面は不明、色調は内外面共に灰色(N5/0)である。64は土師器で椀状に復元できるが歪が大きく皿であった可能性もある。口縁残存率は1/8である。調整は内外面共にナデ、色調は外面がにぶい橙色(5YR7/3)、内面ははにぶい橙色(7.5YR7/4)である。

柱穴ＳＰ252(第33図)　69は土師器で反転復元によって椀状の深さを持つ形態となったが、高杯の口縁部である可能性がある。口縁残存率は1/10以下で、調整は外面がナデ、内面は不明、色調は内外面共に浅黄橙色(7.5YR8/4)である。

柱穴ＳＰ264(第33図)　70は土師器の皿で、口縁残存率は1/8である。調整は内外面共にナデ、色調は外面が橙色(5YR7/4)、内面ははにぶい橙色(7.5YR6/4)である。

柱穴ＳＰ265(第33図)　46は土師器の皿で、口縁の残存率は1/3である。調整は内外面共にナデ、色調は内外面共に灰白色(10YR8/2)である。

柱穴ＳＰ267(第33図)　71は瓦器椀で、口縁残存率は1/10以下である。調整は内外面共にミガキ、色調は内外面共に橙色(N6/0)である。72は須恵器の耳壺である。調整は外面ナデ及びケズリ、内面ナデで、色調は外面灰黄色(2.5YR6/2)、内面灰白色(N7/0)である。

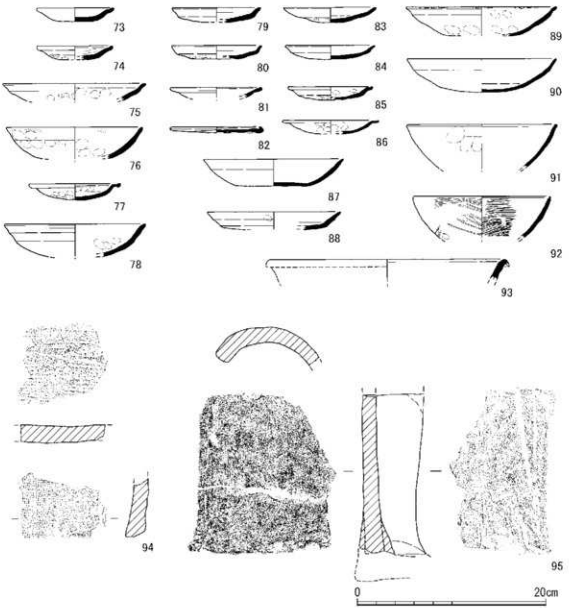
柱穴ＳＰ287(第33図)　65は土師器の皿で、口縁残存率は1/7である。調整は内外面共にナデ、

色調は外面が浅黄色(10YR8/3)、内面は灰白色(2.5Y8/2)である。

柱穴ＳＰ299(第33図)　49は土師器の皿で、口縁の残存率は1/6である。調整は内外面共にナデ、色調は内外面共に灰白色(7.5YR8/2)である。

土坑ＳＫ34(第34図)　73～75は土師器皿で、76は土師器椀である。73・74の口縁残存率はそれぞれ1/6、1/4で、調整は内外面共にナデである。色調は、73の外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面浅黄橙色(10YR8/4)、74は外面がにぶい黄橙色(10YR7/4)、内面がにぶい黄橙色(7.5YR7/4)である。75・76の口縁残存率はそれぞれ1/10、1/4である。75の調整は、内外面共にナデ、色調は外面が灰白色(10YR8/2)、内面が浅黄橙色(10YR8/3)である。76の調整は内外面共にハケ後ナデ、色調は内外面共ににぶい黄橙色(10YR7/2)である。

土坑ＳＫ30(第34図)　77は土師器皿で、78は土師器椀で、口縁の残存率は、77が完形、78は



第34図　調子a1地区出土土器(3)　土坑

1/4で、内外面共にナデ、色調は77の外面が灰黄色(2.5Y7/2)、内面が浅黄橙色(10YR8/3)、78は外面が灰白色(10YR8/2)、内面が浅黄橙色(10YR8/3)である。

土坑ＳＫ41(第34図)　79～81・83・84は土師器皿で、口縁残存率は1/5、1/4、1/9、1/3、2/3、内外面の調整は共にナデである。色調は、79が内外面共に浅黄橙色(7.5YR8/4))、80は外面が黄灰色(2.5Y6/1)、内面が黒褐色(2.5Y3/1)、81は内外面共に灰白色(10YR8/2)、83は内外面共に浅黄橙色(10YR7/3)、84は外面が浅黄橙色(10YR7/4)、内面が浅黄橙色(10YR7/3)である。87は土師器杯で、口縁残存率1/3である。調整は内外面ナデ、色調は外面にぶい橙色(7.5YR7/4)、内面浅黄橙色(7.5YR8/4)である。88は土師器皿で口縁残存率1/7である。調整は内外面ナデ、色調は内外面浅黄橙色(7.5YR8/4)である。95は丸瓦で、色調は暗灰色(N3/0)である。

土坑ＳＫ132(第34図)　82は土師器皿で口縁残存率5/6、調整は内外面共にナデ、色調は外面が赤橙色(10YR6/6)、内面が灰白色(7.5YR8/2)である。

土坑ＳＫ200(第34図)　85・86は土師器の皿で、調整は内外面共にナデである。85の口縁残存率1/2、色調は内外面黄灰色(2.5YR7/2)である。86は口縁の残存率1/2、色調は内外面共に黄灰色(2.5YR7/2)である。89・90は土師器の椀で、内外面の調整はナデである。口縁残存率はそれぞれ1/2、1/4で内外面の調整はナデである。色調は内外面共に灰白色(2.5Y8/2)である。91は黒色土器の椀で、口縁残存率1/10以下で、調整は外面がミガキ、内面は不明である。内外面共に黒色(2.5Y2/1)である。93は須恵器甕口縁部で、残存率は1/10以下である。内外面の調整は不明、色調は外面が黒褐色(10YR3/1)、内面が灰色(N6/0)である。

土坑ＳＫ217(第34図)　92は瓦器椀で、口縁残存率1/6である。調整は内外面共にミガキ、色調は外面が灰色(N4/)、内面が暗青灰色(5BP3/1)である。

土坑ＳＫ251(第34図)　94は平瓦片で、凹面に布目、凸面に縄目が残る。色調は、凹面が暗灰色(N3/0)、凸面がにぶい褐色(7.5YR6/4)である。

溝ＳＤ11(第35図)　96は瓦器椀で、口縁の残存率1/9、調整は不明で、色調は外面が明褐灰色(7.5YR7/2)、内面が灰白色(2.5Y7/1)である。97は土師器の皿で、口縁残存率1/2、調整は内外面共にナデ、色調は外面が灰白色(10YR8/2)、内面が浅黄橙色(10YR8/3)である。98は白磁椀で、口縁の残存率は1/18である。色調は内外面共に灰白色(5Y7/2)である。

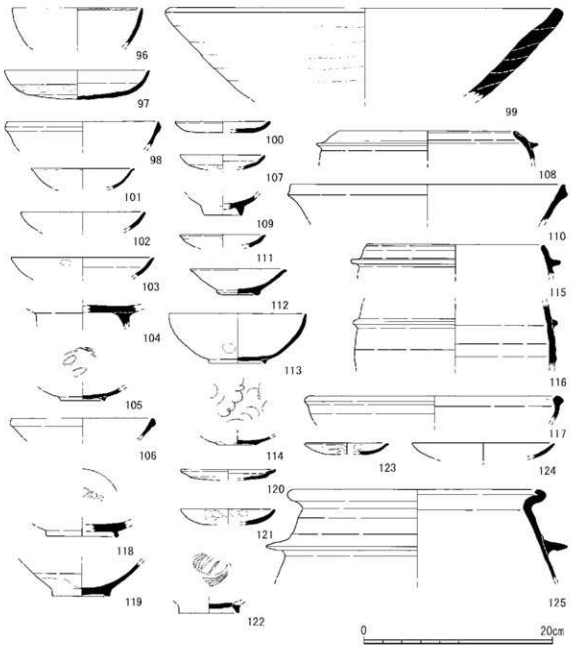
溝ＳＤ15(第35図)　99は瓦質の鉢で、接合痕が多く残る。口縁部残存率は1/10以下で、調整は内外面共にナデ、色調は外面が灰白色(2.7Y7/0)、内面が黒色(N2/0)である。100は土師器皿で、口縁部の残存率は1/4である。

溝ＳＤ16(第35図)　101は白磁の皿で、口縁部残存率は1/10以下である。色調は外面が灰白色(2.5Y8/1)、内面が灰白色(5Y7/2)である。102は土師器の皿で、口縁残存率は1/10以下である。調整は不明で、色調は内外面共に浅黄色(10YR8/3)である。

ＳＤ43(第35図)　103・107は土師器皿で、104は同台付き皿である。口縁残存率は103が1/8、104が1/4で、内外面共にナデ調整である。色調は、103が内外面共に浅黄橙色(7.5YR8/4)、104は外面がにぶい橙色(7.5YR7/4)、内面が灰黄褐色(10YR5/2)、107は外面灰黄色(2.5Y7/2)、内面

にぶい黄色(10YR2/1)である。105は瓦器椀で、底部残存率1/2である。調整は外面ナデ、内面ミガキ、色調は外面灰白色(2.5Y7/0)、内面暗灰色(N3/0)である。106は白磁椀で口縁残存率1/8、色調は外面灰白色(7.5Y7/2)、内面灰白色(7.5Y8/1)である。108は瓦質の羽釜で、口縁残存率は1/10以下である。調整は内外面ナデ、色調は外面暗灰色(N3/0)、内面灰色(N6/0)である。

溝ＳＤ80(第35図)　109は青磁椀で、底部残存率は1/8である。色調は外面オリーブ灰色(6GY6/1)、内面明青灰色(5B7/1)である。110は須恵器鉢で、口縁部残存率は1/10以下である。内外面ナデ、色調は外面青灰色(5PB6/1)、内面灰白色(N7/0)である。115は須恵質の羽釜で、口縁残存率は1/10以下である。調整は内外面ナデ、色調は内外面灰色(N6/0)である。118は緑釉



第35図　調子a1地区出土土器(4)　遺構

陶器底部、残存率1/8で内面に除刻が施される。色調は内外面共に浅黄色(7.5Y7/3)である。

溝ＳＤ101(第35図)　111は土師器の皿で、口縁残存率1/8で、調整は内外面ナデ、色調は内外面浅黄橙色(7.5YR8/6)である。112は灰釉陶器で、口縁残存率1/2である。調整は内外ナデで、色調は内外面灰白色(5Y7/1)である。113は瓦器椀で口縁残存率1/10以下である。調整は内外面不明、色調は外面淡黄色(2.5Y8/3)、内面灰白色(2.5Y8/2)である。114は底部完存の青磁で、調整は外面ケズリ、内面不明、色調は外面灰白色(2.5Y8/1)、内面灰黄色(2.5Y7/2)である。116は須恵器壺体部で、調整は内外面ナデ、色調は外面灰色(N6/1)、内面灰白色(N7/0)である。

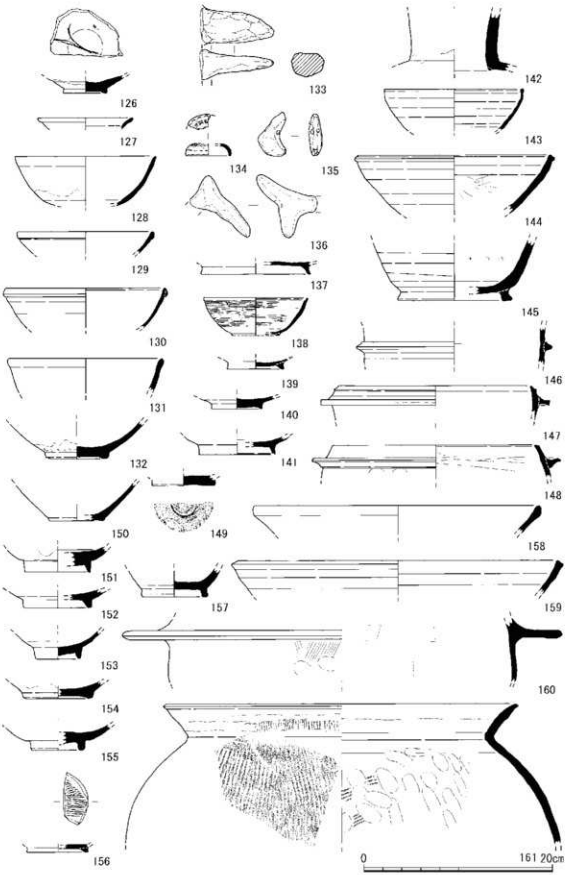
溝ＳＤ173(第35図)　117は須恵器の鉢で、口縁残存率は1/10以下である。調整は内外面ナデ、色調は外面灰色(N6/0)、内面灰白色(N7/0)である。120は土師器皿で、口縁残存率1/10以下である。調整は内外面共にナデ、色調は内外面共に浅黄橙色(10YR8/3)である。

窪み状遺構ＳＸ40(第35図)　122は瓦器椀で、底部残存率1/5である。調整は外面ナデ、内面ミガキ、色調は内外面オリーブ黒色(5Y3/1)である。124は土師器皿で、口縁残存率は1/10以下である。内外面共に調整不明、色調は外面灰白色(10YR8/1)、内面(10YR7/1)である。

窪み状遺構ＳＸ155(第35図)　121・123は土師器皿で、口縁残存率はそれぞれ1/9、1/10以下である。121・123の調整は内外面ナデ、色調は121が内外面灰黄色(2.5Y7/2)、123の外面灰黄色(2.5Y7/2)、内面灰白色(2.5Y7/1)である。

窪み状遺構ＳＸ157(第35図)　119は白磁椀で、底部残存率1/2である。調整は外面ケズリ、内面ナデ、色調は内外面共に灰白色である。125は土師質の羽釜で、口縁残存率は1/5である。調整は内外面共に不明、色調は外面が灰黄色(2.5Y6/2)、内面が灰黄色(2.5Y7/2)である。

包含層(第36図)　126は唐津焼の椀で、底部残存率は1/2である。内面には鉄釉により線が描かれる。外面底部及び台部の一部には釉薬が塗布されていない。127は青磁の皿で、口縁残存率は1/8である。内面には屈曲部に沈線が廻る。色調は内外面共に灰オリーブ色(7.5Y6/2)である。128は白磁椀で、口縁残存率は1/4である。底部付近には施釉されない部分が存在する。釉の部分は灰白色(10Y8/1)、素地の部分は灰白色(7.5Y7/1)である。129・130は白磁椀で、いずれも口縁残存率は1/10以下である。色調は129が内外面灰白色(5Y7/2)、130が内外面共に灰白色(7.5Y8/1)である。131は青磁椀で、口縁残存率は1/10以下である。色調は内外面共にオリーブ灰色(10Y5/2)である。132は白磁椀で、底部残存率は1/2である。高台部には施釉されない。色調は釉の部分が灰白色(5Y7/2)、素地が灰白色(7.5Y8/1)である。133は土師器甑の把手部である。色調はにぶい黄橙色(7.5YR7/4)である。134は青白磁の合子の蓋で、縁部残存率は1/6である。色調は外面明緑灰色(5G7/1)、内面明緑灰色(5G8/1)である。135は土師質の土馬の頭部である。色調は橙色(7.5Y7/6)である。136は土師質の土馬の脚部及び尾の部分である。色調は橙色(7.5Y7/6)である。137は黒色土器椀の底部で、底部残存率は1/6である。調整は外面ナデ、内面不明で、色調は外面がにぶい橙色(7.5YR6/4)、内面黒色(N2/0)である。138は瓦器椀で、口縁残存率1/3である。調整は内外面ミガキ、色調は外面黒色(N2/0)、内面暗灰色(N3/0)である。139は黒色土器椀の底部で、底部の残存率は1/2である。調整は内外面共に不明、色調は外面がにぶい黄橙色(10YR6/4)、



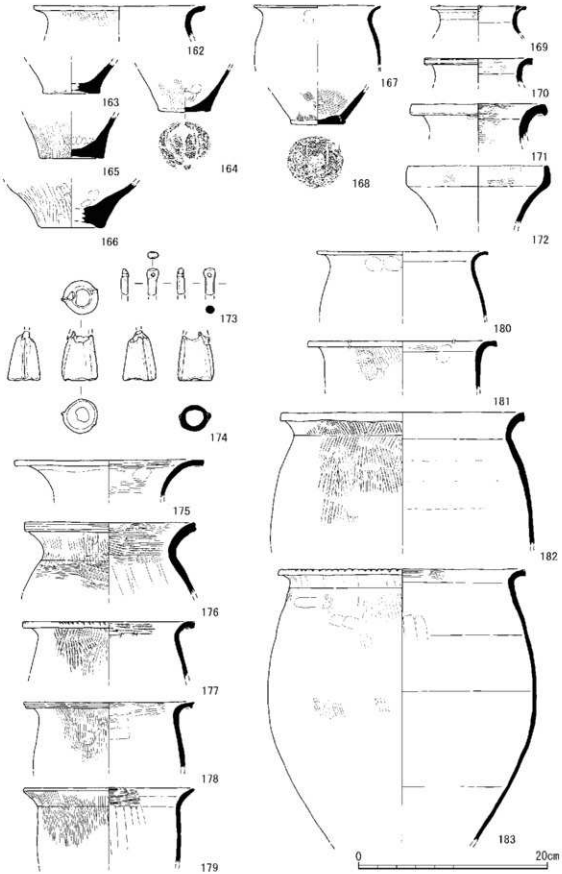
第36図　調子a1地区出土土器（5）　包含層

内面が灰色(N4/0)である。140は緑釉陶器の素地で、底部は完存している。調整は内外面共ケズリ及びナデ、色調は外面が青灰色(5B6/1)、内面が明青灰色(5BP7/1)である。141は緑釉陶器椀である。高台内側を含め全面に施釉されている。高台端内面に段を持っている。内外面共にオリーブ灰色(10Y4/2)である。142は灰釉陶器壺の頸部である。調整は内外面ナデで、色調は内外面とも灰白色(2.5Y7/1)である。143は須恵器の椀で口縁残存率は1/10以下である。調整は内外面ナデ、色調は内外面灰色(N5/0)である。144は須恵器の鉢で、口縁残存率は1/10以下である。調整は内外面共にナデ、色調は外面灰白色(N7/1)、内面灰白色(N6/1)である。145は須恵器壺の底部で、底部残存率は1/4である。調整は外面ケズリ及びナデ、内面ナデ、色調は外面灰白色(N7/1)、内面灰色(N6/1)である。146は須恵器壺の胴部である。調整は内外面ナデ、色調は外面灰色(N6/0)、内面灰白色(N7/0)である。147・148は瓦質の羽釜である。口縁残存率は147が1/10以下、148が1/6である。調整はいずれも内外面ナデである。色調は147の外面暗灰色(N3/0)、内面灰色(N4/0)で、148の外面灰色(N5/0)、内面灰色(N4/0)である。149は緑釉陶器の椀で、底部残存率は1/2である。調整は外面ケズリ、内面ナデである。色調は灰白色(N7/1)で、釉薬が剝がれ素地の色が全体に認められる。150は青磁椀と考えられる。比熱のため色調が著しく変化している。底部残存率は1/4で、色調は内外面灰白色(7.5Y7/1)である。151～154は白磁の椀底部である。底部残存率は順に1/6、1/7、4/5、1/4である。色調は151が灰白色(5Y8/1)、152が外面灰白色(5Y8/1)、内面灰白色(5Y8/2)、153は内外面共灰白色(5Y8/1)、154は外面灰白色(7.5Y8/1)、内面灰白色(10Y7/1)である。155は青磁椀で底部残存率は1/4、色調は内外面オリーブ灰色(2.5GY6/1)である。156は黒色土器底部で、底部の残存率は1/3である。調整は外面がナデ、内面ミガキで、色調は内外面共に黒色(2.5Y2/1)である。157は須恵器壺の底部で、底部残存率1/2である。調整は内外面ナデ、色調は外面灰色(N6/0)、内面灰白色(N7/0)である。158・159は須恵器の鉢で、両者共に口縁残存率が1/10以下で内外面共にナデ調整である。色調は158・159共に内外面灰白色(N7/0)である。160は瓦質の羽釜である。調整は内外面共にハケ及びナデで、色調は内外面暗灰色(N3/1)である。161は須恵器甕で、口縁残存率は1/10以下である。調整は外面タタキ及びナデ、内面は同心円状の当具痕をナデ消す。色調は外面青灰色(5PB6/1)、内面灰色(N6/0)である。

②弥生時代

土坑ＳＫ78(第37図)　162は甕口縁部で、口縁残存率は1/6である。調整は外面ハケ及びナデ、内面ナデで、色調は外面にぶい橙色(7.5YR6/4)、内面にぶい黄橙色(10YR6/3)である。163～165は甕の底部で、底部残存率は順に1/3、4/5、完存である。163の調整は外面ハケ、内面不明で、色調は、外面がにぶい黄橙色(10YR7/4)、内面が灰白色(10YR8/2)である。164の調整は内外面共にハケで、底部には葉脈痕が認められる。色調は外面が灰白色(2.5YR8/2)、内面が灰白色(2.5Y8/1)である。165は、調整が外面ハケ、内面ナデ、色調は外面が黄灰色(2.5Y6/1)、内面が褐灰色(10YR5/1)である。166は壺の底部で、底部残存率は1/2である。調整は外面ミガキ、内面不明で、色調は外面が灰色(2.5Y6/1)、内面が灰黄色(2.5Y6/2)である。

土坑ＳＫ175(第37図)　167は弥生土器甕で、口縁残存率は1/4である。調整は外面がハケ、内



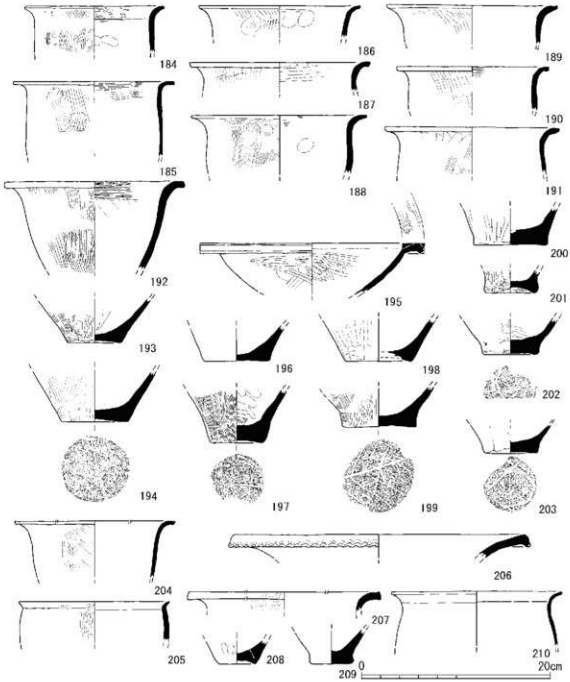
第37図　調子a1地区出土土器(6)　土坑

面は不明である。色調は外面がにぶい橙色(5YR7/4)、内面が浅黄色(2.5YR7/3)である。168は甕底部で、底部は完存している。調整は、内外面共にハケ、底部に葉脈痕が残り、色調は内外面共に暗灰色(N3/0)である。

土坑ＳＫ181(第37・38図)　169 ～ 172は壺口縁部で、口縁部残存率は順に1/2、1/4、1/4、1/4である。169は口縁内面に豆粒状の突起がつけられており、調整は内外面共にハケで、色調は外面が灰白色(2.5YR8/2)、内面が灰白色(7.5YR8/2)である。170の調整は外面がミガキ、内面がハケで、色調は内外面共ににぶい黄褐色(10YR7/3)である。171は調整が外面ハケ、内面不明、色調は内外面共に灰白色(2.5Y8/2)である。172は調整が内外面共にハケ、色調は外面が橙色(7.5YR7/6)、内面が橙色(7.5YR6/6)である。

173は174の銅鐸形土製品の内部から出土した土製の舌である。舌上部は扁平につぶされ、その平坦部に片側から焼成前に穿孔されている。色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)である。174は銅鐸形の土製品である。鈕の部分は発掘時の掘削によって破損している。胴部を形成した後、粘土を貼り付けヒレ部を作り出している。共伴遺物から畿内第Ⅲ様式の年代が与えられる。175・176は壺の口縁部で、口縁残存率は順に1/6、1/4である。175の調整は内外面共にハケ、色調は内外面共ににぶい黄橙色(10YR7/3)である。176の調整は外面がハケ及びミガキ、内面がハケ及びナデ、色調は外面がにぶい黄橙色(10YR7/3)、内面が灰黄色(2.5YR7/2)である。177 ～ 179は甕で、口縁残存率は順に1/6、1/8、1/6である。調整はいずれも内外面ハケで、色調は177の外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面浅黄橙色(10YR6/2)、178は外面浅黄橙色(10YR8/4)、内面浅黄橙色(7.5YR8/4)、179は内外面共に灰白色(2.5Y8/2)である。180 ～ 183は甕で、口縁残存率は順に1/8、1/10、1/4、1/4である。180の調整は内外面不明、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/2)内面灰白色(10YR8/1)である。181の調整は内外面ハケ、色調は内外面共に灰黄褐色(10YR6/2)である。182の調整は外面ハケ内面不明、色調は外面浅黄橙色(10YR8/2)、内面灰白色(2.5Y8/1)である。183の調整は外面ハケ、内面ナデ、色調は外面が橙色(5YR7/6)、内面がにぶい橙色(5YR7/4)である。

184 ～ 191は甕の口縁部で、口縁部残存率は順に1/6、1/4、1/8、1/8、1/8、1/10、1/6、1/4である。184 ～ 188・190の調整は外面ハケ、内面ハケ及びナデで、189・190は外面ハケ、内面は不明である。色調は184の外面灰白色(10YR8/2)、内面灰白色(2.5Y8/2)、185は内外面浅黄橙色(7.5YR8/4)、186は内外面にぶい黄橙色(10YR7/2)、187は内外面灰白色(10YR8/2)、188は内外面にぶい黄橙色(10YR7/2)、189は外面にぶい黄橙色(10YR7/2)、内面灰白色(2.5Y8/2)、190は外面にぶい黄橙色(5YR6/4)、内面褐色(7.5Y5/1)、191は外面にぶい黄橙色(10YR6/3)、内面にぶい黄橙色(10YR7/2)である。192は鉢で口縁残存率1/10以下である。内外面の調整はハケで、色調は内外面共に浅黄橙色(10YR8/3)である。195は高杯で口縁残存率1/8である。調整は内外面ミガキ、色調は内外面にぶい橙色(7.5YR7/3)である。193・194・196 ～ 203は土器の底部である。底部残存率は193・194・196・199・201が完存で、197は4/5、198が1/6、202が1/2、203が4/5である。194・197・199・202・203は底部に葉脈痕が残る。調整は193・194・199・200 ～ 202の外面はハケ、内面はナデである。196の調整は内外面共に不明である。197は外面ハケ、内面ハケ及



第38図　調子a1地区出土土器(7)　土坑・柱穴

びナデ、198は外面ケズリ、内面不明、203は内外面共にナデである。色調は193の外面灰白色(2.5Y8/2)、内面灰白色(2.5YR8/1)、194の外面橙色(5YR6/6)、内面淡橙色(5YR8/4)、196の外面灰白色(10Y8/2)、内面淡黄橙色(7.5YR8/3)、197の外面灰白色(2.5Y8/2)、内面浅黄色(2.5Y7/3)、198の内外面にぶい黄橙色(10YR7/3)、199の外面灰白色(2.5Y8/2)、内面灰白色(2.5Y8/1)、200は外面にぶい黄橙色(10YR7/2)、内面黒(2.5Y3/1)、201は外面灰白色(10Y8/2)、内面灰白色(2.5Y8/2)、202は外面褐灰色(10YR6/1)、内面褐灰色(2.5Y8/2)、203は外面にぶい橙色(10YR7/2)、内面褐灰色(7.5Y5/1)である。

土坑ＳＫ192(第38図)　204は甕で、口縁残存率は1/10以下である。調整は外面ハケ及びナデ、内面ナデ、色調は外面にぶい橙色(5YR7/4)、内面明褐灰色(５YR7/2)である。

土坑ＳＫ200(第38図)　206は壺の口縁部で、口縁残存率は1/10以下である。調整は外面ナデ、内面ハケ、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/4)、内面灰白色(10YR8/2)である。

柱穴ＳＰ199(第38図)　205は甕で口縁残存率は1/6である。調整は外面ハケ内面不明、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面灰白色(10YR8/1)である。207は甕で口縁残存率は1/10以下である。調整は外面ハケ、内面不明、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面灰白色(10YR8/1)である。

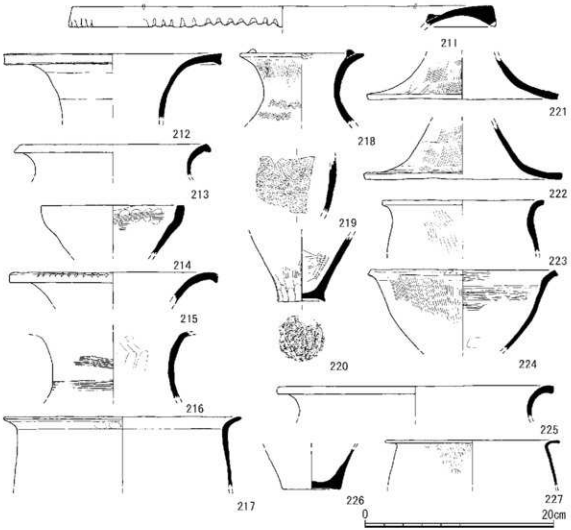
柱穴ＳＰ284(第38図)　209は完存の底部で、内外の調整は不明である。色調は外面褐灰色(10YR5/1)、内面黒褐色(10YR3/1)である。

柱穴ＳＰ285(第38図)　210は甕で口縁残存率は1/4である。調整は内外面不明、色調は外面が浅黄橙色(7.5YR8/4)、内面が浅黄橙色(10YR8/2)である。

柱穴ＳＰ286(第38図)　208は底部で、底部残存率は1/5である。調整は内外面ナデで、色調は外面橙色(2.5YR7/6)、内面灰白色(10YR8/1)である。

溝ＳＤ85(第39図)　212は壺の口縁で口縁残存率は1/6である。調整は内外面不明で、色調は内外面灰白色(10YR8/2)である。213は甕口縁で、口縁残存率は1/6である。調整は内外不明、色調は外面橙色(5YR7/6)、内面橙色(7YR7/8)である。

溝ＳＤ172(第39図)　211は壺の口縁部で口縁残存率は1/6である。口縁部内面には瘤状の突起が作られている。調整は内外面不明、色調は内外面共に浅黄橙色(10YR8/4)である。214は壺の口縁で、口縁残存率は1/6である。調整は外面不明、内面ハケ、色調は内外面灰白色(2.5Y8/2)である。215は壺の口縁部で、口縁残存率1/6である。調整は内外面ナデ、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面にぶい黄橙色(10YR7/4)である。216は壺の頸部である。６条を単位とする櫛描直線文が２条施される。調整は内外面ナデ、色調は内外面共ににぶい黄橙色(10YR7/2)である。217は甕口縁である。残存率は1/4である。調整は内外面不明。218は小型の壺の口縁部で、口縁残存率は1/4である。口縁内面には２か所以上の瘤状の突起が設けられていた。頸部には３条を単位とする櫛描波状文が施される。調整は外面ハケ及びナデ、内面不明、色調外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面浅黄橙色(10YR8/2)である。219は壺の体部で、櫛により施文される。調整は内外面ナデ、色調は内外面にぶい黄橙色(10YR7/4)である。220は完存の底部で、底部には葉脈痕が残る。調整はハケ及びナデ、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/2)、内面褐灰色(10YR4/1)である。221・222は蓋で、縁の残存率は順に1/8、1/6である。両者とも調整は外面ハケ及びナデ、内面ナデ、221の色調は外面灰黄褐色(10YR6/2)、内面灰黄色(2.5Y7/2)、222は外面にぶい黄橙色(10YR7/3)、内面浅黄色(2.5Y7/3)である。223は甕で口縁残存率は1/8である。調整は外面ハケ内面ナデ、内外面浅黄橙色(10YR8/3)である。224は鉢で、口縁残存率は1/5である。調整は外面ハケ及びナデ、内面ハケ及びミガキである。225は甕口縁で、口縁残存率は1/6である。調整は内外面ナデ、色調は外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面にぶい黄橙色(10YR7/4)である。226は甕の底部で、完存している。調整は内外面不明、色調は浅黄橙色(10YR8/3)である。227は甕で口縁



第39図　調子a1地区出土土器(8)　溝

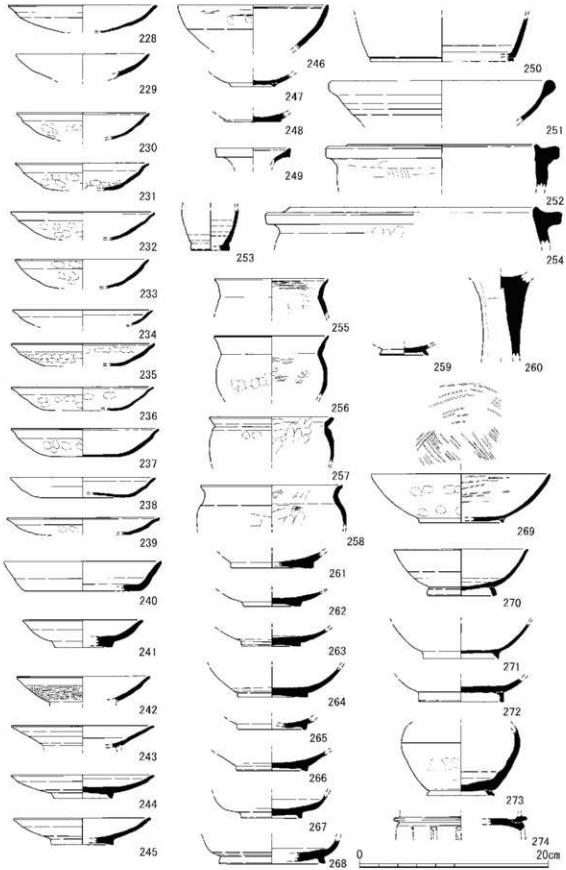
残存率は1/10以下である。調整は外面ハケ内面ナデ、色調は外面灰黄褐色(10YR5/2)、内面黄灰色(2.5Y5/1)である。

(2)長岡京跡右京946次(7ANRHK-7) a2地区

掘立柱建物跡ＳＢ01(第40図)　253はＰ１から出土した。須恵器の壺で、底部残存率1/4である。調整は内外面回転ナデ、色調は内外面灰白色(5Y8/1)である。

土坑ＳＫ16　248は須恵器椀の底部で、底部残存率1/3、糸切り痕が残る。調整は内外面ナデで、色調は外面灰色(N6/0)、内面灰白色(N7/0)である。

土坑ＳＫ21(第40図)　228・229は土師器の皿である。228は口縁残存率1/3で、調整は内外面不明、色調は内外面浅黄橙色(10YR8/3)である。229の口縁残存率は1/10で、内外面の調整は不明。色調は外面浅黄橙色(10YR8/4)、内面淡黄色(2.5Y8/4)である。246は瓦器椀で、口縁残存率1/3、調整は外面ミガキ、内面不明、色調は外面灰色(N6/0)、内面灰白色(2.5Y8/1)である。247は瓦器椀底部で、底部残存率は5/6、調整は内外面不明、色調外面灰色(N5/0)、内面灰白色(N7/0)である。249は須恵器小型壺の口縁部である。口縁残存率1/8、調整は内外面回転ナデ、色調は内外



第40図　調子a2地区出土土器（１）　遺構

面共に灰白色(N7/0)である。

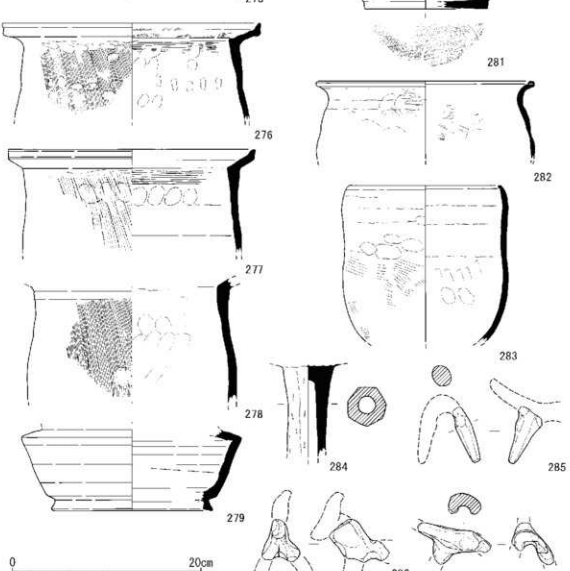
柵列ＳＡ02(第40図)　250はＰ12から出土した須恵器杯Bで、底部残存率は1/10以下である。色調は内外面共に灰白色(7.5Y7/1)である。259はＰ17から出土した須恵器底部で、底部残存率1/6、調整は外面ヘラケズリ、内面ミガキ、色調は内外面共に灰白色である。

溝ＳＤ18(第40図)　251は瓦質の鉢で、口縁残存率は1/8で、調整は内外面回転ナデ、色調は外面灰色(5Y4/1)、内面灰白色(10YR8/1)である。252・254は土師質の羽釜である。252の口縁残存率は1/10で、調整は外面ハケ及びナデ、内面ナデ、色調は外面にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面は灰黄褐色(10YR4/2)である。254の口縁残存率は1/10で、内外面ナデ調整、色調は内外面にぶい橙色(7.5YR6/4)である。

溝ＳＤ30(第40～42図)　230～239は土師器である。口縁部残存率はそれぞれ1/8、1/2、1/6、1/4、1/9、1/6、1/6、1/4、1/6、1/8である。内外面の調整は、確認できるものはナデ及び指オサエである。色調は230の外面橙色(7.5YR7/6)、内面にぶい黄橙色(7.5YR7/4)、231の外面橙色(7.5YR7/6)、内面にぶい橙色(10YR7/4)、232は内外面にぶい橙色(7.5YR5/4)、233は内外面とも橙色(7.5Y7/6)、234は外面灰白色(10YR8/2)、内面浅黄橙色(7.5YR8/3)、235は内外面共に橙色(7.5YR7/6)、236は内外面共ににぶい橙色(7.5YR7/4)、237は外面にぶい橙色(7.5YR7/4)、内面にぶい黄橙色(10YR7/3)、238は外面橙色(7.5YR7/6)、内面橙色(5YR7/6)、239は内外面共に橙色(7.5YR7/6)である。240は須恵器の杯Aで、口縁残存率は1/8である。色調は内外面灰白色(N7/0)である。241は無釉陶器の皿で、口縁残存率1/4、調整は外面ケズリ、内面ナデである。色調は外面灰色(N6/0)、内面灰黄色(2.5Y7/2)である。242は無釉陶器の皿で、口縁残存率は1/4である。調整は外面ミガキ内面ナデ、色調は内外面灰色(N6/0)である。243は灰釉陶器皿で、口縁残存率は1/9である。調整は外面ケズリおよびナデ、内面ナデ、色調は内外面共に灰白色(2.5Y8/1)である。244は無釉陶器の皿で、口縁残存率は1/3である。調整は外面ケズリ内面ナデ、色調は内外面灰白色(N7/0)である。245は無釉陶器の皿で、口縁残存率は1/4である。調整は内外面ケズリ、色調は外面灰色(N6/0)、内面灰黄色(2.5Y7/2)である。255は黒色土器の甕で、口縁残存率1/8、調整は外面ナデ、内面ミガキ及びナデ、色調は外面灰褐色(7.5YR4/2)、内面暗灰色(N3/1)である。256は黒色土器の甕で、口縁残存率1/10以下である。調整は外面ナデ、内面ナデ及びハケ、色調は外面にぶい褐色(7.5YR5/3)、内面暗灰色(N3/1)である。257は土師器の甕で、口縁残存率1/6である。調整は内外面ナデ、色調は内外面灰褐色(7.5YR5/2)である。258は土師器甕、口縁残存率1/6である。調整は外面ナデ、内面ハケ及びナデ、色調は外面褐灰色(10YR4/1)、内面黒褐色(10YR3/1)である。260は土師器高杯の脚部である。調整は外面ケズリ、内面ナデである。色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/4)、内面黒褐色(10YR3/1)で、胎土に雲母を多く含む。

261は軟質の緑釉陶器の底部で、底部残存率1/4である。調整不明で、釉薬の表面は剝落している。色調は内外面とも灰白色(2.5Y8/2)である。262は底部が完存する緑釉陶器で、調整は不明、色調は外面がオリーブ黄色(7.5Y6/3)、内面にぶい黄橙色(10YR7/3)である。263は無釉陶器底部で、残存率は1/3である。内外面調整はナデ、色調は外面灰色(N6/0)、内面青灰色(5PB6/1)で

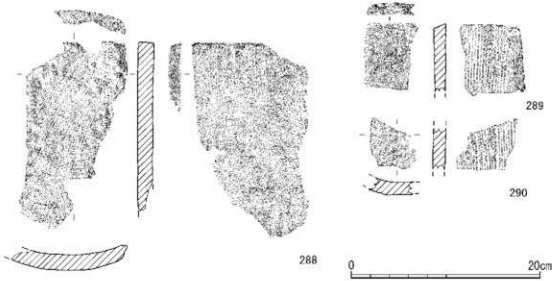
ある。264は底部が完存した無釉陶器である。調整は内外面ケズリ、色調は内面灰白色(2.5Y8/1)、内面灰色(N6/0)である。265は軟質の緑釉陶器で、底部残存率が1/6である。調整は内外面ミガキ、色調は外面浅黄橙色(10YR8/4)、内面灰白色(5Y7/1)である。266は緑釉陶器で、底部残存率が3/4である。調整は外面ケズリ、内面不明、色調は内外面灰白色(2.5Y8/2)である。267は無釉陶器底部で、残存率は3/4である。内外面調整はミガキ、色調は外面灰色(5Y6/1)、内面灰黄色(2.5Y7/2)である。268は須恵器の底部で、残存率は1/4である。調整は外面ナデおよびケズリ、内面ナデ、色調は外面灰色(N6/1)、内面灰色(7.5Y6/1)である。269は黒色土器の椀で、口縁残



第41図　調子a2地区出土土器(2)　溝SD30

存率1/6である。調整は外面ナデ、内面ミガキ、色調は外面黒色(N1.5/0)、内面黒褐色(2.5Y3/1)である。270は灰釉陶器の椀で、口縁残存率2/5である。調整は内外面ナデ、色調は内外面灰白色(2.5Y8/1)である。271は土師器椀で、底部残存率1/4である。調整は内外面ナデ、色調は外面にぶい橙色(7.5YR6/4)、内面は暗灰色(N3/0)である。272は灰釉陶器で、底部残存率1/2である。調整は内外面ナデ、色調は内外面灰白色(N7/0)である。273は須恵器の壺で、底部残存率は1/4である。調整は外面ケズリ及びナデ、内面ナデ、色調は外面黄灰色(2.5Y6/1)、内面灰白色(10YR7/1)である。274は須恵器の円面硯である。

275～278は土師器の甕である。275～277の口縁残存率はそれぞれ1/6、1/4、1/3である。内外面の調整はハケ及びナデある。275～277の色調は内外面にぶい黄橙色(10YR7/3)、278は内外面にぶい黄橙色(7.5YR6/6)である。279は灰釉陶器の平瓶で、底部残存率1/6である。調整は外面ナデ及びケズリ、内面ナデ、色調は内外面灰白色(5Y7/1)である。280は須恵器の鉢で、口縁残存率は1/10以下、調整は内外面ともナデ、色調は内外面とも灰白色(N7/0)である。281は須恵器底部で、底部には糸切痕が残る。底部残存率1/3、調整は内外面ナデ、色調は内外面灰白色(N8/0)である。282は土師器甕で、口縁残存率1/3である。調整は内外面共にハケ及びナデ、色調は内外面浅黄橙色(10YR8/3)である。283は土師質の土器で、口縁残存率は1/4である。調整は外面ハケ及びナデ、内面ナデ、色調は外面浅黄橙色(10YR8/4)、内面灰白色(10YR8/2)である。284は土師器の高杯脚部である。調整は外面ケズリ、内面ナデ、色調は外面橙色(7.5YR7/6)、内面にぶい黄橙色(10YR7/3)である。285～287は土馬である。285は右後ろ足の破片で色調は橙色(7.5YR6/6)である。286は頸部と前足付け根部分で、色調は橙色(7.5YR7/6)である。287は後ろ足付け根及び尾の部分で、色調は浅黄橙色(10YR8/3)である。288～290は平瓦である。凹面には布目、凸面には縄目が認められ、端部はヘラで調整される。色調は288の凹面は褐灰色(7.5YR6/1)、凸面は灰色(N5/0)、289は両面共に灰白色(2.5Y7/1)、290は両面共に灰黄色(2.5Y7/2)

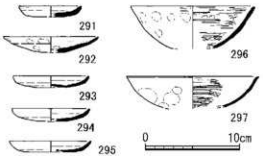


第42図　調子a2地区出土瓦　溝ＳＤ30

である。

(3)長岡京跡右京第946次(7ANRHK-7)　a3地区

井戸ＳＥ01(第43図)　291は土師器皿で残存率1/3、口縁端部にススが付着する。調整は内外面ナデ、色調は内外面浅黄橙色(7.5YR8/3)である。



第43図　調子a3地区出土土器

溝ＳＤ02(第43図)　292～294は土師器皿である。292の口縁残存率は1/3、調整は外面ナデ及び指オサエ、内面はナデ、色調は内外面灰白色(10YR8/2)である。293は口縁残存率1/6、調整は内外面不明、色調は外面浅黄橙色(10YR6/3)、内面灰白色(10YR8/2)である。294は口縁残存率1/4、調整は内外面ナデ、色調は外面が浅黄橙色(7.5YR8/3)、内面は浅黄橙色(7.5YR8/4)である。296・297は瓦器椀である。296は口縁残存率1/5、調整は内外面ミガキ、色調は外面灰色(N5/0)、内面灰色(N4/0)である。297は口縁残存率1/10以下、調整は外面ナデ、内面ミガキ、色調は内外面共に灰色(N4/1)である。

溝ＳＤ03(第43図)　295は土師器皿で、口縁残存率1/2、調整は外面不明、内面ナデ、色調は内外面共に浅黄橙色(7.5YR8/3)である。

(4)長岡京跡右京第969次(7ANRHK-8)　a4-1地区

①中世(第44図)

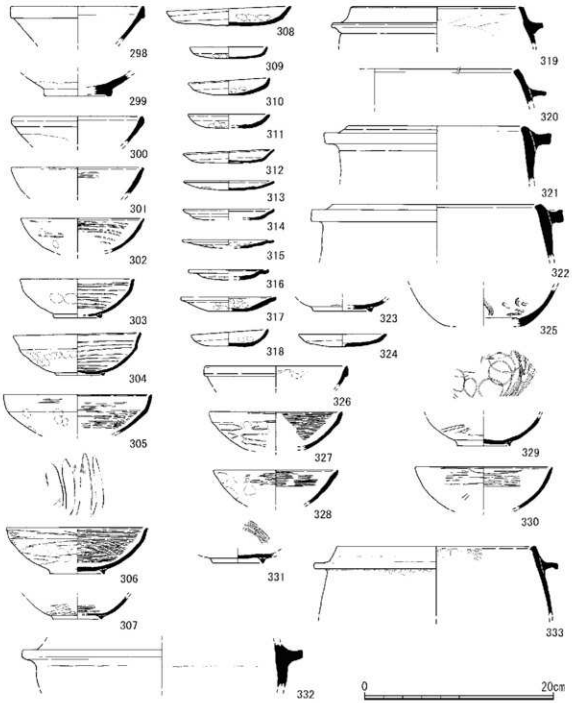
井戸ＳＥ553　298は白磁椀口縁部で、口縁残存率は1/8である。299は白磁椀底部で、底部残存率は1/3である。

土坑ＳＫ356　300は玉縁口縁を持つ白磁椀で、口縁残存率は1/10以下である。305～307は瓦器椀である。口縁残存率は305が1/6、306が1/4、底部残存率は306が1/3、307が9/10である。305と307については接点がないが同一個体の可能性がある。333は土師質の羽釜で、口縁残存率1/10以下で、調整は内外面ともハケ、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面灰白色(10YR8/3)である。

土坑ＳＫ357　327は瓦器椀で、口縁残存率は1/6である。調整は内外面ミガキ、色調は内外面暗灰色(N3/0)である。329は瓦器椀で、底部の残存率は1/3である。調整は内外面ミガキ、色調は内外面灰色(N4/0)である。332は土師質の羽釜である。内外面ナデ調整で、外面の色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)、内面は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。

土坑ＳＫ358　324は土師器の皿である。口縁残存率は1/4で、内外面共にナデ調整であるが、底部にはヘラ状の工具痕が残る。表面の色調はにぶい黄橙色(10YR7/2)～褐色(10YR5/1)、内面は黒色(10YR2/1)～褐色(10YR4/1)を呈する。

土坑ＳＫ359　318は土師器皿である。口縁残存率は3/4で、調整は外面ナデ、内面ナデ及び指オサエである。色調は内外面共ににぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。328～331は瓦器椀で、328・330の口縁残存率は1/4、1/8である。調整は両者とも内外面ミガキ、色調は両者とも灰色(N4/0)である。329・331の底部残存率は1/4、1/10以下で、調整はミガキ、色調は329が内外面



第44図　調子a4-1地区出土土器(1)　遺構

とも暗灰色(N3/0)、331が外面灰色(N4/0)である。

柱穴ＳＰ417　308は土師器皿で、口縁残存率4/5で、調整は内外面ナデ、色調は外面がにぶい橙色(7.5Y7/4)、内面がにぶい橙色(7.5Y7/3)である。

柱穴ＳＰ352　309・310は土師器皿で、口縁残存率は両者とも9/10で、内外面の色調は浅黄橙色(7.5YR8/3)である。

柱穴ＳＰ425　301は瓦器椀口縁部で口縁残存率は1/10以下である。調整は外面不明、内面ミ

ガキ、色調は暗灰色(N3/1)である。

柱穴ＳＰ420　311は土師器皿で1/4の口縁が残存し、色調は内外面共に浅黄橙色(7.5YR8/3)を呈する。

柱穴ＳＰ458　323は黒色土器椀の底部で、外面にはミガキ調整が残る。内外面の色調は黒褐色(2.5YR2/1)を呈する。底部残存率は1/4である。

柱穴ＳＰ467　303は瓦器椀で、残存率1/2、内外面共に暗灰色(N3/1)を呈する。315は土師器皿で、口縁部残存率は4/5で、内面はにぶい橙色(7.5YR5/3)、外面はにぶい橙色(7.5YR5/2)である。

柱穴ＳＰ437　320は土師器の羽釜片である。口縁残存率は1/10以下で径が復元できない。色調は内外面共ににぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。

柱穴ＳＰ496　325は青磁椀体部である。色調は灰オリーブ色(7.5Y5/2)を呈する。

柱穴ＳＰ499　316は土師器皿で、残存率は1/4、内外面は灰白色(10YR8/2)を呈する。胎土には赤色斑粒石が含まれる。317は土師器皿で、残存率1/5、内外面は灰白色(10YR8/2)を呈する。

柱穴ＳＰ469　304は瓦器椀で残存率9/10である。

柱穴ＳＰ487　312～315は土師器皿である。312の残存率は1/3、内外面は浅黄橙色(7.5YR8/3)を呈する。313の残存率は1/10以下、内外面は灰白色(7.5YR8/3)を呈する。314の残存率は1/3、内外面は浅黄橙色(7.5YR8/3)を呈する。315の残存率は1/4、内外面は灰白色(105YR8/2)である。

柱穴ＳＰ644　302は瓦器椀で、口縁残存率が1/7、調整は内外面ミガキ、色調は内外面共に灰色(N4/1)を呈する。

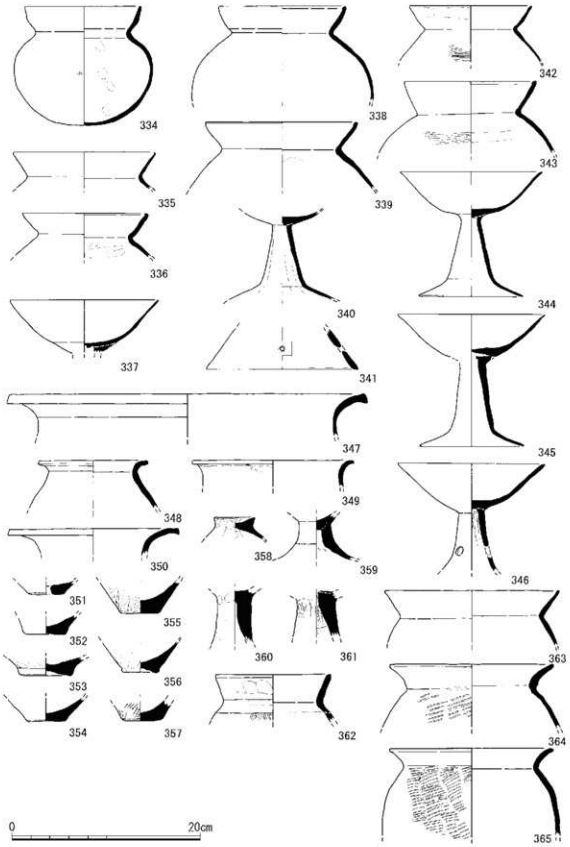
柱穴ＳＰ686　321は土師質の羽釜である。残存率は1/10以下、調整は内外面不明、色調は外面がにぶい赤褐色(5YR5/4)、内面がにぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。

柱穴ＳＰ691　322は土師質の羽釜である。残存率は1/10以下、内外面共にナデ調整、外面はにぶい褐色(7.5YR5/4)、内面はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。

溝ＳＤ554　319は瓦質の羽釜である。口縁残存率は1/6で、内外面共にナデ調整、色調は外面灰色(7.5Y4/1)、内面灰色(N4/1)を呈する。

②古墳・弥生時代

竪穴式住居跡ＳＨ561(第45図)　334は小型の土師器壺で、口縁残存率は1/4、調整は外面ハケ及びナデ、内面は指オサエ、ナデである。色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/4)及び黒褐色(2.5Y2/1)、内面は黄灰色(2.5Y5/1)及びにぶい黄灰色(10YR6/4)を呈している。335は土師器の甕口縁部で、口縁残存率は1/4、内外面の調整は表面剝落のため不明である。色調は外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面浅黄橙色(10YR8/4)を呈する。336は土師器甕口縁部で、口縁残存率3/4、調整は外面ナデ、内面ケズリである。色調は外面がにぶい黄橙色(10YR7/3)及び褐灰色(10YR6/1)、内面がにぶい黄橙色(10YR7/2)及び黄灰色(2.5Y4/1)を呈する。337は土師器高杯の杯部で、口縁は完存し、内外面共にナデ調整である。色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/3)、内面は浅黄橙色(10TR2/1)である。338は土師器の甕である。口縁部残存率は1/3で、調整は口縁内外面はナデ、体部は不明である。色調は外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面は灰白色(10YR8/1)である。339は土



第45図　調子a4-1地区出土土器（2）　竪穴式住居跡

師器の甕で、口縁残存率1/8で調整は不明である。色調は外面灰白色(2.5Y5/1)、内面黄灰色(2.5Y4/1)である。340は土師器高杯である。調整は不明、色調は内外面灰白色である。341は土師器器台の脚部で、脚端部残存率が1/10以下である。穿孔が施されており、内外面の調整は不明である。色調は外面黄灰色(2.5Y5/1)、内面黄灰色(2.5Y4/1)である。342は土師器甕で、口縁部の残存率3/4である。調整は外面ナデ及びハケ、内面は不明である。色調は、内外面浅黄橙(10YR8/3)である。343は土師器の甕で、口縁残存率は1/2である。調整は外面ハケ及びナデ、内面ケズリ及びナデで、色調は内外面褐灰色(10YR6/1)である。344～346は土師器高杯である。344は杯部口縁の残存率は1/4である。調整は内外面共に不明で、色調は外面淡黄橙色(10YR8/3)、内面は灰白色(2.5Y8/1)である。345は杯部口縁の残存率は4/5である。調整は内外面共にナデで、色調は外面にぶい赤橙色(10YR6/3)、内面はにぶい黄橙色(10Y7/2)である。346は杯部口縁の残存率は3/4である。調整は内外面共に不明で、色調は内外面淡黄橙色(10YR7/2)である。

竪穴式住居跡ＳＨ562(第45図)　349は弥生土器甕口縁部で、口縁残存率1/10以下である。調整は外面ハケ、内面は不明である。色調は外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面黄灰色(2.5Y6/1)である。350は弥生土器壺口縁部で、口縁残存率は1/10以下である。調整は内外面共にナデ、色調は外面黒色(N2/0)、内面にぶい黄橙色(10YR7/4)である。358は蓋形土器である。調整は内外面ナデ、色調は外面灰色(N4/1)、内面にぶい橙色(7.5YR7/4)である。359は高杯脚部である。調整は内外面とも不明で、色調は外面浅黄橙色(7.5YR8/4)、内面灰色(7.5YR6/1)である。351は穿孔のある底部で、底部残存率は3/5である。調整は内外面不明で、色調は外面灰白色(2.5Y8/2)、内面浅黄橙色(7.5YR8/4)である。352～357は甕の底部である。352は底部残存率5/6、調整は内外面不明、色調は外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面灰白色(10YR8/2)である。353は底部の残存率5/6で、調整は内外面不明、色調は内外面灰白色(2.5Y8/1)である。354は底部の残存率1/2、内外面の調整不明、色調は内外面灰白色(2.5Y7/1)である。355の底部残存率は1/2、調整は外面ハケ、内面不明である。色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面灰色(N5/)である。356の底部は完存で、調整は外部ケズリ、内面不明である。色調は外面にぶい橙色(7.5YR7/3)、内面浅黄橙色(7.5YR8/3)である。357は底部完存で、調整は外部タタキ後ナデ、内部ナデで、色調は外面にぶい黄橙色(10YR6/4)、内面褐灰色(10YR4/1)である。360は高杯脚部である。調整は外面ハケ後ナデ、内面はナデ、色調は外面浅黄色(2.5Y7/3)、内面橙色(5YR6/6)である。362はＳＨ562床面で検出した柱穴ＳＰ362で出土した土師器甕である。他の遺物と比べ新しいことから住居跡に共伴する可能性は低いと考えられる。口縁残存率は1/6で、調整は外面ハケ、内面ナデ、色調は内外面明赤褐色(5YR5/5)である。363～365は甕の口縁部から体部にかけての破片である。363の残存率は1/2、調整は外面ナデ、内面不明、色調は外面にぶい黄橙色(7.5YR7/4)、内面にぶい橙色(7.5YR7/3)、胎土に含まれる砂粒は微細である。364の口縁残存率は1/4で、調整は外面タタキ、内面ナデ、色調は内外面共ににぶい橙色(7.5YR7/3)である。365は口縁残存率1/6で、調整は外面ナデ及びタタキ、内面はハケ後ナデ、色調は外面にぶい橙色(7.5YR6/4)、内面にぶい黄褐色(10YR5/4)である。

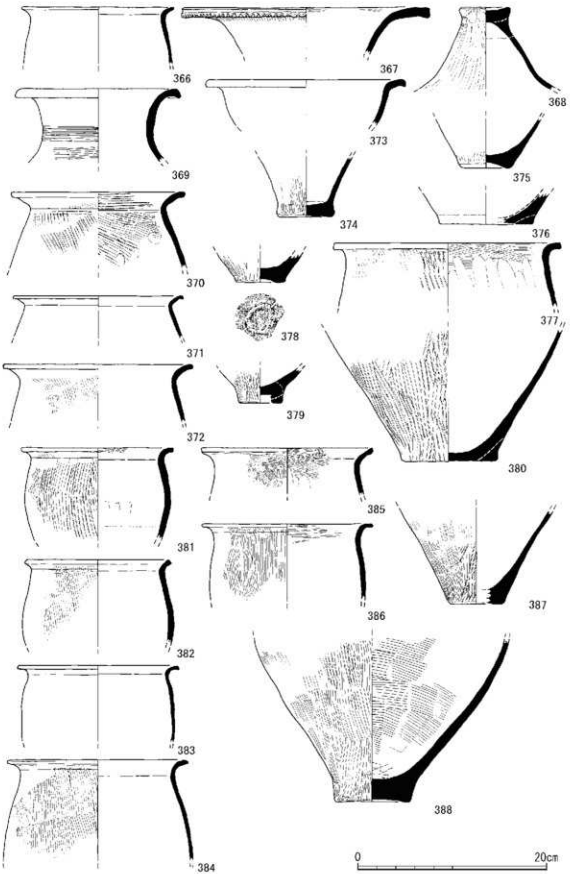
竪穴式住居跡ＳＨ568(第45図)　347は弥生土器甕口縁部で、口縁残存率は1/10以下である。

調整は内外面不明で、色調は内外面共に灰白色(10YR8/2)、胎土には石英・長石・チャート・赤色斑粒が含まれる。348は甕で、口縁部残存率は1/8である。内外面の調整は不明で、色調は外面灰黄褐色(10YR6/2)、内面黄灰色(2.5Y5/1)、胎土には石英・長石が含まれる。361は土師器高杯脚である。上面で検出した竪穴式住居跡のものが混入したと考えられる。調整は不明で、色調は内外面共に灰白色(10YR8/2)、胎土に3mmの石英・長石・チャートを含む。

土坑ＳＫ556(第46図)　367は弥生土器壺口縁部で、口縁残存率1/4である。調整は内外面共にハケ、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面浅黄橙色(10YR8/3)である。368は蓋形土器である。調整は外面ハケ及びナデ、内面ナデ、色調は内外面にぶい黄橙色(10YR7/3)である。383は甕で口縁部残存率は1/6、調整は内外面共に不明、色調は内外面共に浅黄橙色(10YR8/3)である。

土坑ＳＫ565(第46図)　366・370～372・374～377は弥生土器甕である。366の口縁残存率は1/4、調整は内外面共に不明、色調は外面にぶい黄橙色(10YR6/3)、内面褐灰色(10YR4/1)である。370は残存率1/8、調整は内外面ハケ、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/3)、内面浅黄色(2.5Y7/3)である。371の口縁残存率は1/8、内外面の調整は不明、色調は外面にぶい橙色(7.5YR7/4)、内面浅黄橙色(10YR8/3)である。372は口縁残存率1/4、調整は内外面共にハケ後ナデ、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/3)、内面灰白色(10YR8/1)である。374は甕の底部で、底部は完存である。調整は外面ハケ、内面不明、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/2)、内面にぶい橙色(7.5YR7/3)である。375の底部は完存し、調整は外面ハケ、内面ナデ、色調は外面にぶい橙色(7.5YR7/4)、内面にぶい橙色(10YR4/3)である。376は底部残存率1/3で、調整は内外共に不明、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/2)、内面褐灰色(10YR5/1)である。377は口縁残存率1/4、調整は内外面共にハケ及びナデ、色調は内外面浅黄橙色(10YR8/3)、胎土には石英・長石・赤色斑粒が含まれる。369は壺で口縁残存率1/6、頸部に2単位の櫛描直線紋が施される。調整は内外面共にハケ後ナデ、色調は外面にぶい橙色(7.5YR5/4)、内面にぶい橙色(10YR7/3)である。調整は内外面共にナデ、色調は外面にぶい黄橙色(10YR6/4)、内面灰黄褐色(10YR4/2)である。

土坑ＳＫ566(第46図)　378～380・387は弥生土器底部である。378は底面に葉脈の圧痕が認められる。底部の残存率1/2、調整は外面ハケ内面不明、色調は外面黒色(10YR2/1)、内面灰白色(10YR7/1)である。379は底部がくぼみ高台状を呈する。底部の残存率は1/2、調整は外面ハケ、内面ナデ、色調は外面黒色(2.5Y2/1)、内面灰白色(2.5Y8/2)である。380はＳＫ565内出土破片と接合関係が認められる。底部の残存率4/5、調整は外面ハケ、内面ナデ、色調は外面浅黄色(2.5Y7/3)、内面浅黄橙色(10YR8/3)、である。381・382・384～386は甕である。381は底部残存率1/4、調整は外面ハケ、内面不明、色調は外面にぶい橙色(7.5YR7/4)、内面にぶい橙色(7.5YR6/3)である。381は口縁残存率1/6、調整は内外面共にハケ及びナデ、色調は外面にぶい黄橙色(10YR6/3)、内面浅黄橙色(10YR8/2)である。382は口縁残存率1/10以下、調整は内外面共にハケ及びナデ、色調は外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面浅灰色(5Y4/1)である。384は口縁残存率1/6、調整は外面共にハケ、内面不明、色調は外面浅黄橙色(7.5YR8/4)、内面浅黄橙色(7.5YR8/3)である。385は口縁残存率1/8、調整は内外面共にハケ及びナデ、色調は外面にぶい



第46図　調子a4-1地区出土土器（3）　土坑

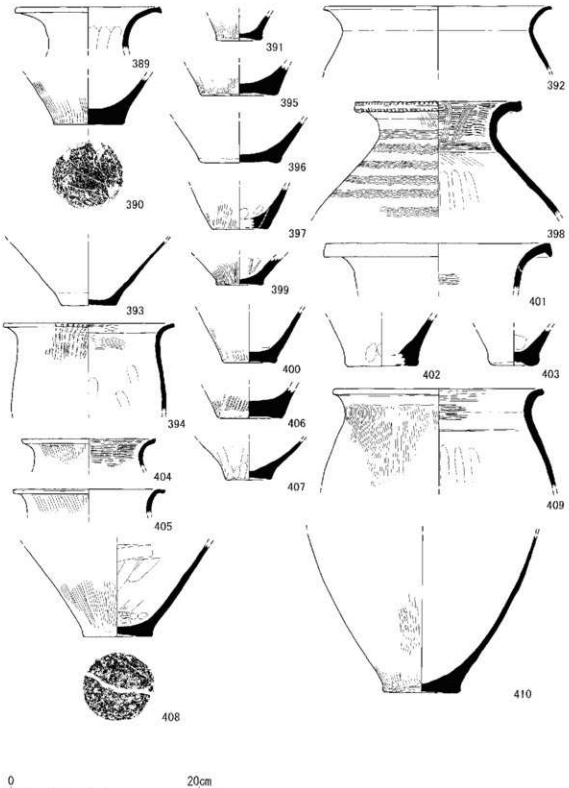
黄橙色(10YR6/3)、内面にぶい黄橙色(10YR7/3)である。386は口縁残存率1/8、調整は外面ハケ内面ハケ及びナデ、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面浅黄橙色(10YR8/3)である。

土坑ＳＫ567(第47図)　388・390・391は弥生土器底部である。388は底部が完存し、内外面の調整はハケ及びナデである。色調は外面が黄灰色(2.5Y4/1)、外面が灰黄色(2.5Y7/2)である。390は底面に葉脈圧痕が残されており、底部は完存している。調整は内外面ハケ、色調は内外面共ににぶい黄橙色(10YR7/3)である。391は底部が完存し、外面内面共にハケ調整、色調は外面にぶい橙色(7.5YR7/4)、内面暗灰色(N3/0)である。389は壺の口縁で、口縁残存率は3/4である。調整は内外面ナデ、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/4)、内面浅黄橙色(10YR7/3)である。392は甕の口縁部で、口縁残存率は1/4である。調整は内外面不明、色調は外面浅黄橙色(10YR8/4)、内面灰白色(10YR8/2)である。

土坑ＳＫ640(第47図)　393・395～397は弥生土器の底部である。393は底部残存率1/2、調整不明、色調は外面灰白色(10YR8/1)、内面浅黄橙色(10YR8/3)である。395は底部完存、内外面の調整は不明、色調は外面浅黄橙色(7.5YR8/4)、内面灰白色(10YR8/1)である。396は底部完存、内外面の調整は不明、色調は外面浅黄橙色(7.5YR8/3)、内面浅黄橙色(7.5YR8/4)である。397は底部残存率1/2、調整は外面ハケ、内面不明、色調は外面にぶい橙(7.5Y7/4)、内面浅黄橙色(7.5YR8/4)である。394は甕の口縁部で、口縁の残存率は1/10以下、調整は内外面ハケ、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面浅黄橙色(10YR8/3)である。398は壺の口縁から体部にかけてで、口縁残存率5/6、調整はハケ及びナデ、色調は外面浅黄橙色(7.5Y8/4)、内面褐灰色(7.5Y6/1)である。

土坑ＳＫ641(第47図)　399・400・402・403は弥生土器の底部である。399の底部残存率は1/4、調整は内外面共にハケ、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面浅黄橙色(10YR8/3)である。400の底部は完存で、調整は外面ハケ、内面は不明である。色調は外面浅黄橙色(7.5YR8/3)、内面浅黄橙色(10YR8/3)である。402は口縁残存率1/4、調整は内外面共に不明、色調は内外面浅黄橙色(10YR8/3)である。403は底部残存率1/2、調整は外面ナデ、内面不明で、色調は外面橙色(2.5YR7/6)、内面灰色(N4/0)である。401は壺で、口縁残存率1/6である。調整は外面不明、内面ハケ、色調は外面にぶい橙色(7.5YR7/4)、内面灰白色(10YR8/2)である。404は甕の口縁で、残存率は1/4である。調整は内外面共にハケ、色調は外面灰黄褐色(10YR6/2)、内面にぶい黄橙色(10YR7/2)である。405は甕の口縁で、口縁残存率1/11、調整は外面ハケ及びナデ、内面ナデである。色調は外面がにぶい黄橙色(10YR7/3)、内面が灰白色(10YR8/1)である。

土器埋納遺構ＳＸ614(第47図)　406～408・410は弥生土器の底部である。406は底部が完存し、調整は外面ナデ、内面不明、色調は外面にぶい橙色(7.5YR7/3)、浅黄橙色(10YR8/3)である。407は底部が完存し、調整は外面ナデ、内面不明、色調は浅黄橙色(10YR8/2)、内面褐灰色(7.5Y4/1)である。408は底部が完存し、葉脈圧痕が残る。調整は内外面ハケ、色調は外面橙色(2.5Y6/6)、内面にぶい黄橙色(10YR7/4)である。410は底部が完存し、調整は外面ハケ、内面不明、色調は外面橙色(5YR6/6)、内面灰白色(10YR8/1)である。409は甕で口縁は完存する。調整は内外面ハ



第47図　調子a4-1地区出土土器（4）　遺構

ケ及びナデ、色調は外面浅黄橙色（10YR8/3）、内面灰白色（10YR8/2）である。409は甕の口縁部で、口縁は完存、調整は内外面共ハケ及びナデ、色調は外面が浅黄橙色（10YR8/3）、内面灰白色（10YR8/2）である。

(5)長岡京跡右京第969次(7ANRHK-8)　a4-2地区

①平安時代・中世(第48図)

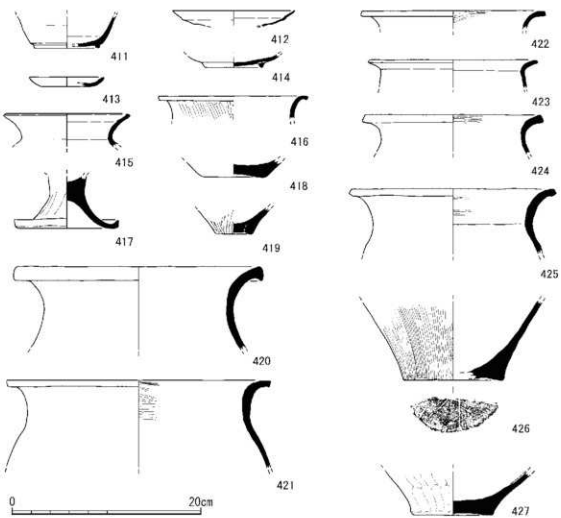
土坑ＳＫ720　414は黒色土器の椀底部で底部完存率は7/8である。内外面の色調は暗灰色(N3/)である。415は須恵器甕の口縁部で、口縁残存率1/10以下である。調整は内外面共に回転ナデで、色調は外面灰色(N6/0)、内面灰白色(N7/0)である。

柱穴ＳＰ714　413は瓦器の皿で、口縁残存率1/8である。内外面共に不明、色調は外面灰白色(10YR7/1)、内面暗灰色(N3/0)である。

包含層　411は須恵器の杯Bの底部である。底部残存率は1/3で調整は回転ナデ、色調は外面暗青灰色(5PB4/1)、内面灰色(N6/0)である。412は土師器皿で、口縁残存率1/4である。調整は内外面ナデ、色調は内外面灰白色(10YR8/2)である。

②弥生時代(第48図)

土坑ＳＫ640　423は甕の口縁で、口縁残存率が1/6である。調整は不明、色調は外面が浅黄橙色(7.5YR8/4)、内面がにぶい黄橙色(10YR7/3)である。424は口縁部で口縁残存率1/3で、調整



第48図　調子a4-2地区出土土器

は外面不明、内面ハケ、色調は外面浅黄橙色(7.5YR8/3)、内面浅黄橙色(7.5YR8/4)である。426は底部残存率1/3で底部に葉脈圧痕が残る。調整は外面ハケ内面不明、色調は外面にぶい橙色(7.5YR7/4)、内面浅黄橙色(7.5YR8/4)である。427は底部が完存し、調整は内外面共にナデ、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/3)、内面褐灰色(10YR6/1)である。

土坑ＳＫ724　425は甕の口縁で、口縁残存率は1/3である。調整は外面不明、内面ハケ、色調は外面灰白色(2.5Y8/1)内面にぶい橙色(5YR7/4)である。

土坑ＳＫ727　419は完存の底部で、調整は外面ハケ、内面はナデ、色調は外面黒褐色(10YR3/1)、浅黄橙色(10YR8/4)である。

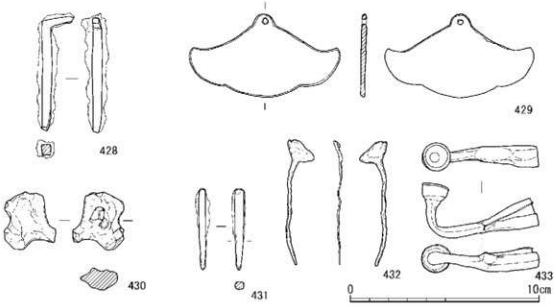
土坑ＳＫ735　420は壺口縁部で、残存率は1/4で調整は内外面不明、色調は外面にぶい橙色(7.5YR6/4)、内面にぶい黄橙色(10YR7/3)である。

ＳＫ737　416は甕口縁で、残存率は1/6である。調整は外面ハケ、内面不明、色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)、灰白色(10YR8/1)である。418は完存の底部で、調整は内外面不明、色調は外面(10YR8/2)、内面にぶい黄橙色(10YR7/3)である。

包含層　417は脚部で脚部端は完存している。調整は外面・内面共にナデ、色調は外面浅黄橙色(10YR8/4)、内面浅黄色(2.5Y7/4)である。421は甕口縁部で、残存率は1/10以下、調整は外面不明、内面ハケ、色調は外面灰白色(10YR7/2)、内面は褐色(10YR6/1)である。422は甕口縁部で残存率は1/10以下、調整は外面不明、内面ハケ、色調は内外面共に浅黄橙色(10YR8/4)である。

2)金属製品(第49・50図)

428はa1地区ＳＰ106から出土した鉄釘である。断面は正方形で頂部を折り曲げることによって作り出している。431はa1地区ＳＴ201で出土した鉄釘である。墓壙内から出土していることから棺に用いられた可能性もあるが、この１点のみの出土であることと、棺が木を組み合わせて作られていることから構造的には釘を必要としないが棺蓋を止めていた可能性は否定できない。



第49図　調子地区出土金属製品

第50図　調子地区出土銭貨

429はa2地区東部包含層中から出土した青銅製の傘型を呈した板状の製品である。本来の遺構からは出土していないが、寺院の堂塔や、厨子につけられた風鐸に吊り下げられた風招と考えられる。432はa1地区西半部重機掘削で出土した青銅製の薄板を茸状に切った製品である。429の風招と考え合わせると、仏像や寺院内の装飾品の一部として用いられていた可能性もある。

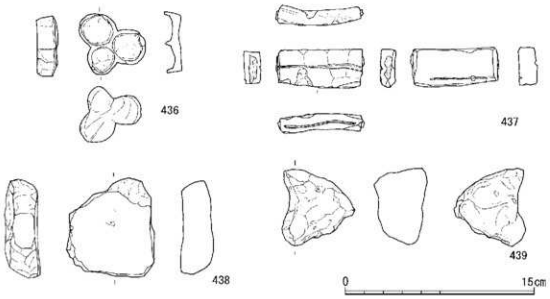
433はa4-2地区の包含層から出土した銅製のキセルの雁首である。形状から江戸時代前半のものと考えられる。430はa1地区ＳＰ218出土の金属を溶解したときに生じる滓である。

434はa1地区包含層から出土した紹元聖寶である。435はa1地区重機掘削中に出土した寛永通宝である。

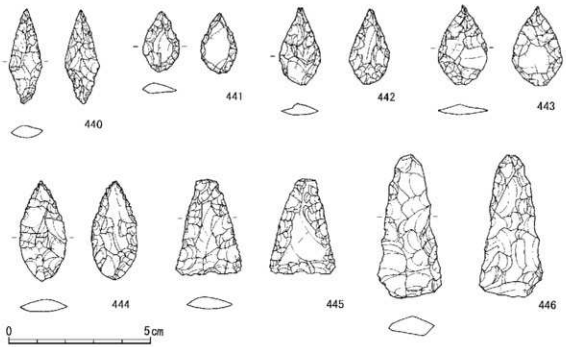
3）石器・石製品（第51～53図）

436はa1地区ＳＰ27出土の滑石製の紅皿である。１つの素材から作られているがちょうど３つの容器が接合したような形状を示す。素材の滑石は紅皿底部では全体が内彎しており、器のすわりがよいように、３つの角部が平らに加工されている。本来の形状を類推すると、石鍋の滑石が転用されたものと考えられる。437はa1地区包含層出土の滑石製品である。外湾した面には鑿跡が残り、煤も認められる。器表面には分割するためと考えられる線刻が残る。石鍋を転用した温石と考えられる。438はa4-1地区ＳＰ354から出土した砂岩製の砥石である。439はa2地区ＳＤ30から出土した凝灰岩の破片である。凝灰岩は長岡京跡右京第968次調査でも発見されている。金属製品において寺院関連の遺物が出土していることから、堂塔の基壇の化粧石として用いられていたと考えられる。

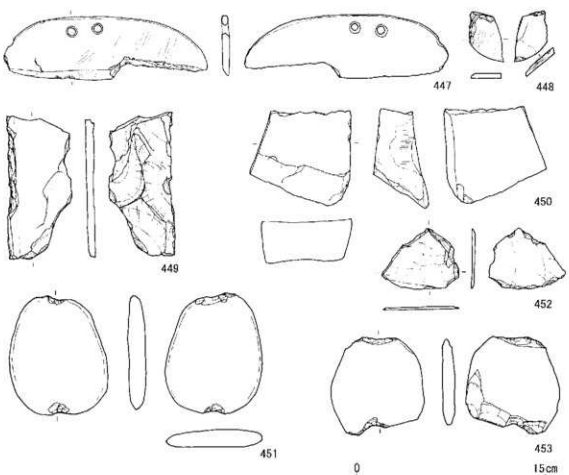
440～445はサヌカイト製の石鏃である。440・442はa4-1地区ＳＫ565、441はa4-1地区ＳＰ



第51図　調子地区出土石製品（１）



第52図　調子地区石製品（2）



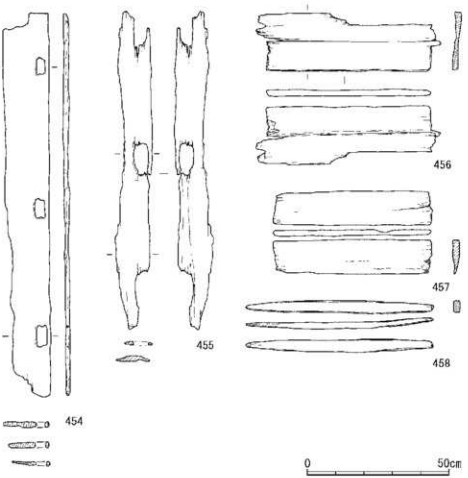
第53図　調子地区出土石製品（3）

618、443はa4-1地区ＳＰ118、444はa4-2地区ＳＫ724、445はa4-1地区ＳＫ566から出土している。446はa4-1地区包含層から出土した。基部側には折れ面があり折れ面からの加工が認められる。石槍や石剣からの再利用の可能性や石鏃の未成品であると考えられる。

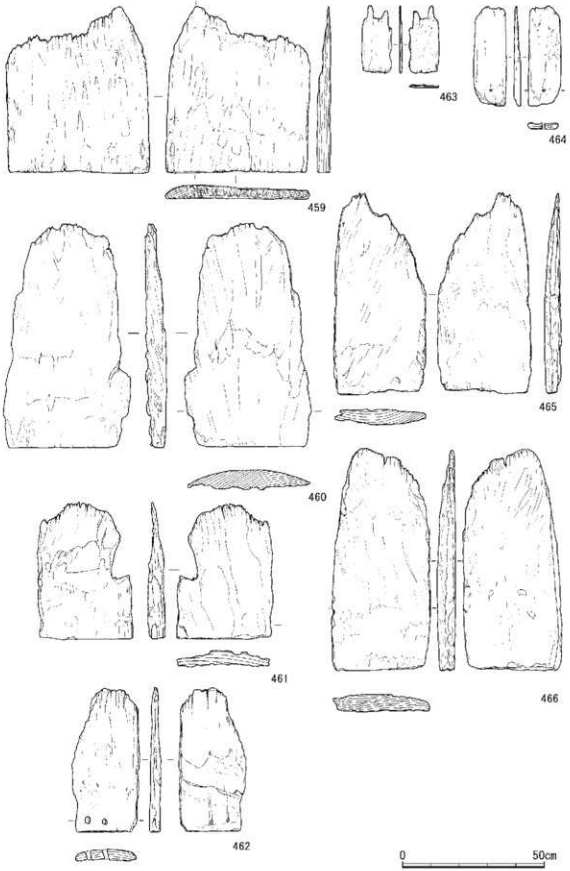
447はa4-1地区出土の粘板岩製石庖丁である。紐穴は２か所で、両面から穿孔されている。刃部側は破損しているが縁辺が摩滅しているため破損後も一定期間使用されたものと考えられる。刃部には使用による痕跡が認められる。448はa4-2地区包含層出土の研磨痕のある粘板岩製剝片である。図面左側の平面と側面に研磨痕が残る。449・452はa1地区ＳＫ181出土の粘板岩製剝片である。450はa4-1地区ＳＫ565から出土した砂岩製の砥石である。451・453はa4-1地区ＳＫ640出土の円礫を利用した石錘である。

４）木製品

木棺墓ＳＴ201（第54図）　454は木棺東側板である。底板を支えた桟が差し込まれた枘穴が３か所認められる。上部が腐食のため棺の高さは復元できない。455は木棺西側板である。腐食が著しいが３か所の枘穴が確認できる。456は木棺北側小口板である。457は南側小口板である。458は底板を補強するための桟である。枘穴のうち中央に位置する場所に対応する形で検出できた。他の桟及び底板は痕跡のみが確認でき、取り上げることができなかった。

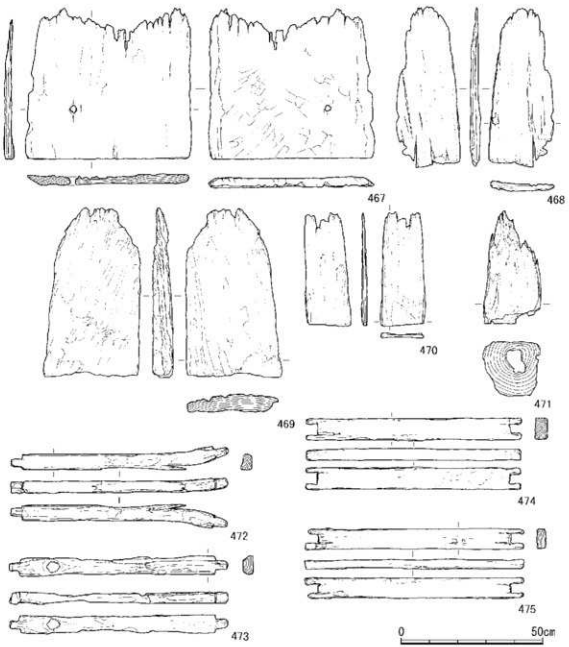


第54図　調子a1地区出土木製品（１）　木棺墓ＳＴ201木棺材



第55図　調子a1地区出土木製品（2）　井戸ＳＥ244部材

井戸ＳＥ244（第55・56図）　459は井戸枠北面西側の板材である。465は井戸枠北面東側の板材である。460は井戸枠東面南側の板材である。461は井戸枠東面北側の板材である。462は井戸枠西面中央の板材である。463は井戸枠東面東側の板の裏込め側で出土した板材である。464は井戸枠西面北側の板である。466は井戸枠南面東側の板である。467は井戸枠南面西側の板材である。468は井戸枠西壁南側の板材である。469は井戸枠西壁北側の板材である。470は井戸枠東壁北側の板材と裏込めの間から出土した。472は南側の横桟である。473は北側の横桟である。474は東側の横桟である。475は西側の横桟である。471は井戸枠南側の掘形内から出土した両端に刳り込みのある棒状の木製品である。



第56図　調子a1地区出土木製品（3）　井戸ＳＥ244部材ほか

5．まとめ

今回の調子a地区では弥生時代中期から近世までの遺構を検出することができた。時代を追って遺構の特徴をまとめて行きたい。

弥生時代　調子a地区の南東部分に安定した遺構面が存在した。この地域の北西側は古墳時代後期以後に流路があったと考えられる。調子のb地区(未報告)の状況と考え合わせると本来は北東方向にも弥生時代以前に形成された地層が存在していたものと考えられる。調子地区一帯は、地形分類上自然堤防とされている。その自然堤防の形成時期は弥生時代中期以前と位置でづけることができる。

竪穴式住居跡ＳＨ702・568を２基検出しているが、b地区含め他に検出はできなかった。また、一見方形周溝墓の溝の残欠であると考えられる平面形を持つ溝状の遺構が存在するが、掘削の結果土坑状の遺構が連なっていることがわかり方形周溝墓である確証は存在しない。

土坑ＳＫ181は弥生時代中期中葉の土坑であるが、この遺物中から銅鐸形土製品が出土した。これは粘土紐によって両側に鰭が付けられている外縁付鈕式である。共伴遺物から畿内第Ⅲ様式の時期であることがわかり、時期を特定できる希少な資料である。その内部から舌が出土しており、音は異なったであろうが音を出すと言う役割も果たしたものと想定できる。銅鐸形土製品は全国から180例以上出土しているが、鐸身と舌が共伴した例は本例以外にはない。なお、調査地の南には中期中葉の方形周溝墓を検出した下植野南遺跡があり、今回の調査地との関係が問われるところである。

古墳時代　調子a地区の北東部の遺構検出面下層の礫層から古墳時代後期の須恵器片が出土している。この地域では古墳時代の遺構をまったく検出できなかった。南東部分で検出できた遺構は庄内期と古墳時代前期の竪穴式住居跡である。乙訓地域は元稲荷古墳・寺戸大塚古墳といった古墳時代初頭～前期の首長墓が多く残っている地域である。調子地区に隣接して鳥居前古墳(福永ほか1990)、境野１号墳(古閑ほか2007)の前期古墳がある。これらの古墳に対応する集落遺跡が発見されていなかった。この地域で河川に削り残された地域で存在することは、本来川に近い部分に古墳時代の前期の集落が広がっており、その後の河道の変更によって居住地が削られてしまったと仮定することもできる。

長岡京期　長岡京条坊復原によると、今回の調査地は右京九条一・二町に当たる。調子a地区の北東部は後述するように、平安時代に徐々に地形面が安定し、中世に遺構が営まれるようになった。よってこの地域には長岡京期の遺構が仮に存在していたとしても、その後の改変によって残っていないことになる。南西部の地域では遺構が存在していたならば残っているはずであるが、検出することができなかった。遺物の中には長岡京期としてもおかしくないものも存在する。

平安時代・中世　a2地区ではＳＤ30から平安時代前期から中期の遺物が多く出土した。この溝は長岡京跡右京第968次調査(森島2011)で検出されたＳＤ36と同じものである。右京第968次調査では溝の中から三重圏文軒丸瓦、平城宮式6663E式軒平瓦や凝灰岩片が出土している。今回の調査でも瓦片、凝灰岩、風招などが出土している。これら溝の遺物は、現在の集落が存在する西側

の地形が高くなった部分から捨てられていることから、未知の古代寺院が調査地西側に存在していたことが窺われる。その古代寺院は瓦が平城宮に使われているものであることから、長岡京期の寺院修理の可能性があり、長岡京期にも存在していた可能性も指摘できる。

古墳時代以後で、遺構が多く確認できる時期は11世紀から12世紀にかけてである。土地が安定し、離水した後集落が広がったものと考えられる。遺跡内ではa1地区のＳＢ01、a4-1地区のＳＢ01、a4-2のＳＢ705の３棟の掘立柱建物跡を検出することができた。また同時期の井戸ＳＥ244のほか多数の柱穴、土坑を検出することができた。また12世紀には木棺墓ＳＴ201が作られた。

12世紀以後、この地域では耕作溝や野井戸といった耕作関係の遺構があるのみで、居住域としての役割を果たしていなかったものと考えられる。

参考文献

岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成15年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第113冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2005

岩松保ほか「大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡報告書」(『京都府遺跡調査報告集』第133冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2009

岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成16年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第118冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2006

岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成17年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第124冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2007

岡崎研一ほか「京都第二外環状道路関連遺跡平成20年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第137冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2010

古閑正浩ほか『境野１号墳』大山崎町教育委員会　2007

中川和哉「京都第二外環状道路関係遺跡長岡京跡（長岡京跡右京第927次）・伊賀寺遺跡」(『京都府遺跡調査報告集』第136冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2010

中川和哉・高野陽子ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成19年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第131冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2009

中川和哉・戸原和人「京都第二外環状道路関係遺跡平成18年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第126冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2008

福永伸哉ほか『鳥居前古墳－総括編－』大阪大学文学部考古学研究室　1990

増田孝彦「長岡京跡右京第910次(7ANOIR-5・NNT-3地区)・941次(7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4地区)・友岡遺跡・伊賀寺遺跡発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第133冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2009

森島康雄「長岡京跡右京第968次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第141冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2011

肥後弘幸「長岡京市調子２丁目出土の銅鐸形土製品について」(『京都府埋蔵文化財情報』第111号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2010

2.木津川河床遺跡第20・21次発掘調査報告

1．はじめに

木津川河床遺跡は、京都市街の南方にあり、木津川・宇治川・桂川の3川が合流し、淀川となって大阪湾へ流れる、その合流地点に位置している。今回、国土交通省近畿地方建設局淀川河川講堂事務所が実施する緊急河川敷道路整備事業の実施に伴い、道路建設部分と高水敷部分を工事することになり、その事前調査として、平成19年度と20年度の２か年にわたり発掘調査を、平成22年度には整理報告作業を実施した。調査地点は、現在河川敷ではあるが、明治２年の大規模な河川付け替え工事以前は、田畠が広がっていたようである。また、現在の河道は明治３年の付替工事によるものであり、河床で多くの土器・陶磁器が採集されていることから、木津川河床遺跡は古代～中世の集落があったと考えられている。遺跡の範囲は広く、木津川河川敷を中心に、東西4.5km、南北1.5kmの範囲が周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲である。現在までに21回の発掘調査が行われており、遺跡の東部で弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡が確認されている。また、現在の河道の中で、中世と思われる井戸が点々と確認されている。今回の調査地は遺跡のもっとも西部に位置している。

平安時代前期に、調査地南方約１kmに、石清水八幡宮が造営され、天皇をはじめとして多くの人々の信仰の対象となり、中世には繁栄していた。同じ頃、木津川の対岸の大山崎町では荏胡麻商人が活躍しており、調査地周辺が、全国と都とを結ぶ物流の拠点であったことが知られている。

なお、伏見城天守閣が倒壊した、いわゆる慶長の伏見大地震(1596年)に伴う噴砂も発掘調査で数多く見つかっている。

現地調査責任者　調査第２課長　肥後弘幸

調 査 担 当 者　(第20次)

調査第２課調査第１係長　小池　寛

同　次席総括調査員　伊野近富

同　主任調査員　松井忠春

同　調査員　松尾史子・筒井崇史

(第21次)

調査第２課課長補佐兼調査第１係長　小池　寛

同　主任調査員　松井忠春・引原茂治・増田孝彦

同　専門調査員　石尾政信

(整理作業)

調査第２課課長補佐兼調査第１係長　小池　寛

同　次席総括調査員　伊野近富

調　査　場　所　八幡市科手～橋本

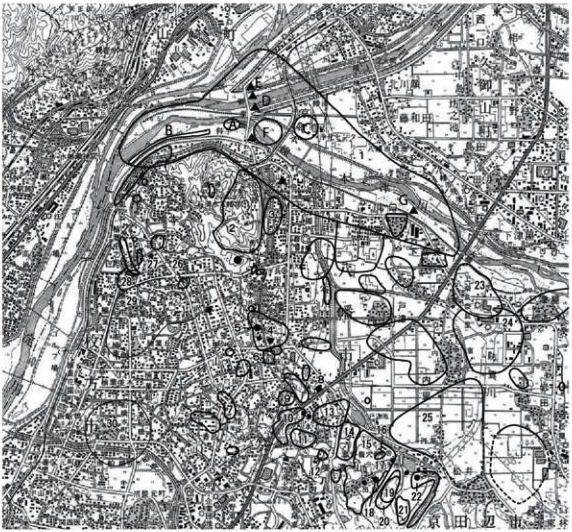
現地調査期間　（第20次）

平成19年10月30日～平成20年２月28日

（第21次）

平成20年11月13日～平成21年３月２日

調　査　面　積　（第20次）



第１図　調査地位置図（国土地理院 1/50,000 京都西南部）

A.調査地　B.トレンチ調査地　C.報告１ほか地点　D.報告14地点　E.報告15地点
F.報告18地点　G.報告９ほか地点　1.木津川河床遺跡　2.石清水八幡宮遺跡
3.山本町遺跡　4.女郎花遺跡　5.西車塚古墳　6.志水廃寺　7.幣原遺跡
8.ヒル塚古墳　9.南山遺跡　10.備前遺跡　11.西ノ口遺跡　12.宮ノ背遺跡
13.幸水遺跡　14.金右衛門垣内遺跡　15.美濃山遺跡　16.狐谷横穴群　17.美濃山横穴群
18.王塚古墳　19.美濃山廃寺　20.美濃山廃寺下層遺跡　21.荒坂遺跡　22.女谷・荒坂横穴群
23.上奈良遺跡　24.内里八丁遺跡　25.新田遺跡　26.西山廃寺　27.楠葉平野山窯跡
（以下枚方市）　28.楠葉東遺跡　29.楠葉野田遺跡　30.船橋遺跡

3,300㎡

（第21次）

3,000㎡

2．位置と環境

八幡市は、京都盆地から、奈良へ続く南山城平野との堺にある。南から流れてきた木津川と、東から流れてきた宇治川とが合流し、さらに、石清水八幡宮の北方で北側から流れてきた桂川と合流し、淀川となり、西方に流れるのである。木津川河床遺跡の東方には、かつて、水深の浅い巨椋（おぐら）池が広がっており、江戸時代以前の景観は現在のものとは大きく異なっていた。しかし、京都府と大阪府との境は、北側は天王山、南側は男山丘陵が迫って平地が狭くなっており、この地形の特徴から、洪水時には3川が合流した多量の水を一気に流すことができず、遺跡周辺は、古代からたびたび水害を被っていた。

当地の北西部に長岡京が建設されると、たびたび洪水の記事が正史に報告されるようになる。長岡京造営とともに山崎に橋が建設されるが、たびたび、洪水により被害をこうむったことが史上に見える。さて、この地が史上に大きく名を残すのは、平安時代になってからである。貞観2(860)年、平安京から見て裏鬼門にあたる男山丘陵に、平安京を護るべく石清水八幡宮が建立された。延喜16(916)年には伊勢神宮に次ぐ社格となった。さらに、平安時代中期(1097年)には、堀河天皇の奈良春日大社行幸の折り、平安京から奈良へと向かう道筋に当たっていたため、橋をかけたり、道路を整備したりと、多くの土木工事が行われている。平安時代中期以降、源平の争乱によって、南都奈良が甚大な被害をこうむるが、鎌倉時代初期の重源による東大寺再建事業のため、石清水八幡宮周辺は、大量の物資が行き来する地点として、重要度を増した。

さらに、中世では東大寺や興福寺などの奈良の大寺院に全国から多量の物資が送られてきたが、その際に水路・陸路ともにこの地を通過するので、津としても遺跡周辺は賑わっていたようである。

木津川の対岸の大山崎町では中世には荏胡麻商人が活躍しており、調査地周辺が、全国と都とを結ぶ物流の拠点であったことが知られている。

また、京都盆地から大阪平野の

付表　木津川河床遺跡関係年表

	年代	主なできごと
長岡京期	784年	長岡京遷都
平安時代	794年	平安京遷都
	841年	山崎橋洪水で流失
	850年	山崎橋洪水で流失（場所を変えて再築）
	860年	石清水八幡宮造営（調査地より1km弱南東）
	861年	石清水八幡宮で初めて祈雨奉幣を行う
	863年	石清水八幡宮で放生会始まる
	979年	円融天皇が石清水八幡宮に初めて行幸 これ以降、たびたび行幸が行われる
	1097年	堀河天皇春日行幸のため、各国に路次の整備をさせる
鎌倉時代	1192年	鎌倉幕府成立
室町時代	1338年	室町幕府成立
織豊期	1596年	伏見大地震
江戸時代	1603年	江戸幕府成立
明治時代	1870年	木津川の付け替え
		これ以降3川の大改造が行われる

北部にかけて大きな被害を与え、伏見城天守閣が倒壊した、いわゆる慶長の伏見大地震(1596年)は、当地に甚大な被害をもたらしたが、これに伴う噴砂も遺跡の各所で見つかっている。

江戸時代後期に大洪水が起こり、地元住民から河川の整備要望が出され、ついに、明治３年に合流地点の付け替え工事が挙行された。以前は男山丘陵の北東部で合流していた３河川を、西側に移動させ、石清水八幡宮の北西部で合流させた。これによって、京都府と大阪府との狭隘部で滞留していた水をいち早く大阪側に流すことができるようになったのである。

３．既往の調査成果

１)発掘調査

木津川河床遺跡では、数多くの発掘調査が行われているが、そのほとんどは遺跡地図で範囲が示されているほぼ中央部で実施されている。その地点は京阪電車軌道の東側にある洛南浄化センターに当たり、1983年から現在までに13回の発掘調査が実施されている。末尾に掲載した報告のうち、報告１～８・14・16・17・19が相当する。

洛南状かセンター付近は地表面が標高10mの低地で、旧木津川縁辺の自然堤防上に立地している。調査によって標高8.5mで、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡があったことが判明している。弥生時代後期では溝、土坑などが、古墳時代では竪穴式住居跡約30基が確認されている。ただし、古墳時代中期の住居跡はほとんどない。その後、後背湿地となった。中世には耕地化されたようである。また、伏見の大地震(1596年)の痕跡(液状化現象)が確認され、地震考古学の初期の成果があがった遺跡として有名である。近世には大規模な溝を掘削し、島状の高まりを形成して、島畠が造成されるという立体的な景観であったことが想定される。

次に、御幸橋(ごこうばし)周辺の河川敷での調査については、弥生時代後期、古墳時代や中世の集落遺構が存在したことが高いことが推定されている(報告14－１・４地点)。また、やや北方の宇治川と桂川合流地点では、中世の墓が３基以上確認された(報告15)。

新御幸橋の木津川橋脚部については、河川敷の南部で発掘調査がなされている。うち、1箇所では江戸時代の道路の側溝と思われる溝２条が検出された。現在の橋脚と同方向である。道路の幅は4.5m、長さは11m分確認された(報告18)。この道路は石清水八幡宮の一の鳥居を北進する「御幸道」の延長部分である可能性がある。これより新しい時代の杭跡も確認されている。また、八幡市教育委員会により、八幡宮門前町が調査されている。

２)八幡市教育委員会による分布調査(報告９・11・12・19)

木津川河床遺跡の発掘調査が実施される中で、八幡市教育委員会による分布調査が実施された。A地区では河川内で井戸９基、柱５本が確認された。井戸板の上が海抜6.2～6.8mである。これ以外に、かつて方形の井戸1基が存在したらしい。また、御幸橋と平行して柱が154本確認された。B地区では、以前から住居跡と思われる窪地や大型動物の骨が散布していることが確認されているが、今回の調査では埋没したようで、顕著な遺構は確認されなかった。

C地区からE地区までの約1.4kmの間は、まんべんなく弥生時代から近世までの遺物が採集でき

た。しかし、遺構はD地区の方形の井戸１基のみを確認している。井戸板の上の海抜が7.1mである。

Ｆ～Ｈの地区でも弥生時代から近世までの遺物が採集された。H地区で井戸３基が確認された。うち１基については、かつて丸太を刳り貫いた井戸と報告されたものである。上端が海抜8.8mである。

報告19では、宇治川河床内の京都市境から三川合流域までと、木津川御幸橋下流100mから大阪府境までの木津川河床内を対象に行った調査が報告されている。中州を中心に遺物を収集したところ、御幸橋近くでは平安時代後期以降の遺物が確認されている。御幸橋下流域では護岸工事されており、遺物の採集量も少ない。

４．第20次（2007年度）の発掘調査

１）はじめに

今回の発掘調査は、河道の掘り下げを行う河川敷の高水敷部分を面的に調査し、緊急用道路計画地では、御幸橋から南岸の堤防に沿って京都府・大阪府境までトレンチ調査を行った。高水敷部分はレンズ状の形をしており、南北に長く230m、東西は中央部が36mである。水が流れる河川敷より４mほど高い。

高水敷部分の調査前の状況は、本調査地点は草や潅木が茂る鬱蒼とした状況であった。調査時の御幸橋から大阪方面である下流を見ると、水が流れる川の南側に河川敷が広がっていた。河川敷は砂と円礫からなり、遺物が採集できた。高水位時期には冠水する場所である。それより南側の２mほど高い場所が今回の調査地である。さらに、南100mほど平坦面が広がり、土手に続いている。土手上面には府道13号が通っている。

トレンチ調査地は土手に平行して、高水敷部分の調査地付近から京都府と大阪府との境界線までが調査対象地であった。この場所も草が茂り、ところどころに潅木も生えていた。標高は13m前後である。さらに、希少植物のハナウドが自生しており、その箇所を避けてトレンチを設定した。

調査に使用した国土座標とレベルは国土交通省のデータである。レベルは大阪湾の海抜高（O.P.）である。

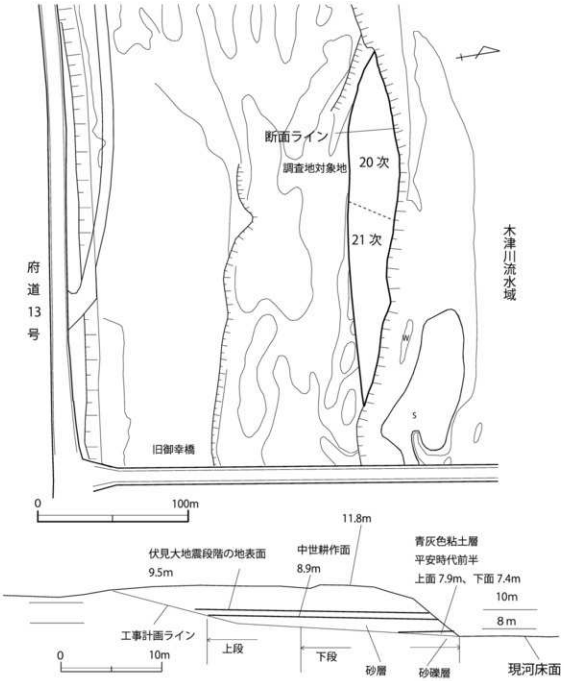
２）高水敷部分の調査

（1）経過　本調査の掘削は重機で行った。上層面と下層面の都合２回使用した。面を下げる作業は人力で行い、最終時は高水位時期に冠水するレベルまで掘り下げた。

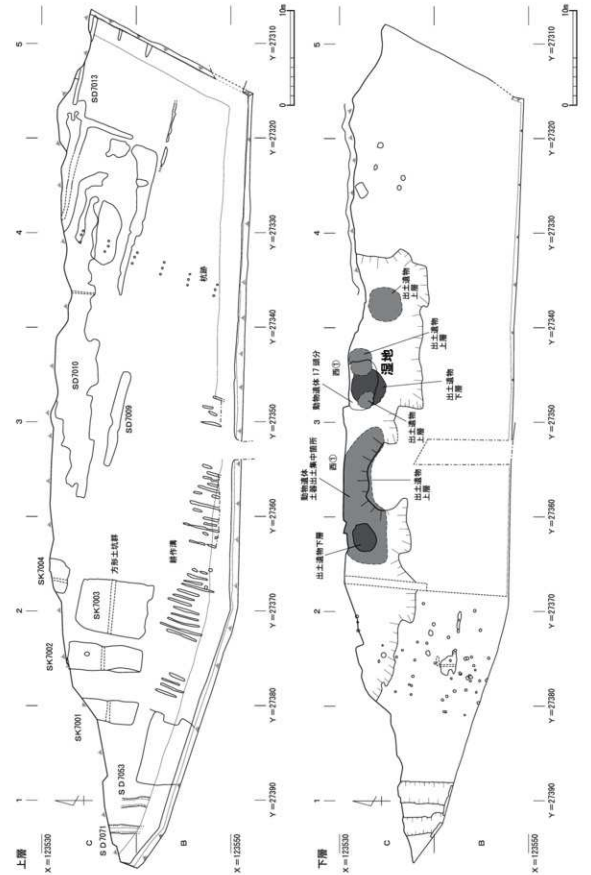
調査前の標高は11.8mであったが、重機掘削の結果、10mまでは近現代の堆積土であることが判明した。重機による第1回目の掘削は10mまでとして、そこから人力掘削で9.2mまで掘り下げた。重機による第２回目の掘削は8.6mまでとして、そこから人力掘削で7.9m（深いところで7.4m）まで掘り下げた。調査地の範囲は上段で東西120m、南北７～20mである。第３図のように地区を設定した。20mごとに西から１～５区、南からＡ～C区とした。

(2)土層の説明

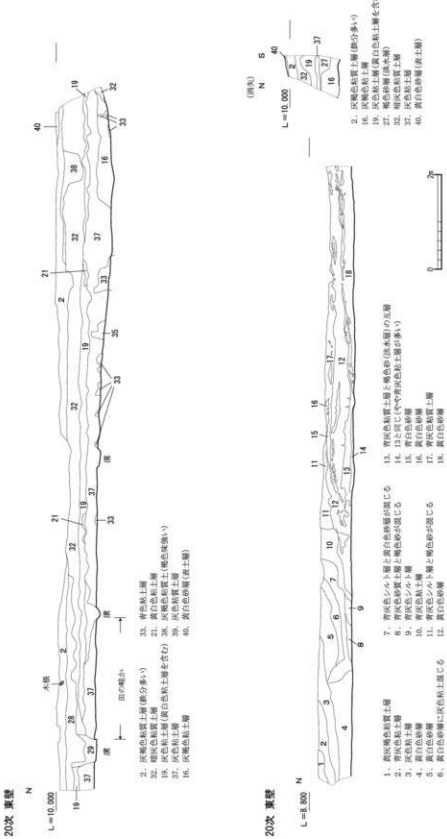
調査地東壁の上段土層観察(第4図)によれば、最上層は灰褐色粘質土(2)で、鉄分を多く含んでいた。この面が明治初期に河川付け替えが行われた直前の地表面と思われる。調査地南壁東部で認められた杭跡はこの面から打ち込まれたと考えられる。調査地上段の中位(9.5m)には灰色粘土層(黄白色粘土層を含む・19)が一面に広がっていた。図版第5(3)には噴砂が認められた。この高さが慶長の伏見大地震の時の地面である。黄白色粘土層の存在は調査地全体が一時期水没したことを示している。地震の2日後に洪水が発生しており、この事象に対応している。伏見大地震のため、調査地全面に亀裂が入っており、たびたびあったと考えられる洪水とともに、土層



第2図　第20・21次調査地位置図



第3図　第20次調査地平面図(上層面・下層面)



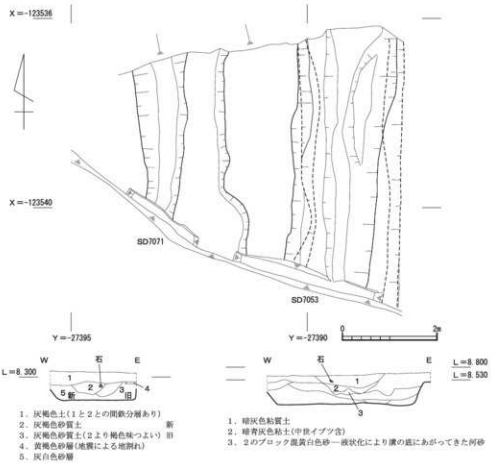
第４図　第20次調査地東壁土層断面図

の観察、および遺構の検出は困難を極めた。9.4m以下は灰色粘土層で、耕作面と考えられる。

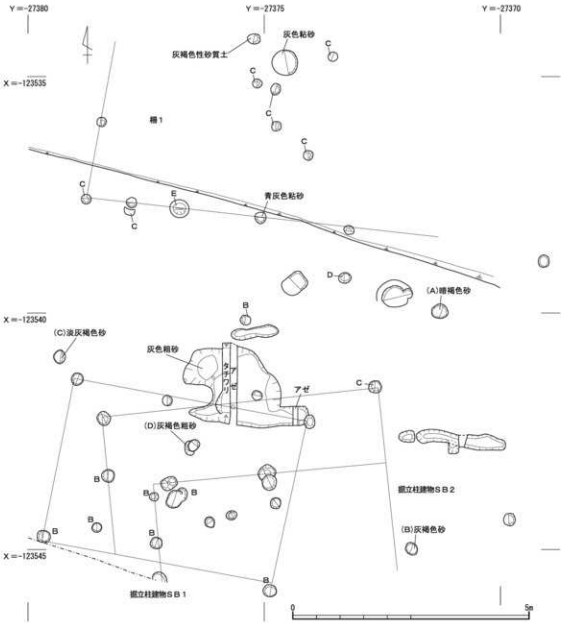
土層断面下段は灰色粘土層と黄白色砂層があり、たびたび洪水があったことを示している。調査地中央の北部では灰色粘土層が広がり、北側に向かって低くなっていた。最下面は7.4mで、出土遺物から平安時代前期の湿地であることが判明した。

(3)検出遺構

上層で検出した遺構は、杭跡、耕作溝、区画溝などである。遺構は大きく３区に分かれる。東部ではやや北に振る東西方向の耕作溝ＳＤ7013が広がる。これは中央部の北部にも広がっていた(ＳＤ7009)。なお、灰色粘土層の一部に下層から吹き上げた砂層が認められた(図版4－３)。南端はやや東に振る南北方向の耕作溝が広がる。したがって、調査地内で南北を分ける土地の境界があったことがわかる。なお、西部では、河川敷に近いところで方形土坑群を検出した。江戸時代と思われるが出土遺物はなかった。内部には砂が堆積しており、洪水によって埋没したようである。全形のわかるＳＫ7003は南北7.6m、東西5.6mである。耕作地の横であり、簡単な地下倉庫として利用していたかもしれない。調査地の西端で南北方向の溝を２条検出した。西側がＳＤ7071で、東側がＳＤ7053である。規模は、ＳＤ7071が新旧あり、西寄りにある新しい溝が東西0.7m、南北3.4m以上である。深さは0.2mである。東寄りにある古い溝は、西肩が新しい溝により掘り直されている。東西0.6m、南北4.4m以上である。ＳＤ7053が東西3.2m、南北5.4mである。



第５図　第20次調査地溝ＳＤ7053・7071平・断面図

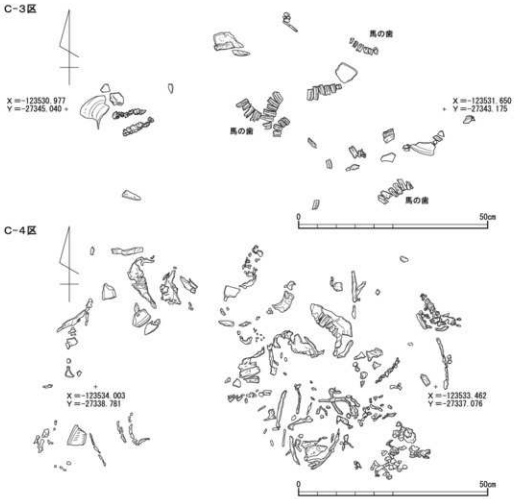


第６図　第20次調査地掘立柱建物跡ＳＢ１・２、柵１平面図

深さは0.6mである。断面は半円形である。土地利用の際の大区画の境界を示している可能性がある。上層の時代は出土遺物から室町時代から江戸時代までを想定している。

下層では掘立柱建物跡、柵、沼状地形、動物遺体などを検出した。土層断面の観察により、最下層は湿地が広がる低地であった。湿地はとくに、北側に広がっており、現河道流水域に近い場所がかつて湿地であったことがわかった。ここで、多くの動物遺体が平安時代前半の土器とともに検出された。たびたび、洪水にあったようで、黄色砂層と黒色粘土層との互層が確認できた。南側に向かって地形は徐々に上がっており、西部では高さ８ｍで平安時代後期の面を確認し、掘立柱建物跡や柵を確認した。さらに西で南北方向の溝を確認した。

掘立柱建物跡は、砂層をベースとしており、埋め土には砂層に若干粘質土が入っていただけで、検出は困難を極めた。２棟を確認したが、全容は不明である。



第７図　第20次調査地動物遺体出土状況図(Ｃ３・４区)

掘立柱建物跡ＳＢ１は東西３間、南北１間以上である。柱間は不揃いである。柱穴は直径25cmで、深さは20cmである。建物方位は、北に対して12度東に傾いている。

掘立柱建物跡ＳＢ２は東西３間、南北１間以上である。柱間は不揃いである。柱穴は直径30cmで、深さは20cmである。建物方位は、北に対して６度西に傾いている。

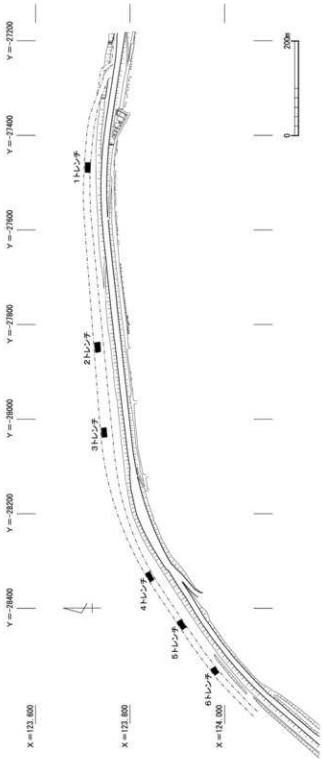
これらの建物跡の北側で柵を確認した。「L」字状に屈折する。柱穴は６か所検出した。南北1.6m以上、東西5.6m以上である。

調査地北側で東西48m、南北８ｍの範囲で湿地帯を確認した。青色粘土層が埋め土である。この中に平安時代前期から中期初めの土器を包含していたが、それとともに多くの動物遺体が出土した。埋没していたのはＣ２・３区を中心としており、湿地と陸地との境に集中していた。範囲は東西48m、南北８ｍである。

遺物の観察によれば９世紀後半から10世紀に湿地は形成されたが、その直後一気に洪水層が湿地を覆っており、その洪水層により陸化したことが判明した。この上面が平安時代後期の面で、前述した建物や柵が建設されている。また、溝もこの時期になって掘削されたと考えられる。

３）トレンチ調査

南岸の堤防に沿って京都府・大阪府境までをトレンチ調査した。延長1.2kmの範囲に６か所の



第８図　第20次調査地トレンチ配置図

トレンチを設定した。東から西へ第１トレンチから第６トレンチまで設定した。各トレンチは東西20m、南北10mで、砂地のため調査の安全を考慮して上面は一回り広く重機で掘削した。

第１トレンチ　もっとも東側に設定した。上面の標高は13.8mで、下面は11.44mである。粘土と砂層との互層であった。特に顕著な遺構はなかった。

第２トレンチ　上面の標高は13.5mで、下面は10.5mである。粘土と砂層との互層であった。特に顕著な遺構はなかった。

第３トレンチ　上面の標高は12.6mで、下面は10.1mである。粘土と砂層との互層であった。特に顕著な遺構はなかった。小破片ではあるが瓦器椀や中国製白磁椀・緑釉盤などが出土した。いずれも、平安時代後期から鎌倉時代のものである。

第４トレンチ　上面の標高は12.8mで、下面は9.5mである。粘土と砂層との互層であった。特に顕著な遺構はなかった。

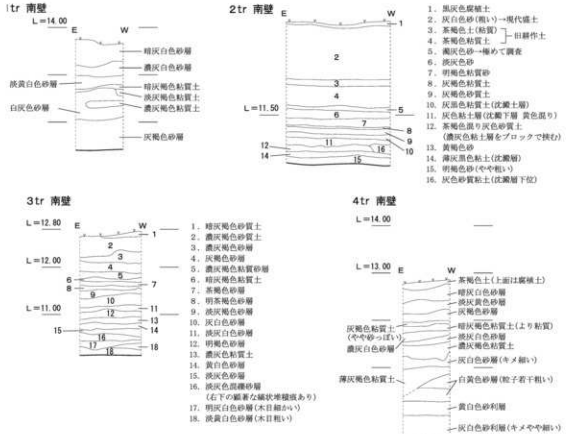
第５トレンチ　上面の標高は12.4mで、下面は9.6mである。粘土と砂層との互層であった。特に顕著な遺構はなかった。小破片ではあるが中国製白磁椀が出土した。平安時代後期から鎌倉時代前期のものである。

第６トレンチ　もっとも西側に設定した。上面の標高は12mで、下面は7.7mである。粘土と砂層との互層であった。特に顕著な遺構はなかった。

以上の結果、遺構面はさらに深い地点であり、今回の地点では顕著な遺構・遺物は確認されなかった。

４）出土遺物

遺物は整理箱で40箱出土した。種類は土師器皿・羽釜、黒色土器椀・杯、緑釉陶器椀、灰釉陶



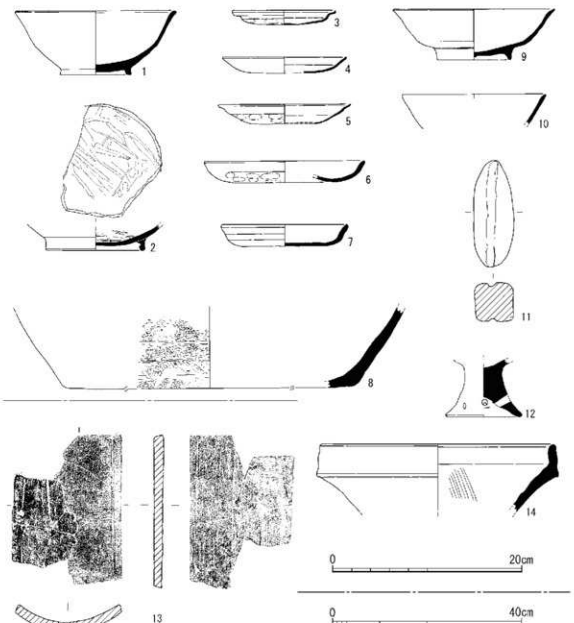
第９図　第20次調査地各トレンチ土層断面図

器壺、須恵器甕・鉢、白色土器、備前鉢、信楽鉢・甕、中国製青磁・白磁などである。

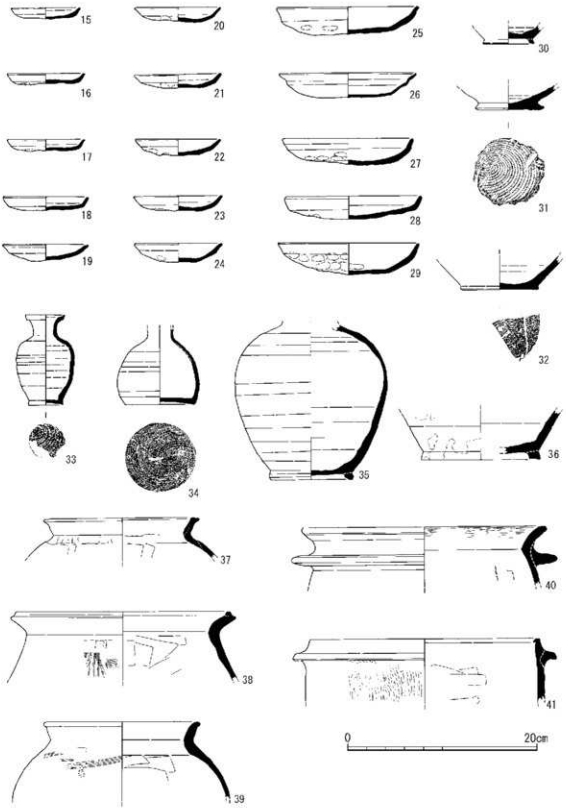
１は緑釉陶器椀である。口縁部がやや外開きで、高台は貼り付けである。釉は緑色で、ところどころ濃緑色である。これは、水により変色したと考えられる。釉は全面に施されており、古い様相である。断面は褐色で、白色砂を含んでいる。口径16.7cm、現存の器高6.8cmである。亀岡市篠古窯址群の大谷窯に類例があり、９世紀後半のものである。Ｃ２区、青色粘土層(7.3m)から出土した。２は黒色土器椀である。底部のみ遺存している。内面のみ黒色で、いわゆる内黒タイプである。見込みに荒いミガキを施す。高台径10.3cmである。Ｃ３区出土。３は土師器皿である。口縁端部を内側に巻き込んだての字状口縁のタイプである。てづくね成形で、色調は淡褐色である。口径10.8cm、現存の器高1.6cmである。Ｃ３区出土。４は土師器皿である。てづくね成

形で、色調は淡褐色である。口縁部には一段なでを施す。口径13.1cm、現存の器高1.7cmである。Ｃ３区出土。５は土師器皿である。てづくね成形で、ての字状口縁のタイプである。色調は淡褐色である。口縁部には一段なでを施す。口径14cm、現存の器高2.1cmである。Ｃ３区出土。６は土師器皿である。てづくね成形で、色調は淡褐色である。口縁部には一段なでを施す。口径16.9cm、現存の器高2.3cmである。Ｃ１区、ＳＤ7053出土。７は土師器皿である。てづくね成形で、色調は淡褐色である。口縁部には一段なでを施す。口径13.2cm、現存の器高8.6cmである。Ｂ２区出土。６は12世紀、７は12世紀後半である。これ以外の土師器皿は10世紀中葉から後葉である。

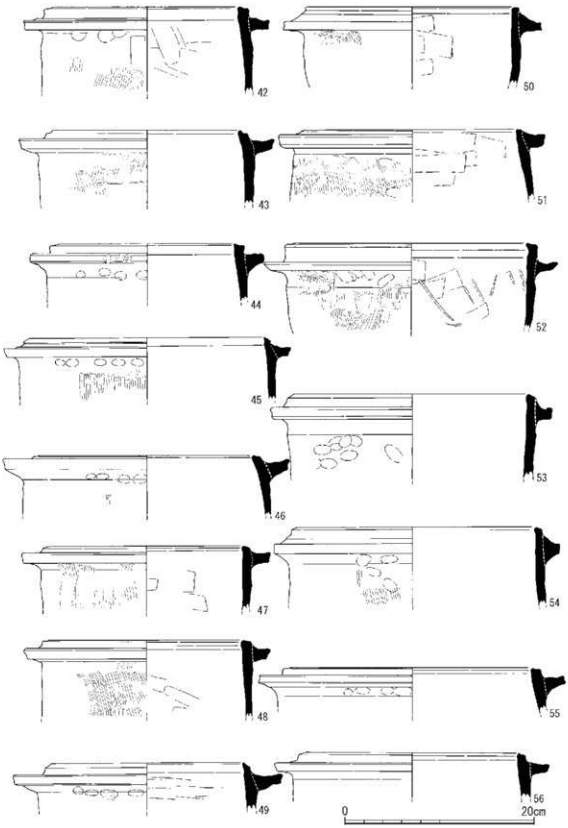
８は須恵器甕である。底部のみ遺存している。外面にタタキ痕がある。内面はナデで仕上げている。底径70cm以上。Ｃ３区出土。９は白色土器である。内外面とも回転ナデである。削り出



第10図　第20次調査出土遺物実測図（１）



第11図　第20次調査出土遺物実測図(2)



第12図　第20次調査出土遺物実測図（３）

し高台で、中央部は突出している。胎土には砂粒を含む。焼成は良。色調は黄白色である。口径17cm、器高5.4cm。Ｃ３区から出土した。10は白磁椀である。口縁部は肥厚しない直口のものである。Ｃ２区、ＳＫ7090出土。12世紀である。11は土錘である。細長い卵形で、両端に窪みの筋を刻んでいる。長さ11.3cm、幅4.2cmである。Ｃ４区出土。12は弥生時代の高杯である。杯部は欠損している。下部に５か所の透かし穴がある。Ｃ３区出土。13は平瓦である。縄目のタタキを施す。Ｂ２区出土。14は備前鉢である。包含層から出土した。

15～24は土師器皿の小皿である。てづくね成形で、色調は淡褐色である。口縁部には一段なでを施す。15はＳＤ7053、19はＳＤ7071から出土した。13世紀である。他はＣ２区の下層で、12世紀である。これらの口径９cm前後、器高1.5～1.8cmである。25～29は土師器皿の中皿である。てづくね成形で、色調は淡褐色である。口縁部には一段なでを施す。その下にさらにユビオサエを施すため、あたかも二段ナデのような外形を呈する25・27・29のようなものもある。Ｃ２・Ｃ３区出土。11世紀。口径13.5～14.7cm、器高2.4～３cmである。

30・31・32は須恵器杯である。30は貼り付け高台、31・32は糸きり底である。Ｃ３区出土。33は須恵器壺である。完形品である。口径4.2cm、器高9.5cm、内外面ともロクロナデで仕上げている。亀岡市篠窯産で、10世紀である。色調は灰色で、断面はえんじ色である。Ｃ３区出土。34は須恵器壺である。体部下半が膨らむタイプである。器厚は薄い。亀岡市篠窯産である。Ｃ３区出土。35は須恵器壺である。外面には自然釉がかかる。底径8.6cm、現存高16.2cmである。底部は貼り付け高台で、東海系である。Ｃ２区出土。灰釉陶器の可能性もある。36は須恵器壺である。底部のみ遺存している。貼り付け高台である。灰釉陶器の可能性もある。Ｃ３区出土。

37は土師器甕である。「く」字状の口縁部のみ遺存している。外面に煤が付着している。Ｃ４区出土。38は土師器甕である。「く」字状の口縁部のみ遺存している。外面には煤が付着している。外面はハケ目調整である。Ｃ３区出土。39は土師器甕である。「く」字状の口縁部のみ遺存している。外面はハケ目調整である。Ｃ４区出土。40は土師器羽釜である。「く」字状の口縁部の屈曲部に鍔をつけたものである。鍔は水平方向につけられている。外面には煤が付着している。Ｃ４区出土。41は土師器羽釜である。口縁部は屈曲せず、口縁部のすぐ下に鍔をつけている。体部外面には縦ハケを施す。胎土には砂粒を含む。焼成は良でＣ４区出土。42～56は土師器羽釜である。41と同じタイプである。胎土には砂粒を含む。焼成は良で、色調は明褐色である。何度も使用されたのか、一部は灰褐色に変色している。44・52・54・55はＣ２区、42・43・45・47はＣ３区、46・48・49・53・56はＣ４区から出土した。これらは摂津型で、10世紀である。以下は写真のみである。151は黒色土器Ｂ類椀である。152は黒色土器Ａ類杯である。153は瓦器椀である。

５）小結

洪水によって形成された湿地（青色粘土層）から、多数の獣骨と平安時代前～中期の土器が出土した。獣骨は馬が40頭以上、牛が数頭（丸山真史氏より）であった。土器の種類は、緑釉陶器椀や黒色土器椀、土師器杯・皿、土師器甕などである。この湿地は徐々に北側へ後退し、陸化したようであるが、特に、平安時代中後期の大洪水によって１ｍ近く砂が堆積し、一気に陸化した。そ

の地表面で掘立柱建物と考えられる柱穴が発見された。調査地の西部のみ認められた。その後、田畑が形成されたようで、耕作に伴う溝が確認された。

この段階で大地震があり、下から噴き上げた砂(液状化現象の一部)が各所で認められた。おそらく、慶長の伏見大地震(1596年)に伴うものと考えている。

試掘調査地は、6か所のトレンチを設定し、現地表面から3～4mほど掘り下げたが、近世以降の砂ばかりで、遺構面はさらに下部であったようである。

6)まとめ

御幸橋の西側では、2007年度に初めて2,000㎡という広い面積を調査することができた。調査前の形状は、河川敷より2mほど高く、旧地表面が残っていた。調査の結果、上層の近世面は標高8.9m、下層の平安時代前中期面(青灰色粘土層)が7.4mであることが判明した。湿地であったことを示す青灰色粘土の中には、牛馬が埋没しており、放牧された牛馬の存在と、その自然死以外に、なんらかの祭祀がこの地であったことを示しているのかもしれない。同じ場所で、平安時代前期の土器・陶磁器が出土した。破片の角は鋭く、再堆積したものではない。近隣から人為的に持ってこられたものといえる。

土層の観察によれば、大小さまざまな洪水に見舞われたことがわかった。それにもかかわらず、平安時代後期には小規模な建物を建て、耕地を形成するという、営みを知ることができた。

湿地は徐々に北側へ後退し、陸化したようであるが、特に、平安時代中後期の大洪水によって1m近く砂が堆積し、一気に陸化した。その後、田畑が形成されたようで、耕作に伴う溝が確認された。

この段階の後期で大地震があり、下から噴き上げた砂(液状化現象の一部)が各所で認められる。おそらく、伏見大地震(1596年)に伴うものと考えている。この状況は上流側でも確認されており、広範囲に災害が及んだことが知られる。

20世紀以降は、川底が深く削られるようになった。たとえば、御幸橋の橋脚台の基礎部分のコンクリートが見えており、設置したときより、1m以上は削られたといえる。古代中世の地面が徐々に流出していることがわかる。

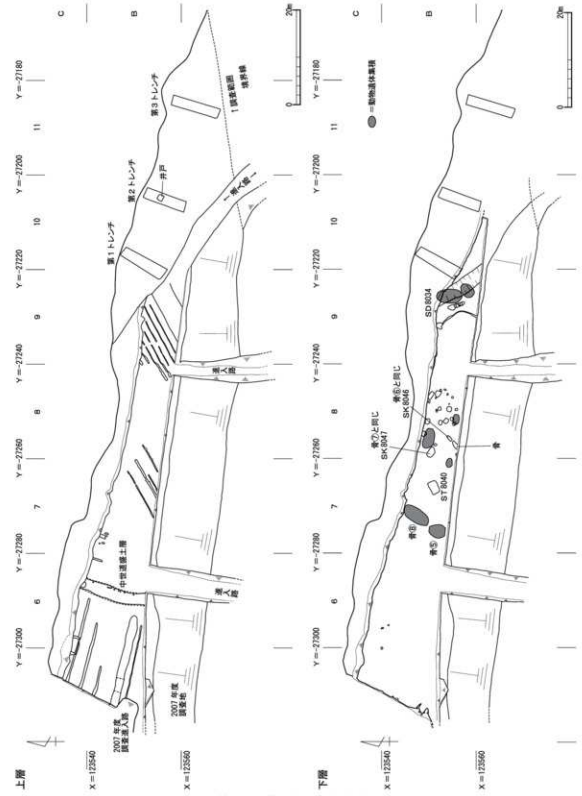
5．第21次(2008年度)の発掘調査

1)はじめに

第21次の発掘調査は、第20次調査に引き続いて、河川敷の高水敷部分の東側部分で実施した。西端は第20次調査地の東端に続いている。第21次の東北部は一段下がっており、現水面より若干高いだけで、雨の後には水位が上昇するので何度か冠水した。

本調査の掘削は重機で行った。上層面と下層面の都合2回使用した。面を下げる作業は人力で行い、最終時は高水位時期に冠水するレベルまで掘り下げた。

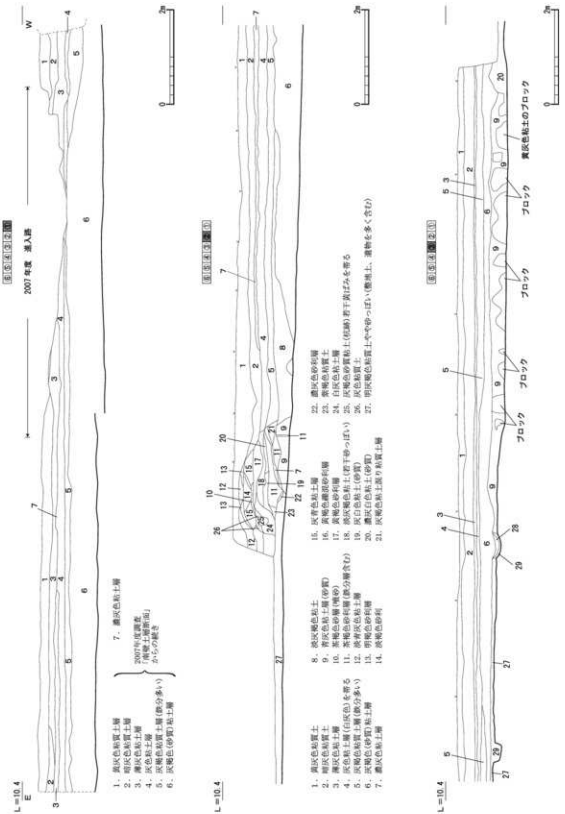
第20次調査の地区割りを援用して第13図のように地区を設定した。20mごとに西から5～11区、南からB・C区とした。



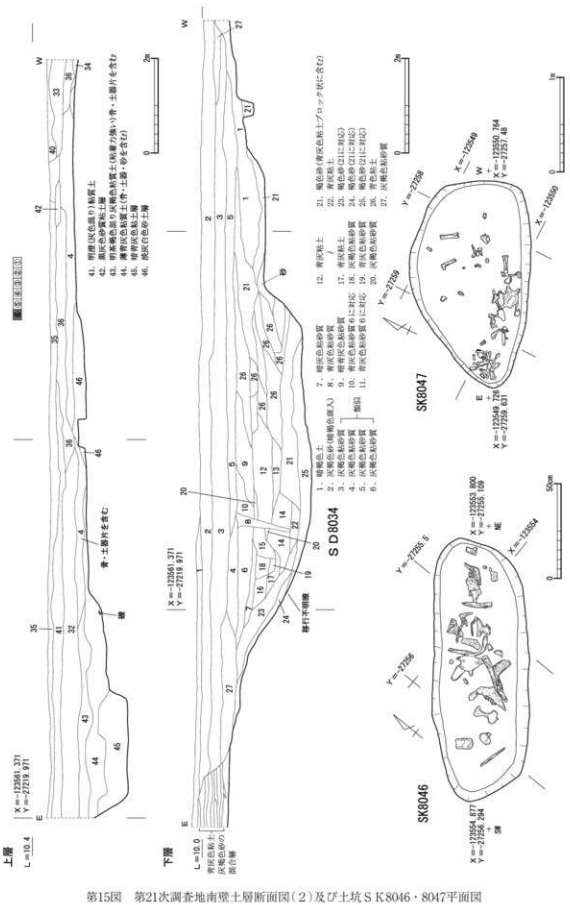
第13図　第21次調査地平面図

2）土層の説明

調査地西端の土層観察（第14図）によれば、最上層は黄灰色粘質土（1）である。第20次調査の土層と同じく、この上面が明治初期に河川付け替えが行われた直前の地表面と思われる。高さは東端で10m、西端で10.2mである。高さ9.4mにある灰色粘土層（4）の上面は第20次調査で観察した



第14図　第21次調査地南壁土層断面図（1）



第15図　第21次調査地南壁土層断面図(2)及び土坑SK8046・8047平面図

慶長の伏見大地震の時の地面である。第14図の土層断面の上から2段目中央に、かまぼこ上に盛り上がった土層があり、これは畔の断面である。この畔の下部から噴砂が真上に吹き上げた土層(11)が認められるが、(4)層の1層下で止まっており、地表面までは吹き上がっていない。調査地東端では(4)層は断続的になっていた。この層の下には幅広い溝が確認された。その中から平安時代後期から鎌倉時代初期の土器が多量に検出された。また、溝の東側には断面がかまぼこ状に盛り上がった土層があり、ここにも畔があったことがわかる。第20次調査で検出した溝ＳＤ7071とそのそばにあった平安時代後期の建物と一対の施設であったかもしれない。

なお、今回の調査区では平安時代前半の湿地は検出されなかった。

3)検出遺構

上層で検出した遺構は耕作溝(高さ9.3m)、畔道である。溝の方向は2種あり、西部はほぼ東西方向、中央部から東部は北に向かって西に斜行している。西部は第20次調査地で確認したほぼ東西方向の溝とつながっている。この溝は西側進入路付近で終息しており、そこには、南北方向のあぜ道がある。このあぜ道を堺に溝の方向は相違する。上層は土層観察から室町時代から江戸時代にかけてのものである。この段階の最終で大地震が生じ、下から吹き上げた砂(液状化現象の一部)が随所に認められた。慶長元年(1596年)の伏見大地震に伴うものと考えている。

下層は30～50cm掘り下げて確認した。土層の観察から、洪水によって形成された砂地の上面を客土で整地したようである。

その整地層上面から中世段階に掘削された溝や土坑が確認され、柱跡もあり、多数の骨化した動物遺体や土器などが出土した。土器には土師器皿・鍋・羽釜・瓦器椀などがあり、青磁・白磁の中国製陶磁器も含まれる。動物遺体は主に牛で、馬が若干量ある。また、東側の低地で方形の井戸枠を検出した。

井戸ＳＥ8020は調査中にたびたび冠水したため、掘形の外形は不明であるが、おそらく、方形で1辺2mであったと思われる。その中央に1辺1mの方形に組んだ井戸枠を確認した。さらにそのなかに曲げ物が据えられていた。井戸の上部はすでに失われており、井戸が機能した地面は9m程度であったと考えられる。

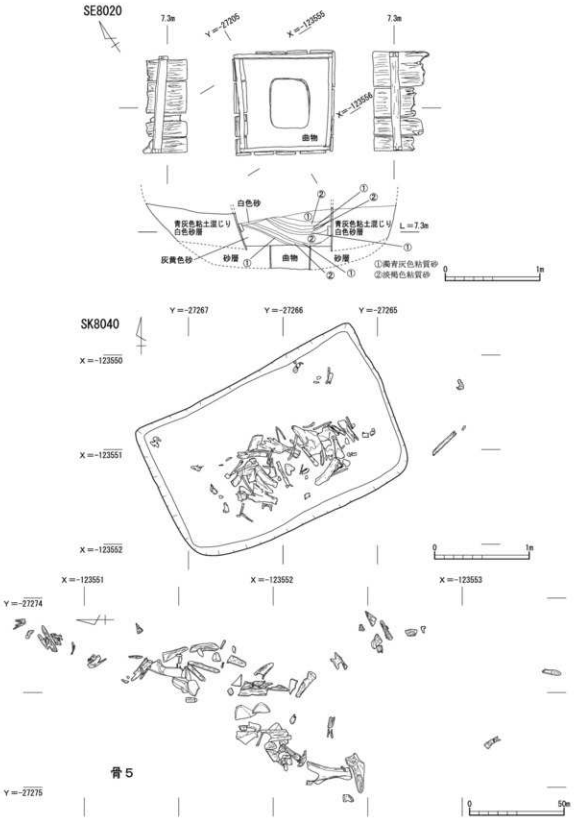
動物遺体は6～8C区に集中して認められた。不整形な円形あるいは方形土坑内から出土したものもある。

東端で溝ＳＤ8034を確認した。ここからは多数の土師器皿、瓦器椀が出土した。溝は幅8m、深さ1.2mである。溝の東には断面がかまぼこ状に盛り上がった高まりがある。畔と考えられる。

4)出土遺物

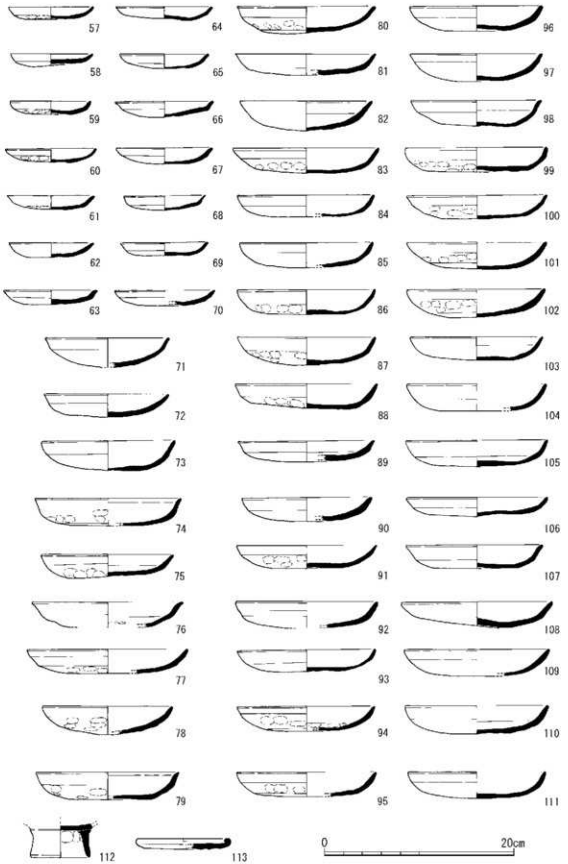
遺物は整理箱で65箱出土した。種類は土師器皿、須恵器杯・甕・鉢、瓦器椀・羽釜・鍋、信楽鉢・甕、古瀬戸杯、中国製青磁椀・皿、白磁角杯・椀、銭貨、石製品などである。今回図化した遺物のうち、114・120は包含層、124・126は中世の溝ＳＤ8034の上層から出土し、それ以外はすべて溝ＳＤ8034から出土したものである。

57～70は土師器皿の小皿である。胎土・焼成は良で、色調は淡褐色である。口縁端部を一段



第16図　第21次調査井戸ＳＥ8020、土坑ＳＫ8040、骨５平面図

ナデし、内面はナデ、外面は不調整である。57の口径は8.6cm、器高1.7cmである。平安京内膳町分類のDタイプで、八幡地域や乙訓地域に多いタイプである。71 ～ 111は土師器皿の中皿であ



第17図　第21次調査出土遺物実測図（1）

る。胎土・焼成・色調は小皿と同様である。調整は口縁部を一段ナデし、その下はユビオサエを施している。このため、口縁部は二段に屈曲している。内膳町分類のDタイプである。88が典型例で、口径15.0cm、器高2.6cmである。112は土師器高台付皿である。高台のみ遺存している。胎土は密で、細かな白色砂を含む。焼成は良で、色調は淡褐色である。113は土師器コースター型皿である。口径9.7cm、器高1.2cmである。

114～122は瓦器椀である。表面が摩滅したものが多い。114・120は精査中に出土した。それ以外はSD8034から出土した。115・116の体部は外開きで、直線的であり、和泉型か。色調は灰色～黒灰色である。117は内外面ともミガキを施している。口縁端部内面には口縁部に平行して沈線を施す。楠葉型である。118は外開きした体部に、少し屈曲させた口縁部をもつ。119は内外面とも密なミガキを施す。見込みには1方向のミガキを施す。高台は断面が三角形で、貼り付け高台である。口縁端部内面には口縁部に平行して沈線を施す。楠葉型である。口径14.6cm、器高5.4cm、胎土は密で、焼成は良、色調は黒灰色である。120は内外面ともミガキを施す。楠葉型か。121は内面に密なミガキを施す。体部中位がもっとも厚い。高台は断面が三角形で、貼り付け高台である。見込みには一方向のミガキを施す。122は内外面とも密なミガキを施す。口縁端部内面には口縁部に平行して沈線を施す。楠葉型である。口径15.7cm、器高5.5cmである。

123は須恵器杯である。底部は糸きりであるが、貼り付け高台である。124は東播磨系の須恵器鉢である。125は中国製白磁角杯である。削り出し高台である。畳み付けは少し削り込んでいる。体部表面は多面体（6面）に成形されている。底径3.6cm、現存高2cmである。126は古瀬戸杯である。内面の見込みには多重の円弧を印刻している。

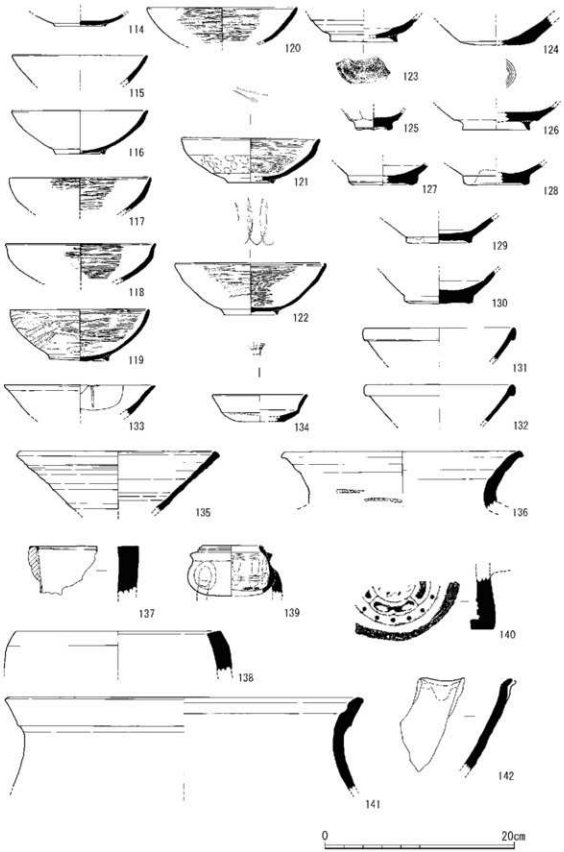
127～132は中国製白磁椀である。口縁部は玉縁状で、底部は削り出し高台であるが、畳み付け中央はやや浅く削っている。133は中国製青磁椀である。釉色は緑灰色である。現存では口縁部に1か所に切り込みを入れている。その切込みから縦方向に灰白色の筋を描いている。口径17.9cm、現存高3.2cmである。龍泉窯系である。134は中国製青磁皿である。内面見込みに櫛目を施す。釉色は緑灰色で、底部外面は露胎である。同安窯系である。

135は須恵器鉢である。東播磨系である。色調は灰色で、口縁部は黒変している。口径20.6cm、現存高6.3cmである。136は須恵器甕である。

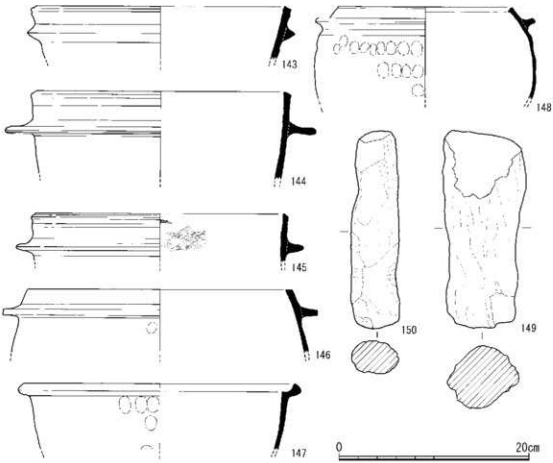
137は滑石製品である。もとは石鍋の底部であったようで、外面に煤が付着している。上部は水平方向に削り取っている。内面は「L」字状に切込みを入れて、方形にしようとしたが、途中で欠損したようである。138は滑石製石鍋である。口縁部のみ遺存している。外面には煤が付着している。

139は三足のつく瓦器羽釜である。140は軒丸瓦である。外縁部が突出し、内区には珠文、さらに内側には巴文が施されている。平安時代後期である。

141は信楽甕である。色調は橙褐色で、内外面ともナデで仕上げている。口縁部内面に凹線を施す。口径37cm、現存高10cmである。142は信楽鉢である。片口部分のみ遺存している。色調は橙褐色である。



第18図　第21次調査出土遺物実測図（２）



第19図　第21次調査出土遺物実測図(3)

143は土師器羽釜である。口縁部は外開きで、口縁部直下に短い鍔をつけている。鍔の断面は三角形である。中世京都に多いタイプである。144・145は瓦器羽釜である。144は直立する体部の上部に長い鍔をつけたものである。中世の大阪に多いタイプである。145は直立する体部の上部に短い鍔をつけたものである。146は土師器羽釜である。体部は丸い。口縁部直下に短い鍔を付けている。147は瓦器鍋である。口縁部は外側に短く屈曲している。中世京都タイプである。148は瓦器羽釜で、体部は丸い。口縁部直下に短い鍔を付けている。鍔はやや上に上がっている。

149は石製品である。外形は円棒状である。上端が切断されたように平滑である。上部と下部の一部に横方向に削った痕がある。長さ20.8cm、幅4.8cm、厚さ3.6cmである。石棒に類するものかの知れない。色調は銀色である。広域変成岩の一種の結晶片岩である。150は石製品である。上端が切断されたように平滑である。それ以外は加工した痕は認められない。149と同じ材質で、加工するため、この地にもたらされた可能性がある。

154は中国製白磁皿である。底部は露胎である。釉色は黄白色である。12～13世紀。155は中国龍泉窯青磁椀である。156は瓦器皿である。157は瓦器椀である。158は瓦器釜である。

5)まとめ

今回の発掘調査では、鎌倉時代からの生活の痕跡を確認できた。出土遺物の摩滅度を観察する

限り、洪水による再堆積ではなく、周辺部より人為的に搬入されたもので、これらの遺物を包含した土壌で、洪水層上面を整地して土地利用を図っていた。おそらくは、集落の縁辺部に当たり、中世段階でも周辺部で牛や馬が飼育されていた可能性が高い。近世には耕作地として田畑に利用されたようである。

6．地上観察結果

中塚氏の分析（紹介８）　中塚氏は、地質学の立場から木津川河床遺跡について論及している。氏の観察結果によれば、歴史的な断面の形成年代は、

a）古墳時代～平安時代（少なくとも奈良後期～平安時代前期下限）には、古木津川と微高地（自然堤防状）が形成され、その外側に古墳時代の集落が形成される。

b）平安時代前期～中世（10 ～ 13世紀前半）には広大な河床面が形成される。

c）平安時代末～鎌倉時代（12 ～ 13世紀前半）には「八幡惣町」の町場が形成される。河床域が北方へ移動する。井戸群が構築される。これは、地下水位の低下、水量の減少があったのではと推測している。これらの井戸は盛り土の上から掘られたのではないかとも推測している。この時期に木津川・桂川系河床面から水田耕作地への転換があったとした。

d）中世末～近世初頭以降（16世紀代～）天井川地形となる。河床が上昇し、本格的な堤防構築の時代となる。液状化の履歴あり。慶長の伏見地震に関連か。「澱川」の形成。水害が多数確認される。

e）1870年代以降、現在。川の付け替えによる治水実施。川の傾斜はゆるやかである。木津川では20世紀後半、土木建築用資源としての「川砂利」の過度の採取と、ダム構築をはじめとする治水事業の効果と共に、大量の水が流れることになり、河床面が大きく落ち込むこととなったと結論付けた。

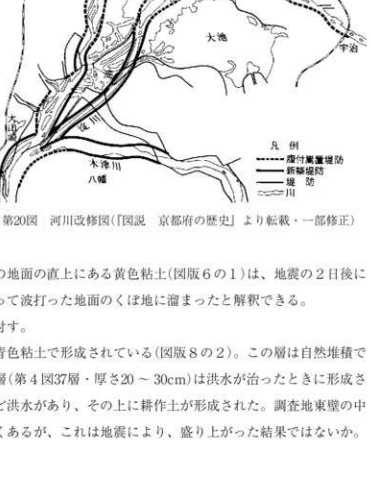
7．まとめ

御幸橋の西側で、広い面積を調査することができた。調査前の形状は、河川敷より２～５ｍほど高く、旧地表面が残っていた。調査の結果、上層の近世面は標高8.9m、下層の平安時代前中期面（青灰色粘土層）が7.4mであることが判明した。湿地であったことを示す青灰色粘土の中には、牛馬が埋没しており（牛の方が多い。丸山真史氏より）、放牧された牛馬の存在と、その自然死以外に、なんらかの祭祀がこの地であったことを示しているのかもしれない。湿地は徐々に北側へ後退し、陸化したようであるが、特に、平安時代中後期の大洪水によって１ｍ近く砂が堆積し、一気に陸化した。その後、田畑が形成されたようで、耕作に伴う溝が確認された。第21次調査で、中世の井戸が１基確認された。おそらく、この当たりまでが集落域であったことを示している。20次調査地の西端の溝（ＳＤ7071）と21次調査の東端の溝は耕作地の区画を示していると考えられる。その距離は約160mである。

なお、西端の溝近くで確認された建物や柵は集落が１時期広がっていた可能性があるが、集落

の中心があると考えられる地点との間に耕作地があることから、耕作地域内にある簡便な施設であったといえよう。

中世の耕作の採集段階に大地震があり、下から噴き上げた砂(液状化現象の一部)が各所で認められる。おそらく、伏見大地震(1596年)に伴うものと考えている。この状況は上流側でも確認されており、広範囲に災害が及んだことが知られる。



第20図　河川改修図(『図説　京都府の歴史』より転載・一部修正)

以下、寒川旭の見解を記す。

土層観察の結果、伏見大地震時の地面の直上にある黄色粘土(図版６の１)は、地震の２日後にあった洪水に由来する。地震によって波打った地面のくぼ地に溜まったと解釈できる。

つぎに増田富士雄理事の見解を付す。

調査地北部で確認された沼地は青色粘土で形成されている(図版８の２)。この層は自然堆積である。また、この層を覆う粘質土層(第４図37層・厚さ20 ～ 30cm)は洪水が治ったときに形成されたものである。その後、２度ほど洪水があり、その上に耕作土が形成された。調査地東壁の中央部(第４図)には青色粘土層が高くあるが、これは地震により、盛り上がった結果ではないか。

木津川河床遺跡関係資料

資料紹介等

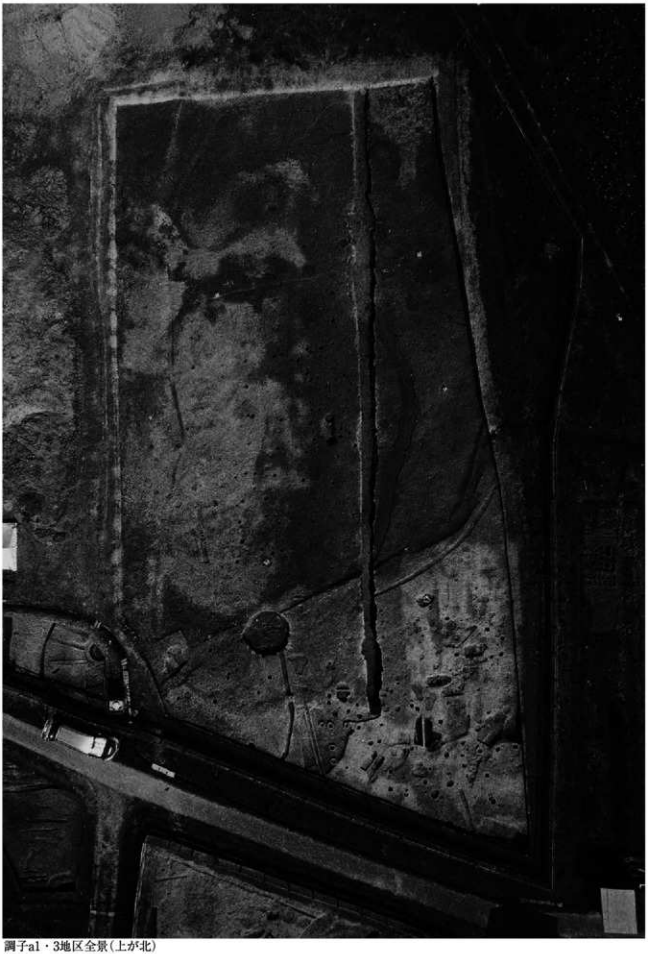
紹介１　熊野正也ほか「木津川底遺跡出土の土器」(『土師式土器集成』本編１　東京堂出版) 1971
紹介２　吉村正親「木津川川底発見の土器」(『京都考古』第22号) 1976
紹介３　金沢　陽「木津川河床採集の陶片」(『出光美術館館報』第49号　出光美術館) 1985
紹介４　松村　茂「木津川河床遺跡採集遺物」(『京都考古』第66号) 1992
紹介５　河上誓作・中世土器研究会「淀川・木津川河床の採集資料」(『中近世土器の基礎研究』ⅠＸ　日本中世土器研究会) 1993
紹介６　中世土器研究会「淀川・木津川河床遺跡の中国陶磁器」(『中近世土器の基礎研究』ⅩⅢ　日本中世土器研究会) 1997
紹介７　久保哲正「木津川河床遺跡採取の土器(１)」(『山城郷土資料館報』第15号　京都府立山城郷土資料館) 1998
紹介８　中塚　良「水辺の自然地誌学の試み―京都盆地中央部、「三川」合流地点における地形、遺跡、景観―」『地形環境と歴史景観』2004
紹介９　大洞真白「八幡市内遺跡見学記―男山東麓を中心に―」(『乙訓文化遺産』13号　乙訓の文化遺産を守る会) 2007

発掘報告書等

報告1　長谷川　達「木津川河床遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第8冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）1983
報告2　黒坪一樹・長谷川　達「木津川河床遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第11冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）1984
報告3　黒坪一樹・松井忠春「木津川河床遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）1985
報告4　岩松　保・松井忠春「木津川河床遺跡昭和60年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第19冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）1986
報告5　岩松　保・松井忠春「木津川河床遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第23冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）1987
報告6　岩松　保「木津川河床遺跡昭和62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第30冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）1988
報告7　竹井治雄「木津川河床遺跡平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第38冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）1988
報告8　小池　寛「木津川河床遺跡平成３年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第49冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）1992
報告9　赤松一秀「木津川河床遺跡分布調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第23集　八幡市教育委員会　1997
報告10　桝井豊成・赤松一秀「奥ノ町(木津川河床)遺跡発掘調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第25集　八幡市教育委員会　1998
報告11　赤松一秀「木津川河床遺跡第2次分布調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第26集　八幡市教育委員会　1998
報告12　八十島豊成「木津川河床遺跡第３次分布調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第30集　八幡市教育委員会　2000
報告13　八十島豊成「木津川河床遺跡試掘調査」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第30集　八幡市教育委員会　2000
報告14　森　正「八幡市木津川河床遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会）2001
報告15　石尾政信「木津川河床遺跡第13次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第99冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2001
報告16　松尾史子「木津川河床遺跡第14次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第102冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2002
報告17　増田孝彦「木津川河床遺跡第15次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第106冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2003
報告18　柴　暁彦・増田孝彦「木津川河床遺跡第16次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第113冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2005
報告19　大洞真白「木津川河床遺跡第４次分布調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第40集　八幡市教育委員会）2006
報告20　松尾史子「木津川河床遺跡平成18年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第122冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2007
報告21　大洞真白・井戸竜太・小森俊寛・寒川　旭「木津川河床遺跡(第19次)発掘調査報告書」『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第47集　八幡市教育委員会　2008
報告22　伊野近富「木津川河床遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第106号　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2008

ここで、示した標高は各報告の表示に沿っているが、これが大阪湾の海抜(O.P.)なのか東京湾(T.P)なのかについては、検討しておらず、両者が混在している可能性があり、注意を要する。なお、高さは大阪湾のほうが１ｍほど高い。

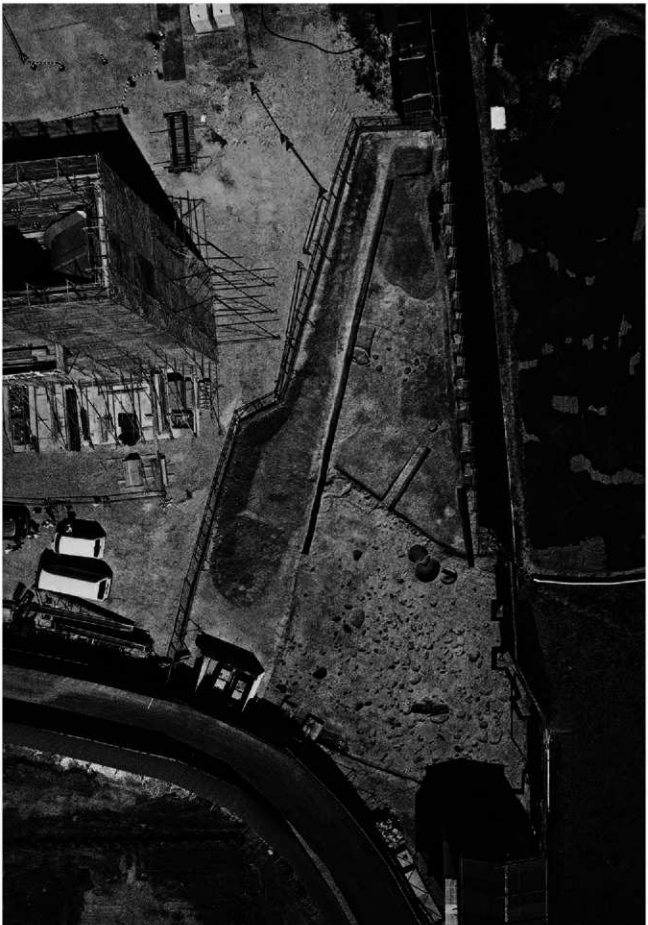
図　　版



調子a1・3地区全景(上が北)

調子a2地区全景（上が北）

調子a4-1地区全景(上が東)



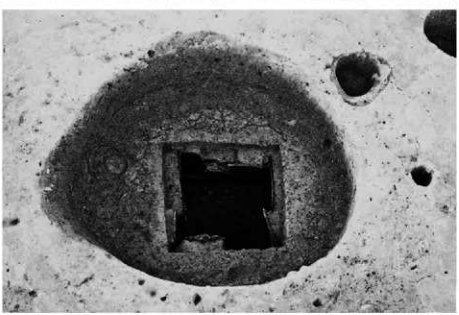
調子a4-2地区全景(上が北)

(1)調子a1地区木棺墓ＳＴ201
遺物出土状況(上が南)

(2)調子a1地区木棺墓ＳＴ201全景
(南から)

(3)調子a1地区木棺墓ＳＴ201全景
(東から)

(1) 調子a1地区木棺墓ＳＴ201
完掘状況(東から)



(2) 調子a1地区井戸ＳＥ244全景
(東から)

(3) 調子a1地区井戸ＳＥ244
断ち割り(東から)

(1)調子a1地区井戸ＳＥ244
井戸組西面(東から)

(2)調子a1地区井戸ＳＥ244
井戸組東面(西から)

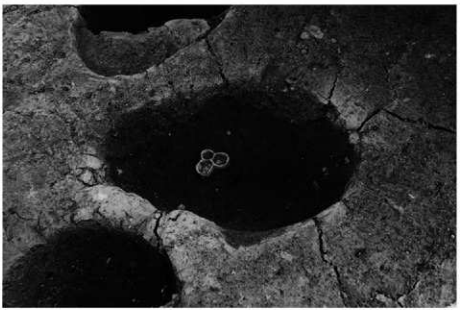
(3)調子a1地区井戸ＳＥ244
井戸組南面(北から)

(1) 調子a1地区井戸ＳＥ244
井戸組北面(南から)

(2) 調子a1地区掘立柱建物跡ＳＢ01
(西から)

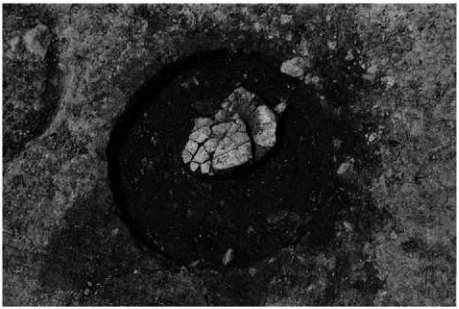
(3) 調子a1地区掘立柱建物跡
ＳＢ01柱穴ＳＰ45(南から)

(1)調子a1地区掘立柱建物跡
ＳＢ01柱穴ＳＰ247(東から)



(2)調子a1地区柱穴ＳＰ27
遺物出土状況(北東から)

(3)調子a1地区柱穴ＳＰ84
遺物出土状況(南東から)



(1) 調子a1地区柱穴ＳＰ44
遺物出土状況(南から)

(2) 調子a1地区柱穴ＳＰ111
遺物出土状況(南から)

(3) 調子a1地区柱穴ＳＰ222
遺物出土状況(南から)

(1) 調子a1地区土坑ＳＫ200全景
（東から）

(2) 調子a1地区土坑ＳＫ200
遺物出土状況（北から）

(3) 調子a1地区土坑ＳＫ30
遺物出土状況（南から）

(1) 調子a1地区土坑ＳＫ41
遺物出土状況(東から)

(2) 調子a1地区土坑ＳＫ78
遺物出土状況(西から)

(3) 調子a1地区土坑ＳＫ175
遺物出土状況(南から)

(1)調子a1地区土坑ＳＫ181
遺物出土状況(東から)

(2)調子a1地区土坑ＳＫ181
完掘状況(西から)

(3)調子a1地区溝ＳＤ172全景
(西から)

(1) 調子a2地区全景(南から)

(2) 調子a2地区上層溝群(南東から)

(3) 調子a2地区掘立柱建物跡ＳＢ01
(北西から)

(1) 調子a2地区掘立柱建物跡
ＳＢ01柱穴Ｐ１（南から）

(2) 調子a2地区掘立柱建物跡
ＳＢ01柱穴Ｐ３（南から）

(3) 調子a2地区掘立柱建物跡
ＳＢ01柱穴Ｐ６（南から）

(1) 調子a2地区土坑ＳＫ21
（南から）

(2) 調子a2地区集石土坑ＳＸ31
（北から）

(3) 調子a2地区溝ＳＤ30（南から）

(1) 調子a2地区溝ＳＤ30断面
（南から）

(2) 調子a3地区全景（北から）

(3) 調子a3地区井戸ＳＥ01
（北東から）

京都第二外環状道路関係遺跡　図版第 18

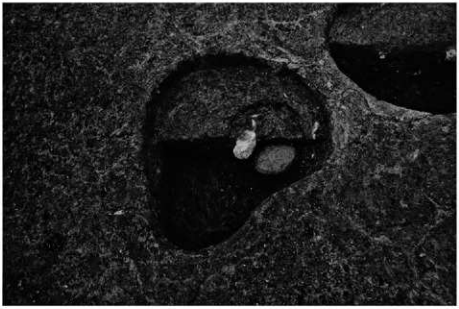
長岡京跡右京第 946 次調査

(1) 調子a4-1地区西部(東から)

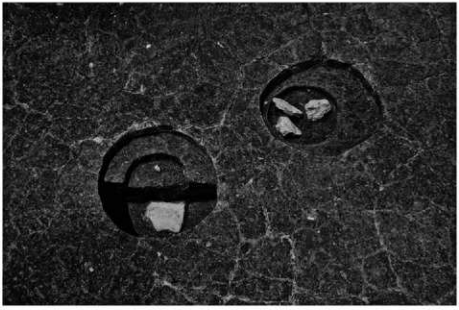
(2) 調子a4-1地区溝ＳＤ554
(東から)

(3) 調子a4-1地区土坑ＳＫ356～
358全景(南から)

(1) 調子a4-1地区柱穴ＳＰ351
（東から）



(2) 調子a4-1地区柱穴ＳＰ352
（東から）

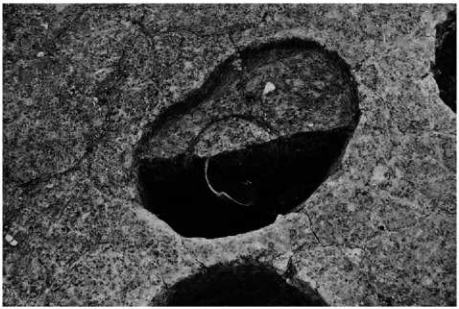


(3) 調子a4-1地区柱穴ＳＰ353・355
（東から）

(1) 調子a4-1地区柱穴ＳＰ354
（東から）

(2) 調子a4-1地区柱穴ＳＰ360
（東から）

(3) 調子a4-1地区柱穴ＳＰ467
（東から）



(1) 調子a4-1地区柱穴ＳＰ469
（東から）

(2) 調子a4-1地区掘立柱建物跡
ＳＢ01（西から）

(3) 調子a4-1地区掘立柱建物跡
ＳＢ01（北から）

(1) 調子a4-1地区竪穴式住居跡
S H562(南東から)

(2) 調子a4-1地区竪穴式住居跡
S H562・568(南東から)

(3) 調子a4-1地区竪穴式住居跡
S H561遺物出土状況(南から)

(1) 調子a4-1地区竪穴式住居跡
S H561(北西から)

(2) 調子a4-1地区竪穴式住居跡
S H561東隅部(北西から)

(3) 調子a4-1地区竪穴式住居跡
S H702(北から)

(1) 調子a4-1地区土坑ＳＫ565・566・640(西から)

(2) 調子a4-1地区土坑ＳＫ567(北から)

(3) 調子a4-1地区土器埋納遺構ＳＸ614(北から)

(1) 調子a4-2地区南部(西から)

(2) 調子a4-2地区北部(南から)

(3) 調子a4-2地区掘立柱建物跡
ＳＢ705(西から)

(1) 調子a4-2地区掘立柱建物跡
ＳＢ705柱穴Ｐ１（東から）

(2) 調子a4-2地区掘立柱建物跡
ＳＢ705柱穴Ｐ２（南から）

(3) 調子a4-2地区掘立柱建物跡
ＳＢ705柱穴Ｐ３（東から）

(1) 調子a4-2地区掘立柱建物跡
ＳＢ705柱穴Ｐ５（東から）

(2) 調子a4-2地区掘立柱建物跡
ＳＢ705柱穴Ｐ７（東から）

(3) 調子a4-2地区掘立柱建物跡
ＳＢ705柱穴Ｐ８（東から）

(1) 調子a4-2地区掘立柱建物跡
ＳＢ705柱穴Ｐ9(東から)

(2) 調子a4-2地区掘立柱建物跡
ＳＢ705柱穴Ｐ11(南西から)

(3) 調子a4-2地区土坑ＳＫ709
(北から)

(1) 調子a4-2地区土坑ＳＫ640
（南から）

(2) 調子a4-2地区土坑ＳＫ765
（北から）

(3) 調子a4-2地区土坑ＳＫ724
（東から）

(1) 調子a4-2地区土坑ＳＫ727
（東から）

(2) 調子a4-2地区土坑ＳＫ735
（東から）

(3) 調子a4-2地区土坑ＳＫ737
（東から）

(1) 調子a5地区全景(北から)

(2) 調子a5地区全景(南から)

(3) 調子a5地区井戸ＳＥ01
(南から)

1

2

3

8

13

21

29

62

34

33

74

183

288

出土遺物 1

346

345

344

340

389

334

398

出土遺物 2

270

245

309

310

318

313

314

315

312

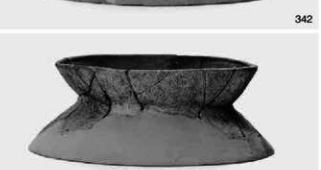
308

303

306

343

342


336

337

409

380

174

174

174

173

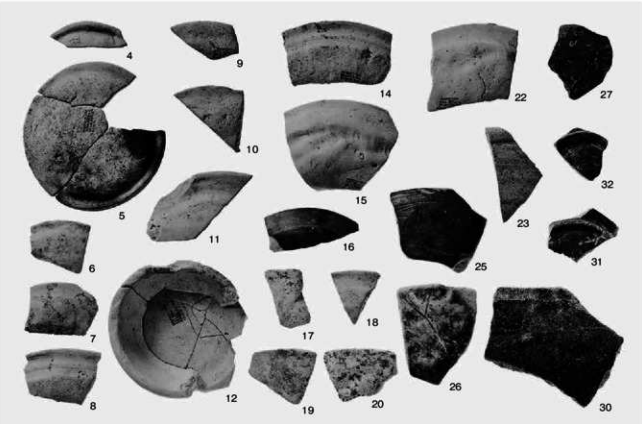
173

436

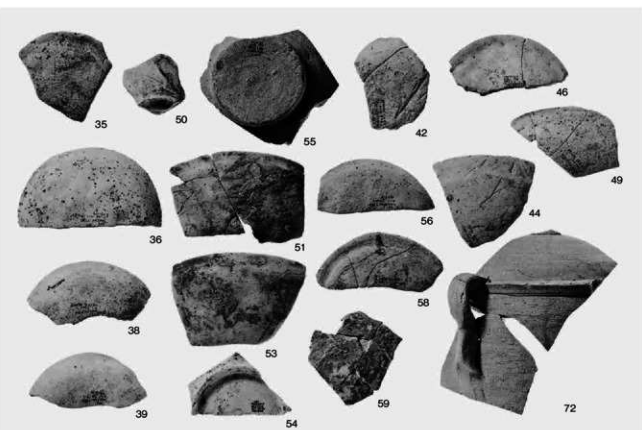
434

429

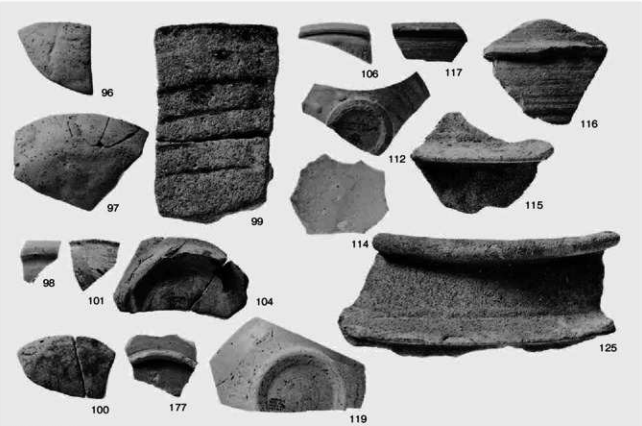
429



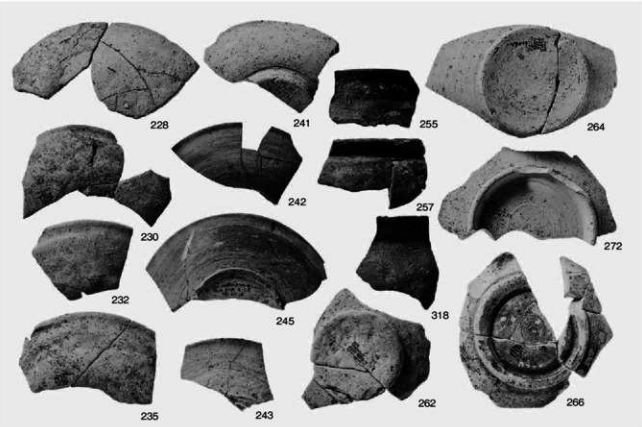
(1) 出土遺物 5



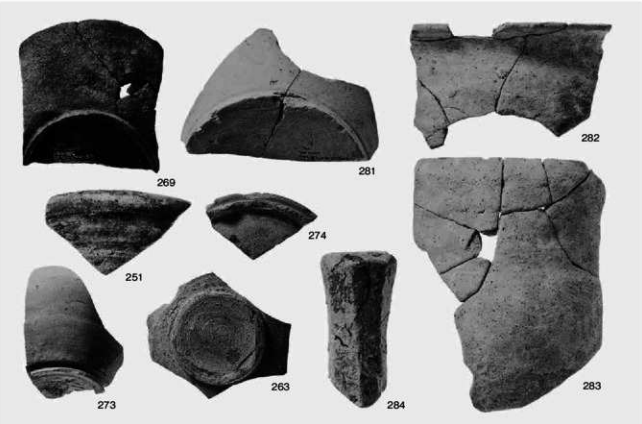
(2) 出土遺物 6



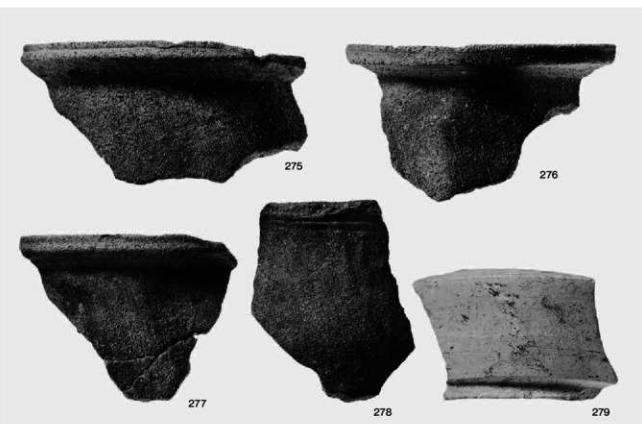
(1) 出土遺物 7



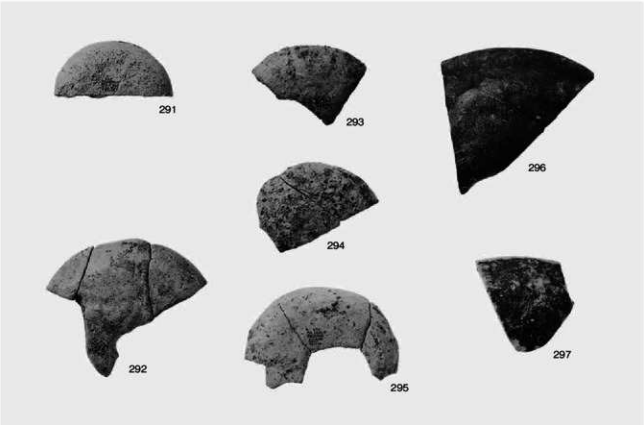
(2) 出土遺物 8



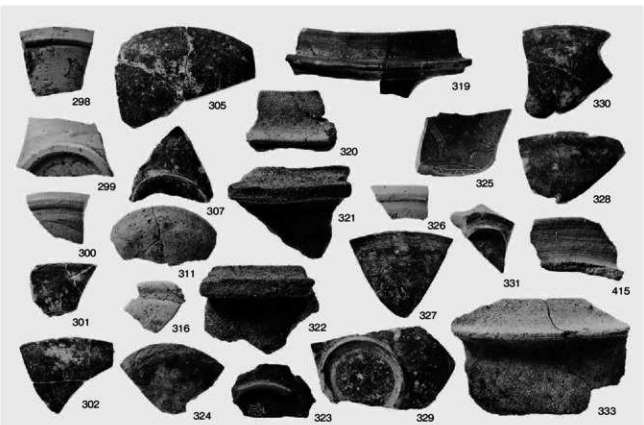
(1) 出土遺物 9



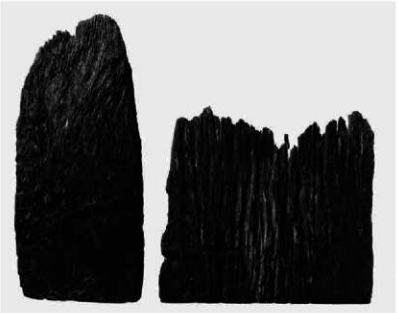
(2) 出土遺物10

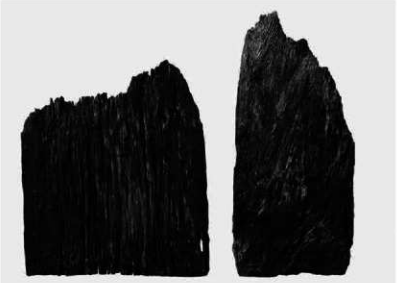


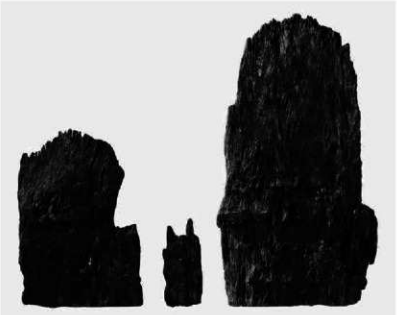
(1) 出土遺物11

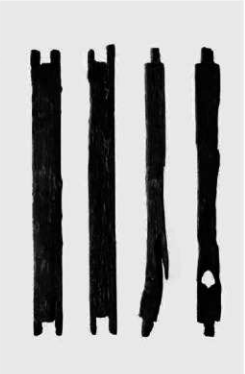


(2) 出土遺物12









井戸ＳＥ244部材

(1) 第20次調査地全景（北東から）

(2) 第20次調査地全景（西から）

(3) 第20次調査地全景（上が北）

(1) 第20次調査地全景(北西から)

(2) 第20次調査地重機掘削状況
(東から)

(3) 第20次調査地上層人力掘削状況
(東から)

(1) 第20次調査地上層全景（東から）

(2) 第20次調査地上層東部（東から）

(3) 第20次調査地上層土坑ＳＫ7003
（右：南から）

(1) 第20次調査地上層西部(東から)

(2) 第20次調査地上層掘削状況
(西から)

(3) 第20次調査地上層全景(東から)

(1) 第20次調査地上層足跡・Ｂ２区
（西から）

(2) 第20次調査地南壁東部土層断面
（北西から）

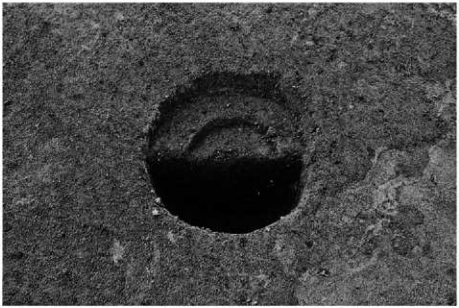
(3) 第20次調査地南壁東部
土層断面・噴砂と杭跡（北から）

(1) 第20次調査地南壁西部C２区
土層断面噴砂(北から)

(2) 第20次調査地東壁土層断面
(南西から)

(3) 第20次調査地下層全景(西から)

(1) 第20次調査地下層西部
掘立柱建物跡全景（南から）



(2) 第20次調査地下層西部
掘立柱建物跡柱穴（西から）

(3) 第20次調査地下層西部
溝跡全景（南から）

(1) 第20次調査地下層中央部
（南から）

(2) 第20次調査地下層中央部
土層断面（北から）

(3) 第20次調査地下層湿地調査状況
（北西から）

(1) 第20次調査地下層湿地土層断面
（北東から）

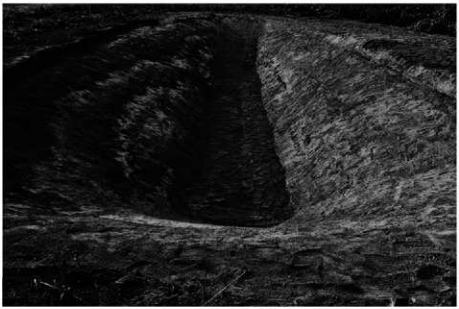
(2) 第20次調査地下層全景（東から）

(3) 第20次調査地下層湿地内
遺物検出状況（北から）

(1) 第20次調査地下層湿地内
馬の歯検出状況(北から)

(2) 第20次調査地下層湿地内
獣骨検出状況(北から)

(3) 第20次調査地下層中央～東部
(南西から)



(1) 第20次試掘調査地
第１トレンチ全景(東から)

(2) 第20次試掘調査地
第２トレンチ全景(東から)

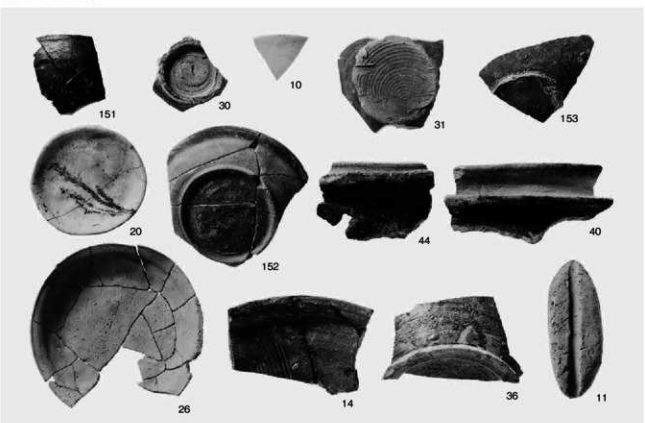
(3) 第20次試掘調査地
第３トレンチ全景(東から)

(1) 第20次試掘調査地第 4 トレンチ
調査風景(北から)

(2) 第20次試掘調査地第 5 トレンチ
断ち割り(北から)

(3) 第20次試掘調査地第 6 トレンチ
断ち割り(北から)

(1) 第20次出土遺物 1



(2) 第20次出土遺物 2

(1) 第21次調査地全景(北から)

(2) 第21次調査地重機掘削状況
(北東から)

(3) 第21次調査地全景(東から)

(1) 第21次調査地南壁土層断面
（北から）

(2) 第21次調査地上層西部（西から）

(3) 第21次調査地上層東部
（南西から）

(1) 第21次調査地下層調査状況
（北東から）

(2) 第21次調査地下層西部
（南西から）

(3) 第21次調査地下層東部
（南東から）

(1) 第21次井戸検出状況(南から)

(2) 第21次井戸土層断面(南から)

(3) 第21次井戸完掘状況(南から)

(1) 第21次土坑ＳＫ8046獣骨
検出状況（南西から）

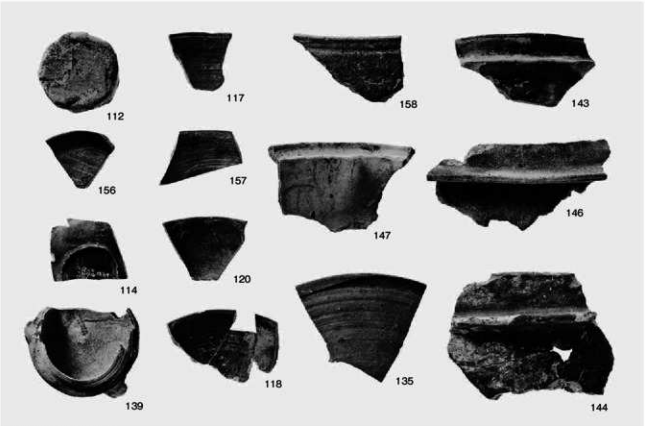
(2) 第21次土坑ＳＫ8040獣骨
検出状況（南西から）

(3) 第21次B 7区獣骨検出状況
（西から）

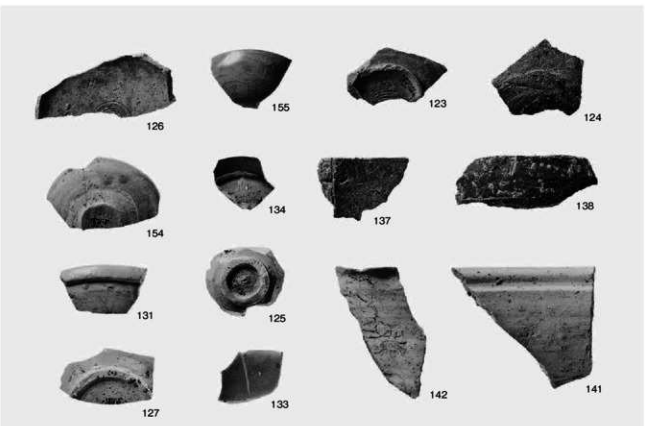
(1) 第21次獣骨検出状況(北から)

(2) 第21次調査地西部溝(北から)

(3) 第21次調査地西部溝断面
(北から)



(1) 第21次出土遺物 1



(2) 第21次出土遺物 2

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第145冊
編著者名	
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40-3　　Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2011年3月30日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
きょうとだいにそとかんじょうどうろかんけいいいせき　ながおかきょうあとうきょうだいきゅうひゃくよんじゅうろく・きゅうひゃくろくじゅうきゅう・せんろくじ	ながおかきょうしちょうしにちょうめ					20080617～20090217	3,220	
						20090408～20091222	2,230	
京都第二外環状道路関係遺跡　長岡京跡右京第946・969・1006次調査	長岡京市調子２丁目	26209	107	34° 54′ 35″	135° 41′ 25″	20100823～20101028	750（それぞれｂ地区を含む）	道路建設
きづがわかしょういせきだいにじゅう・にじゅういちじ	やわたししなで～はしもと					20071030～20080228	3,300㎡	
木津川河床遺跡第20・21次	八幡市科手～橋本	26210	4	34° 53′ 20″	135° 41′ 57″	20081113～20090302	3,000㎡	河川改修

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
京都第二外環状道路関係遺跡 長岡京跡右京第946・969・1006次調査	集落跡	弥生	竪穴式住居跡・土坑・溝	弥生土器・銅鐸形土製品・石鏃・石包丁・砥石・石錘	銅鐸形土製品
	集落跡	古墳	竪穴式住居跡	土師器	
	集落跡	平安	掘立柱建物跡・柵列・土坑・溝・柱穴	土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・無釉陶器・灰釉陶器・瓦・土馬・風鐸	
	集落跡	中世	掘立柱建物跡・土坑・溝・柱穴・井戸・木棺墓	土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・石皿・釘・貨銭	
	生産跡	近世	井戸	唐津焼	
木津川河床遺跡第20・21次		平安	湿地	獣骨・土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦	
	集落跡	中世	掘立柱建物跡・井戸・溝・土坑	土師器・須恵器・瓦器・備前・信楽・中国製磁器・瓦	
	生産跡	近世	溝	伊万里	

所収遺跡名	要　　約
京都第二外環状道路関係遺跡　長岡京跡右京第946・969・1006次調査	弥生時代の遺構としては、竪穴式住居跡や土坑を検出した。中期中葉の土坑から鐸形土製品が出土した。その内部から舌が出土しており、鐸身と舌が共伴した例として注目される。古墳時代の遺構は、庄内期と古墳時代前期の竪穴式住居跡を検出した。長岡京期には、右京九条一・二町に当たるが、遺物の出土は見たものの、関連遺構を検出することはできなかった。平安時代の遺構としては、溝内から平安時代前期から中期の遺物が多く出土した。隣接地の調査では、三重圏文軒丸瓦、平城宮式6663E式軒平瓦や凝灰岩片が出土しており、今回の調査でも瓦片、凝灰岩、風招などが出土しており、周辺に古代寺院の存在が想定される。12世紀以後、この地域では耕作溝や野井戸といった耕作関係の遺構があるだけで、居住域として利用されていなかった。平安時代後期には掘立柱建物跡や井戸のほか多数の柱穴・土坑を検出し、土地が安定したようである
木津川河床遺跡第20・21次	調査により、近世と平安時代前・中期の二面の遺構面があることが判明した。また、牛馬骨が多数埋没しており、自然死による埋葬・埋没もしくは、なんらかの祭祀が行われた可能性がある。中世段階には、田畑が形成されたようで、耕作に伴う溝が確認された。井戸や建物・構が見つかり、周辺に集落が広がっていた可能性もしくは、耕作地域内にある簡便な施設であった可能性が想定される。中世の耕作の採集段階に大地震があり、噴砂が各所で認められ、伏見大地震(1596年)に伴うものと判断される

京都府遺跡調査報告集 第145冊

平成23年3月30日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代)　Fax (075)231-7141